ボスを探して

高橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボスを探して

【Ｎコード】
Ｎ３６６７Ｒ

【作者名】
高橋

【あらすじ】
もしロケット団側にオリ主がいたら、という妄想です。拙い文章ですが、どうかよろしくお願いします。

一話

目の前には、滝が、轟々と唸るような音を立てながら流れていた。ここまでやっと辿り着いた、と感慨深げに滝を見つめる。今までの苦労を思うと、涙さえ流れ落ちそうだ。すると、滝の流れに逆らうように登る魚を見つけた。懸命に登っていたが、途中はじかれるように滝から落ちた。

滝が流れる先には、水辺があり、先ほど落ちた魚に似た妙に大きい金魚が優雅に泳いでいた。

可愛いなぁ、と思い見ているとあることに気づく。だが、それは大抵の魚類にはないものだ。有っていいものじゃない。

あ、なるほど幻か。苦し紛れに現実逃避してみる。確かめるためにメガネを持ち上げて、目を凝らして見てみる。その金魚は、普通の金魚の数倍はするであろう、並外れた体躯を持っている。そして体と同じ大きさの尾鰭をゆらゆらと優雅に泳いでいる。そして頭には白く鋭い角が確かにあった。

「ひいっ！」思わずに口から悲鳴がもれた。魚類が持っていいものではない。この目で見てしまった今、現実逃避すらできない。俺はそのまま後ずさり、壁にぶつかった。その衝撃によってか、今度はコウモリのようなものが、甲高い声を出しながら飛んでいく。

「ひいっっ！」もう泣きたい気分だった。そのまま座り込み頭を伏せる。何だよこれ。涙が頬をつたい地面に落ちた。苦労して水辺に来たのに、いたのは殺人金魚だ。一体どうなっているんだ。

数分ほど俯き泣くが、涙も収まり、その状態のまま何をするでもなくぼうっとする。しばらくそうしていると、緊張の糸が切れ、今までの疲れが出たのか、瞼が重くなり、急激に睡魔に襲われた。精神的にも体力的にも疲弊していた俺に睡魔に耐えるだけの力はなく、そのまま重力に任せるように瞼を落とした。

初めに感じたのは、布団の暖かさではなく、身を切るような寒さだった。

ここどこだよ。

この寒さを疑問に思い、辺りを見渡す。薄暗いので、夜かと思えば、そうではないらしく、見上げれば天井があった。着いた手からは、ゴツゴツとした感触が伝わる。これは寝心地悪いな、と暢気に考える。しばらく混乱していると、目が慣れてきたので、状況は理解できた。

今、俺は石の上で寝ているらしい。その石は、縦に三メートル、横に一メートル程もある歪な長方形のようで、ベットのようにも見えた。だが、無論俺は、こんな野性味溢れるベットで寝た覚えなどない。

慌てて昨日の記憶を探る。

昨日どこで寝ただろう。しかし、俺の記憶には、まったく引っかからない。おかしいと思いつつ、こんなこともあるか、と寝た場所を覚えていない自分を納得させて、別のことを思いだそうとする。

結果を言えば、寝た場所だけでなく、全てが出てこなかった。自分が誰か、何故ここにいるのか、まったく分からなかった。

この段階で、もしかして俺は記憶喪失なのだろうか、と思い始めた。

俺は頭を手で抱えた。

冗談じゃない、そんなことありえない。それを否定するような言葉が頭に流れる。もはや、それは、嘘であってくれという願いに近いのは分かっていた。だって、そうだろ。記憶喪失なんて漫画やドラマだけの世界の話だろ。自分が記憶喪失だなんて信じたくもなかった。

頭の中には、いくつもの疑問が浮かぶ。

以前の俺はどんな人間だったか？親の名前は？、友人の名前は？、家族構成は？無数の疑問を解決しようと記憶を検索する。

知らない。知らない。知らない。返ってくるのは、こればかり。結局、どの質問にも答えることはできなかった。考えれば考えるほど自分が記憶喪失だという可能性が高くなる。

刹那、一つの考えが頭をよぎる。

「そうだ！これは夢なんだ！」その可能性に思い至る。いくら低い可能性であっても、それにすがりたかった。声を張り上げたのは、夢だと信じきれない自分にそう思い込ませるためだったのかもしれ

ない。

「はっはっは！夢なんだよ、なんで気づかなかったんだ！」

不安を打ち消すように、そう自分に思いこませるように尚も声を張り上げる。

「夢なら、これで覚めろ！」最後の希望に全てを託し、悪夢を打ち払うように、自分の頬を殴る。

夢は覚めなかった。

嘘だ、嘘だ！、嘘だ！！

猛毒でも飲んだかのように、俺は暴れた。「これは夢だ！現実じゃない！早く覚めろ！」俺は、のどが擦り切れる程大声で叫んだ。解毒薬などありはしないのは分かっていた。だが、叫ばずにはいられなかった今の姿を誰かに見られたら、狂っているようにしか見えないだろう。

俺の叫びは、思っていた以上にこの空間に響き、自分の耳に届いた。そこで、俺はピタリと電池が切れたかのように動きを止めた。

自分の混乱の程に気づいたのもあるが、声が響き過ぎたからだ。

身じろぎ一つせず耳を澄ませた。

不気味な程の無音が俺の耳に届いた。

そういえば、ここどこだ？唐突に、身体を恐怖が支配する。自分が

今どんな場所にいるのかさえ、俺は考えていなかった。
このままじゃダメだ
冷静な思考が、やがて回復してきた俺は、行動を起こすことを決心する。取りあえず、状況を理解しようと思い、暴れたせいで、ずり落ちたメガネを右手で上げて周りを見渡そうとした。

メガネ？

右手に当たる感触で、今更ながら、自分がメガネを掛けていることに気づいた。メガネの存在に気づかないほど、混乱していた自分を理解し、苦笑する。いくらなんでも、慌てすぎだ。

改めてメガネを通し、瞳を動かす。

周囲には、岩が乱雑に置いてあり、人の手が余り入ってないこと感じた。上を仰げば、天井があり、そのせいか、薄暗い。太陽が見えないことは、俺の不安を倍増させた。さらに、自分の居る場所が、個室のように四方を岩肌の壁に囲まれていて、出入り口が、一カ所しかないのが、分かった。

とりあえず、ここから出よう。この薄暗い場所から、出ることが、優先事項だと思った。

元居た空間から出たが、目の前には、岩肌の一本の通路があった。

その道を進んでみたが、その通路は何度も曲がりくねっていて、俺の方向感覚を失わせた。相も変わらずに薄暗い道を進んでいるうちに、どこかの迷路にでも入ったんじゃないかと、俺に思わせた。一生抜け出せなかったらどうしよう。迷路で迷って死んだ、なんて不名誉な死に方はごめんだ。

歩いて数分が経ち、俺はあることに気づいた。この洞窟には、何かいる。それは、確信に近いものだった。時折、何かが叫ぶような、うめくような声が耳をついた。身近な場所でも何かが動く音がした。それは俺の恐怖心をこれでもかと煽った。どうしようもないほど怖くて、心細くて、手で耳を塞ぎ、不安を消し去るように、地を蹴った。

いくつかの曲がり角を曲がった後に俺は別れ道の前までたどり着いた。前方にある道は三つに別れていて、奥を覗いても黒く染まり、よく見えない。考えてもしょうがない。それを、俺は勘で進む。しかし、別れ道をいくつか通った頃に、嫌な予感が胸をよぎる。

もしかして、洞窟の奥に進んでる？
不安になってきた俺は、もといた場所に戻ろうと思い、後ろを向く。だが、何度も別れ道を勘で進んできた俺には、、今自分がいる場所がどこか分からなかった。不安を振り切るように前を向く。そして、再び走り出した。

ふと、遠くから何かの音が聞こえてくることに気づいた。走っていた速度を緩め、その場で止まり、耳を澄ます。

水の音？

本来なら、一番に探すべきものだった、と俺は自分がいかに混乱していたのかに驚く。そして、運良く水辺に近づいていた、自分の幸運に感謝した。　そして、満面の笑みで、俺は、音の響く方向に走り出した。

幾分か軽くなった瞼を上げる。空には、太陽が輝き、青い空には、雲が自由に浮かんでいる。ということはなく、黒い天井が光を遮り、一層心を暗くさせる。今が朝か夜かも、分からなかった。不自然な体勢で寝たせいか、身体中があちこち痛んだ。それを無視して、立ち上がる。

目の前の景色は寝る前とまったく変わっていなかった。それに多少落ち込むが、それ以上に俺は空腹だった。俺は、まだ何も食べていなかった。水辺に近づき、水を飲むのは可能だったので、水分補給だけは出来たものの、空腹だけは我慢できなかった。

「腹減った…」うるさい腹を押さえながら、俺は言う。孤独に耐えかねてか、一人言が多くなってきた。

「よしっ！」両手で頬を強く叩く。気合いを入れるように声を出す。

空腹も疲労もあるが、気合いで誤魔化す。ビリビリと痛む頬を無視して歩き出した。

俺は、今日の目標として、食料の確保と武器の確保を考えた。この洞窟には、強力なモンスターがいることを学んだからだ。

第一に、金魚みたいな奴である。勿論普通の金魚ではない。白とピンクの肌をしていて、全長三十センチ以上は間違いなくある。その上、白く鋭い角を持っている。これに刺されたら大怪我は間違いないな。と、どこか他人事のように考えた。

第二に、ピンク色のカバみたいな奴である。ゆっくりとしか動かないので、ノロマな奴、と思って見ていたら、ひとにらみで岩を持ち上げたのには驚かされた。あの調子で俺を持ち上げられ、岩にでもぶつけられたら俺は死んでしまう。よくて、大怪我だ。

その他にも多く発見したが、これ以上挙げたら切りがない。こいつらに負けないためには、遠距離で戦うしかないと俺は考えた。

その理由として、いくつか挙げる。まず、対金魚において、危険なのはあの角だけだ。もしあの角に突かれたら、当たり所次第では、死んでしまう可能性がある。しかし、所詮は魚類。ある程度距離をとれば、勝てるだろう。とんでもない跳躍力を持っていたり、遠距離の攻撃手段を持っていれば別だが。

対カバは少しやっかいだ。距離をとっても近づきすれば、あの超能力にやられてしまう。だが、あのカバはノロマだ。超能力の範囲を見極めれば勝てるだろう。

まぁ、こんな理由である。そのために俺は手頃な石を探していた。

遠距離ならこれしかないと考えた結果である。そのために、頭を下げて歩いていた。

視線を下げて、いい石を見逃さないように注意深く歩いていたのだが、それが災いして曲がり角に気づかずに岩でできた壁に頭をぶつけてしまった。

「痛っっ！！」

壁にぶつかり、尻餅をつく。痛む頭を押さえながら立ち上がろうとして、手に何かが触れているのに気づく。

視線を向けると、それが球体の物であることが分かった。だが、砂にまみれていて、よく分からない。手で砂を落とすように払い、それが何か見えてきた。

下半分が白く、上半分が赤い。そして、赤と白を分ける線の中心には、丸いボタンがついたなんとも奇妙なボールである。

なんだこれ？

内心疑問に思いながら、そのボールを持ち上げる。顔を近づけてじっくり見てみても、これが何なのかさっぱり分からない。

中心の丸いボタンを押せば何か起こるのか？

強い好奇心が心の中に沸き上がる。警戒心も顔を出すが、好奇心に打ち負かされる。おもしろい物を見つけた、と期待に胸を高鳴らしてボタンを押した。

その途端、ボールが急激に膨らんだ。今まで楽に手中に収まっていた物が、硬球程まで膨らみ、手から零れ落ちる。

落ちたボールは地面で一度バウンドして、転がり出す。

少し驚くが、まぁこんなものもありか、と納得する。感覚が麻痺していると思わないでもない。だが、便利だとは思った。持ち運びは楽だし、大きくして投げれば、武器にもなる。いいものを見つけた、と俺は期待に満ちた顔で笑う。ボールを追いかけて右手で掴む。そして、もう一度ボタンを押して小さくしてから、ポケットにいれた。いくつかの石とボールを持って、再び歩き始めた。しかし、足取りは軽くない。精神的にも身体的にも、俺は疲弊していた。

結局食料は手に入れられなかった。奇妙な生物は度々目撃したが、俺に倒せるとは思わなかった。
もし倒せても、俺に生物を殺せるかも分からなかった。

足は、長時間歩き続けたせいで、棒のようだった。頭は、空腹と疲労で、思考能力が確実に低下していた。

腹減った、疲れた
それ以外何も考えられなくなって来た。精神も肉体も疲れているのが分かった。一日中歩き続けた上に、碌に睡眠も取っていない、さらに腹も減っている。それで元気な方がおかしいだろう。それでも進まなくてはならない。俺はただ惰性で足を踏み出した。

そこで、何かが衝突する音が聞こえてきた。光に導かれる蛾のように、俺は、その音に引き寄せられた。

そこには、一匹の倒れたモンスターと一匹の化け物と一人の人間がいた。倒れているのは、七十センチ程の横たわっているネズミである。前歯は鋭く、噛みつかれたら、腕までちぎれてしまうんじゃないかと想像させた。
それを倒したであろう化け物は紫色の身体で腹の部分だけ白く、体長は人間を軽く越えている。身体はごつごつしていて、長い尾と短い角を持っている。まるで怪獣だと思った。

「誰かは、知らないが、ここはきみのような子供がくるところじゃないぞ」
その背後にいたおじさんが、こちらに気づいたのか、振り返りそう言ってきた。

そのおじさんは、この場にそぐわない妙に整った服装で、目は鋭く俺を観察していた。

二話

十メートル前には、紳士のような姿をしたおじさんがいた。顔は悪だくみでもしていそうな悪人面だ。黒色のスーツを着こなし、頭にはスーツと同色の帽子をのせている。

こんなところに場違いな格好だなと思うが、こんな洞窟に軽装でいる俺も場違いかと自嘲する。

おじさんは、視線鋭く俺を見ていた。やっぱりこんなところ一人で居る俺は怪しいか、自分が観察される理由も分かるのでされるままにする。

やがておじさんは、さっき俺が見つけたようなボールを取り出して、驚くことにその中に怪物をしまった。どんな構造してんだ？ボールの大きさが変わるだけでも驚いたのに、ボールの数十倍はある巨体を閉じこめたのは、魔法にしか見えなかった。

「何か言ったらどうだ？」何も言わない俺を不審に思ったのか、おじさんは、不思議そうに俺を見て催促するように言う。

怪物をボールに閉じこめたことに驚き、口を開いたまま動きを止めていた俺は、その言葉でやっと動き出した。

「えっと、あの、」

どうしよう、何聞こう。聞きたいことが多すぎて中々言葉に出来ない。頭の中では、いろんな言葉が回る。だが、その中の一つを選択できない。

「こ、こ、こんにちわ！」

やっぱり挨拶が一番最初だ。結局これを選んだ。会話はキャッチボール。それなら返しやすい挨拶から投げるべきだろう。だが、人と喋るのは、久しぶりで、うまくのどが動かない。掠れてしまい、うまく相手に届いているか不安になる。

「ああ、こんにちわ、中々礼儀正しい子供だな。」

にやり、と口元をつり上げ笑い、挨拶を返してくる。どことなく悪役のような笑い方だった。

「それなんですか？」俺は、おじさんの手にある物を指さして言う。こんな魔法のような物があるとは、信じられない。だが、目の前で繰り広げられた光景を見ると、信じないわけにはいかない。それなら、これが何なのか知りたかった。

「モンスターボールだが、知らないのか？」おじさんは一度自分の手にある物を見てから、疑いのまなざしで俺を見た。

「えっと、はい」

少し考えてから、正直に言ってみた。確かに一つ持っているが、怪物を収納できる、魔法のようなことができるなんて知らなかった。名前も初めて知ったし。

「ふむ？君はポケモンは知っているだろう？」当然知っているようなとでもいうような口調でおじさんは言う。

「えと、全く知りません」当然知らないのでそう言った。その瞬間、驚愕と疑念を混ぜたような顔でこちらを見てきた。つり上がったその瞳は俺をビクつかせる。俺そんな不味いこと言ったか。少し不安になる。

しばらく、顎に右手をあて考え込む仕草をした。そして、再び口を開いた。「君は、見たところ十二、三歳だろう。ポケモントレーナーではないのか？」

「ち、ちがいます！」
ポケモントレーナーになんてなった覚えがなかった。ていうか、初めて聞く単語だったし。

「だが、ポケモンぐらいは知っているだろう」呆れるようにおじさんは言った。

「いや、その、えっと」ポケモンとは、あの金魚やカバみたいな奴だろうか。ポケモン自体知らないので、何も答えられない。悪いことをしている気分になり、俺は下を向き俯いた。

「知らないことはないだろう。ポケモンは世界の至る所に存在する。君はポケモンのいない世界から来たとでもいうのか？」
おじさんはしゃれた冗談でも言ったかのように軽く微笑みながら言う。俺は反応できずに下を向き続ける。ポケモンなんか知らないし、

もしかしたらそうかもしれないと思ったからだ。

「それにポケットから見えるそれは何だ？モンスターボールではないのか？」子供の悪ふざけに付き合う大人のように、笑いながら指を指す。

視線を下げるとポケットからは、赤と白の球体、モンスターボールが僅かに顔を出していた。

「いや、そうなんですけど違うんです！」

必死に弁解しようとするも、うまく言葉が出てこない。

「まあ、いい。」

必死な俺を諌めるように手を降る。よくなんかない。誤解されたまま終わらせたくない。そう思うが、言葉はのどの奥に引っ込んだままだ。

「話は変わるが、君はロケット団を知っているか？」

この質問には、嘘は許さないとでも言うような真剣な目で俺を見てきた。それに少しひるむ。

「すいません、知りません。」頭を左右に振り、そう答える。そう答えるしかなかった。この場で嘘を言っちゃいけないことだけは分かっていた。だから、本当のことを話した。

「そう、か。」

少し、悲しそうな顔でおじさんは言った。このおじさんにとっては、大事な質問だったのだろうか。それなら、俺は、このおじさんを傷

つけてしまったことになる。どうしよう。謝ったほうがいいのだろうか。

「私はこれでも忙しいんだ、さよなら坊や。」
そう言っておじさんは、俺を押しのけて、この場を去ろうとした。

「あ、あの、俺、記憶喪失みたいなんです！」見知らぬ人だけど、ここで動くかなくちゃだめだと直感で感じた。

「誰か知りませんが、助けてください、お願いします！」
そう言って頭を下げる。この人しかいないから、お願いしているのではなく、この人だから、頭を下げた。この人ならなんとかしてくれると思った。
ようは、俺は初対面のこの人にただならぬ何かを感じ取っていたということだ。

自分でもおかしいと思う。この人とは、初対面だ。それとも、以前の俺はこんなにホイホイと人を信じてしまっていたんだろうか。そんなことはないと信じたい。

初めて見たときは憧れを覚えた。怪物の後ろにどうどうと立ち、怪物を従わせる。あんな金魚にビクビクしてた自分が小さく見えた。

そして、目の前にいる彼が、途方もないほど大きく見えた。

この人ならなんとかしてくれる。素直にそう思えた。

「何でもしますから、どうかお願いします！」

頭を地に擦り付けて、必死に声を出す。思いを全て絞り出すように。

緊張しながら、じっと身体を動かさずに返答を待つ。

だが、足音は一瞬止まるも、その後は止まることなく遠ざかっていった。

その場に倒れ込む。身体は大の字にして地面に背をつけた。ダメだったか。心の内では、後悔ばかりが顔をだす。あの時ちゃんと答えていれば、もっと心を込めて話していれば。

その内に、自分が何も食べていないことを思い出した。
あのおじさんと話している間は、緊張のため空腹のことなど忘れていた。
思い出したせいか、急激に空腹を感じた。

腹を抱え丸くなる。精神の糸が切れたのか、めまいも感じるようになってきた。

本格的にまずいだろ。弱気になり始めた俺の心に反応するように、瞳には涙が溜まってきた。

メガネを乱暴にはずし、涙が流れる前に手で拭う。

もうここで死ぬかもしれない。悪い方にしか頭が働かない。

それもいいかも、と受け入れている自分がいる。

そのまま、瞼を落とし眠ろうとする。これが永遠の眠りになるかも、と思うも、疲れきった俺の身体は睡眠の準備を整えていく。

そして、深い眠りに落ちた。

突如背中に衝撃を覚えた。俺は跳ね起き、その原因が何か慌てて確認する。

足だった。

誰の足だ？と思い足から腹、胸と、だんだん上を見ていく。

「生きているか？」

悪人面のおじさんがそこにはいた。

二話（後書き）

ありがとうございます。

三話（前書き）

よろしくお願いします。

三話

「おじさん！」
眠気は吹き飛び、目頭が、カッと熱くなる。何で戻ってきたのかは分からないが、戻ってきてくれたという事実が嬉しかった。泣いたばかりなのに、涙が再び目尻に溜まり出す。

「よお、さっきぶりだな。」おじさんは、ニヒルに笑いながら、俺を見下している。下から見上げたら、ほんとに悪役っぽかった。

「なんで、なんできてくれたんですか？」疑問に思ったことを口にする。見捨てられた、もう会えない。そう思っていた。

「確かに、私に君を助ける義理はない。私もそこまで善人ではないしな。」自嘲するように口元だけで笑う。その笑い方はこの人には似合うなあ、と思った。

「ならなんでですか？」そこまで言うなら、なんで来てくれたのか疑問に思う。

「最後に聞いたな、ロケット団を知っているか、と。」
おじさんの鋭い視線が俺を貫く。声色は、重く、固い。ロケット団のことを話す時だけは、相変わらず真剣だ。さっきも聞いたが、それがどう関係しているんだろう。

「知らないなら説明してやる。」まったく知らないから、ありがたかった。

「ロケット団とは、秘密結社の名前だ。」

冗談かな？と思い顔を見つめるが、表情は変わっていない。本当らしい。秘密結社？まったく予想していなかった。ロケット製造会社位にしか、考えていなかった。

おじさんの顔は過去を懐かしむように和らぎ、誇るように話し出す。だが、一割ほど隠しきれない怒りが混ざっていた。

「様々な場所に暗躍し、利益を上げていた。構成員は末端まで数えると数え切れない。だが、全員に共通しているものがある。それは、彼らは、本気で考えていたんだ。自分たちなら世界を征服できると。」

世界征服？現実離れし過ぎていて、中々飲みこない。俺にはスケールが大き過ぎた。その一方でやっぱり秘密結社なら、世界征服か、とどこか納得してる俺もいた。変な所で記憶持ってるな、俺。自分の記憶喪失の不完全さを疑問に思う。

「世界征服。いい大人がなにを言っている。そう思うかい？」
そう言って俺に話を振ってくる。俺はぶんぶんと首を横に振る。そんなこと言ったら殺される。それに、そんなこと思わない。かっこいいとさえ、俺には思わえた。

「そうか、ありがとう」そう言って嬉しそうに薄く笑う。自分の夢とも言うべき物を馬鹿にされれば怒るかもしれないが、肯定されて怒る人間はいないだろう。

「途中までは上手くいっていたんだよ。そしてこのまま何事もなく進むと誰もが信じていた。」

途中までということは、結局ダメだったのだろうか。世界征服目指

した男は、大抵ヒーローに倒されてしまうのがオチだ。そう思うも話から耳がはなせなかった。

「だが、ある一人の少年がロケット団の前に立ちふさがった。」静かに話すおじさんだが、怒りを必死に押し込めているのが分かる。表情には出さないが、拳を血が出るのではないかと心配するほど握りしめ、顔は無理に平静を保とうと強ばっており、逆に不自然だった。そこからは隠しきれない怒りをひしひしと感じた。

一人の少年だけでこうもなるものなのか、と疑問に思う。

「その少年は強かった。立ちふさがる全ての敵を乗り越えた。」

「そして少年は、ロケット団のメンバーすべてを倒し、最後にはそのトップにまで剣を向けた」

それを語るおじさんの顔は未だ無理に平静な顔を保とうと歪み、拳を握り締めたままだ。どれほどの怒りか。その怒りすべてを向けられる少年に同情したくなる。トップとそのトレーナーの戦いはどうなったんだろうと思うも、話の流れから理解できた。

「世間のいい笑い種さ、僅か十歳の少年に壊滅された組織、とね。」やっぱりヒーローに負けてしまったのか。おじさんは苦々しく笑った。その笑い声は、いやに、この洞窟内をこだまする。確かに、と心中で同意するが、おじさんの悲しそうな顔を見ると口に出せない。記憶がなくてもこういうのは分かるのか、と実感する。

「そして、そのトップは自らの弱さを感じ旅に出た。今度は、誰をも寄せ付けぬ強さを手に入れ、ロケット団を再興させるために。」おじさんの目には、妖しく禍々しい光が灯った。その輝きは、危険だがそれでも魅力的な色合いをしていた。その目が俺を貫く。

「今、私は仲間を集めている。」
話が大詰めに向かってきた。そろそろ本題に入るのだろう。怒りは消えていて、今は落ち着いている。

「ロケット団を再興した時に必要な、誰にも負けぬ強さを持ち、決して裏切らない強い忠誠心を持つ仲間を。今度こそ、世界を征服するために。」
静かに、自分の言葉を噛みしめるように話すおじさんの言葉は俺の心をいちいち貫いた。

「数は力だ。だが、それをまとめ上げる指導者が必要だ。ロケット団が壊滅したのは、トップである私の責任だ。いずれ、力をつけて私はロケット団を再興する。どうだ、共に来ないか？」

どうしようもなく魅力的な誘いだった。断る理由もない。

「ああ、それと君を助ける理由だが」
付け加えるように言う。

「見知らぬ誰かなら見捨てるが、共に歩む同士ならば、見捨てるわけにはいかんだろう。」

元々俺の心は決まっていた。最初に見た時から、彼に引きつけられているのは分かった。こういうのをカリスマ性というんだろうな、と納得する。

彼に出会わなければ、俺はここで死んでいたかもしれなかった。彼に着いていくことで未来は開ける。

これは直感だが、それほど間違っていないだろう。

つまり、俺が断る理由などどこにも存在しない。

「はい！ついていきます！」

三話（後書き）

ありがとうございました。

四話

「君は、おっと、そういえば自己紹介がまだだったな。」
はっと思い出したようにおじさんは言う。そういえばそうだな、と俺も名前を知らなかったことを思い出す。これから名前を知らないのでは不便だろう。名前を呼ぶときとか。

「その前に、ちょっといいですか。」
恐る恐る口を開く。もっと大事なことが先にあった。

「何だ？」
訝しげにそう言って、俺を見つめる。どうしよう、言っていいのかな？心の内には、心配性な自分がいた。言ったら怒られるかも。あきれられたらどうしよう。そんな心配性な自分を押さえつける。自分の限界が近いことは、分かっていた。

よしっ！気合いを一つ入れて見つめ返す。言うぞ、絶対言うぞ。

「なにか食べ物持ってませんか。しばらくなんにも食べてなくて。」

言った、言ったぞ！心の内で、自分を褒める。顔は赤くなってないだろうか。耳まで赤くなってるように感じた。

「食べ物？ああ、分かった。」一度呟くように口にしてから、了承した。それに心底安堵する。よかった。あまり失望させたくなかっ

た。

おじさんは自分のポケットを何かないかとあさる。やがてなにか見つけたのか薄く四角い箱を取り出した。それを俺に投げて渡す。軽い放物線を描きながら飛んでくる箱をもたつきながらも何とかキャッチする。

なんだこれ？と思いながら箱に書かれたロゴを見つめる。そこには、カロリーメートと、でかでかと書かれていた。箱を開く。中には包装に包まれた棒のようなものがあった。涎が口内に流れ出す。かぶりつく。口いっぱいに味が広がる。水が欲しくなると思ったが、異常な量の涎がそれをカバーする。一口一口を味わうように食べた。

あっという間に食べ終わっていた。

俺が食べ終わったのを見計らい、おじさんはくるりと後ろを振り向き、歩き出す。一歩一歩離れていく後ろ姿を眺める。コツコツと規則正しい足音が辺りに響く。こういう背中は絵になるなぁと感動しながら小さくなる背中を見つめる。十歩程歩いた所で振り向く。

「何してる、付いてこい　。」座ったままの俺を見て、呆れたように口を開く。呆れさせてしまった。俺は、慌てて立ち上がる。ごみを片手に握り、足をもたれさせながら、その背中を追いかけた。

悪い足場の中、おじさんの三歩後ろを歩いた。数分間歩いて、やっと着いたのかおじさんの背中が止まる。それに気づき、その背中に合わせるように俺も止まる。

おじさんが大きい横穴に入るので、俺も入る。

横穴を抜けた先には広い空間があった。隅にはラジオがちょこんとおかれているが、それ以外に目立つ物は見あたらない。ここで暮らしてるんだろうか。

「この洞窟にいる時は、いつもここにいる。人があまり来ないからね。」唐突におじさんが話し出す。話しながらも歩みは緩まず、手頃な石を見つけてどかっと腰を下ろした。俺は、その場に立ちつくす。

「さて、そろそろいいだろう。私の名前は、サカキ。元ロケット団ボスで、元ジムリーダーだ。」

元ロケット団ボスだというのは分かっていたが、元ジムリーダーでもあるのか。ジムリーダーが何か知らないが、きっと名誉あるものなんだろう。サカキさんは、そう言って、こちらをじっと見つめていた。あ、そうか今度はこっちの番か。

「俺の名前は、えと、分かりません。気づいたらこの洞窟にいました。たぶん、記憶喪失です。」嘘偽りなく言ってみたが、どうしよう。ほとんど何も言ってないじゃん。余り情報を与えてないことに気づき、ビクビクとサカキさんの顔を確かめる。

「ん、ああ、そうだったな。しかし名前がないのか。」思い出したのか、顎に手をあて納得するように頷く。そして名前か、と一度呟

いた。

「まぁいい。これからはお前もロケット団の一員だ。ある程度常識を学べ。」

そう言って、ポケモンについて、ポケモントレーナーについて話し出した。

「よし、先ずはこれぐらいか。覚えているか復唱してみろ。」

サカキさんは、そう言って話を切る。話はありがたいことに必要な情報ばかりだった。そのため最後まで集中して聞いていた。だが、頭はパンク寸前だ。これ以上は入らない。

「え〜と、ポケモンは今でも新種が発見されていて、数え切れない。タイプ毎に分類されていて、相性がある。あと、ポケモン毎に特性がある。」

合っているか、とサカキさんの表情を確かめる。サカキさんは、腕と足を組んで、目をつむり、話を聞いている。

「次は？」

サカキさんは、次を促すように口を開く。

「ポケモンを使役して戦うポケモントレーナーというのがいる。ポケモントレーナーになるには、モンスターボールでポケモンを捕まえる必要がある。」

「えっと、これぐらいですか。」
記憶を絞り出して、覚えてる限りは言ってみた。あってたかな？俺は不安にかられながらサカキさんを見た。

「抜けているところもあるが、まぁ、大体は合っているな。」安堵のため息が漏れる。駄目かと思った。百点ではないようだが、七十点は取れたようだ。そう安心していたのだが、話には続きがあるようだ。

「分かってると思うがこの世界で最強の武器は、ポケモンだ。」
それは、嫌というほど実感していた。俺一人じゃ金魚も危ない。ある程度のポケモンには、拳銃で対応できるかもしれないが、破壊光線やかみなりを使われて簡単に人間は死んでしまう。

「仮に敵がポケモンを使ってきたら、お前はどうする？」サカキさんと共にいた怪獣のようなポケモンと戦う自分をイメージする。石を投げて遠くから戦うも、相手は無傷。接近戦をしようものなら、一瞬で叩きのめされる。全然ダメだ。ああっ、それなら。

「こちらもポケモンを使う。ですか？」
これが正解だと思った。大抵のポケモンは強力な武器を持っている。人間なんか、勝てるわけがない。なら、こちらもポケモンを使えばいい。

「そうだ。そういうことでお前には、ポケモントレーナーになってもらう。」これは決定事項だとでも言うような口調だった。でも嬉しかった。俺が憧れた、あの時のサカキさんに少しでも近づける。
サカキさんが言わなければ、俺から言っていた。
サカキさんはそのまま無言で一つのモンスターボールを投げてきた。あぶなげなく捕まえる。

「なんですか、これ？」疑問に思い、聞いてみる。どうしろというんだろう。

「私からのプレゼントだ。ボールから出してみろ。」

取りあえずボールから出してみよう。ボールを膨らまし、振りかぶって投げる。ボールは一瞬光につつまれ、何かを出した。そしてボールは勢いよく手の中に戻ってきた。慌てて掴む。

目の前には、コウモリがいた。甲高い声をだしながら、空を縦横無尽に飛び回っている。開いた口からは、鋭い牙が見える。

「そのポケモンは、ズバット。今日から君のポケモンになる。強くなるかは、君次第だ。」

五話

耳に響くような、鳴き声を上げるコウモリは、中々強く見えない。ほんとに強くなるのかは疑わしいが、サカキさんが言うなら立派に育ててみようと思う。サカキさんは、余りこういう嘘はつかない人だろうし。仮に弱いままでも、使いこなしてやるという、どこからきたのか分からない自信があった。

することもないので、ボールに戻す。嫌がる素振りもせずに、ズバットはボールに吸い込まれた。

「そのズバットは、君の指示に従う。鍛えれば君の力になるだろう。」

サカキさんは、そう言った。話は続く。

「しばらく、戦ってくれればいい。だが、まだそこまで強くないからな、弱そうな奴と戦え。」

そう言って、追い払うように手を振った。願ってもないことだ。早く試してみたかった。気持ちが高揚しているのが分かった。

「はい、ありがとうございます！」

一礼して、走り出す。心のざわめきを抑えることができなかった。

水辺には、ピンク色のカバがいた。あれもポケモンなのだろう。壁に隠れながら盗み見る。サカキさんの教えを思い出す。あれは、超能力、もといねんりきを使うのでエスパータイプなのだろう。それ

に、水辺にいるから水タイプかも。サカキさん曰く、ズバットはあくタイプのかみつく、という技が使えるらしい。相性の上では、勝っている。

「いけ、ズバット」

小声で横にズバットを出す。ズバットが鳴きながら現れる。ズバットは目がない。いちいち甲高い声を出すのは、超音波で周囲を確かめているらしい。そうサカキさんが言ってた。

ズバットの声が大きかったので気づかれたかと思い、カバを見つめるも、暢気にあくびをしている。

なんかいけそう。そのノロマさを見て、自信が湧いてきた。サカキさんがくれるポケモンが、こんな奴に負けるわけがない。いつの間にか握っていた拳を解く。手のひらは汗ばんでいた。手をズボンで拭い、ふう、と気持ちを落ち着けるために一つ深呼吸をする。

「いけズバット、かみつく！」

俺の指示に従い、ズバットが、翼をバタバタとはためかせて飛んでいく。カバを未だ気づかずに、ぼうっとしている。そして、ズバットがカバの背まで辿りつき、牙をぶすりと指す。カバはびくりと身体が震わす。さすがに痛みは感じるらしく自らの背を噛むズバットを睨んだ。ズバットもそれに気づき、警戒するように離れる。

「ズバット、もう一度かみつく。」

指示を出すも、かみつこうとした瞬間、びりっと痺れたように動きを止める。なんだ、何が起きた？予想外の自体に心が揺れる。

「かみつくだっ、ズバット！」

やはり、動かない。というより動けないように見える。何をされた

か分からないが、違う技なら利くかも。と動揺を抑えつけて、別の技を試す。

「じゃあ、つばさでうつ！」

するとズバットは俺の指示に従い、空中から翼を広げぶつかりにいく。

動けるようになったようだ。なにが問題だったのだろう。

一瞬の戦いだった。

一瞬すれ違うようにぶつかり、どさっとカバが倒れる音が響いた。

勝利の喜びに、全身が熱くなる。血が沸騰してるんじゃないかと感じるほどだ。その熱さを放出するように叫んだ。

「よっっしゃあ！」

その叫びが洞窟内を割らんばかりに響きわたる。負けるんじゃないかと、不安だった心配だった。勝ったときは、嬉しかった。その全てを乗せて叫んだ。ズバットも俺の心と同じように嬉しそうに飛び回っている。

叫んだことで幾分か落ち着けたので、少し冷静さを取り戻す。やりましたよ、サカキさん。倒せました。今すぐ報告しにいきたくなる。思わず、にへらと頬が緩む。ポケモン勝負っておもしれ～。ドキドキしたしワクワクした。その上、勝利の味は格別だった。ポケモントレーナーをする人の気持ちが、よく分かった。もっと戦いたい、

あの高揚感をもう一度味わいたい。逸る気持ちを抑えながら、別のポケモンを探しに歩き出した。

「戻りました　！」
顔満面に笑みを浮かべ、そう言った。あの後にも何匹かのポケモンと戦ったが、勝ったり、負けそうなら逃げたりした。なんとなくだけど、戦う内にズバットが力強くなっていくのが分かった。こうやって強くなっていくのか、とポケモンのことが少し理解できた。

サカキさんは俺が出た時と同じ石に、足を組んで座っていた。ずっと座っていたんだろうか、と疑問に思うも、どうでもいいか、と頭から追い出す。

「よし、じゃあ行くか」
立ち上がって、誘うように俺に言う。どこに行くんだ？何か言われてたっけ？自分の記憶を探るも覚えていない。とりあえず合わせとこ。そう思い後を追った。

太陽は燦々と光を注ぎ、暗闇になれた俺の目を痛めつける。まぶし

さを感じ額に手をあてひさしを作る。今は昼らしい。洞窟は太陽の光が殆ど届かないので、時間が全く分からなかった。洞窟は水辺を越えた先に出入り口があったらしく、ポケモンの背に乗ることで越えられた。洞窟を出たことに感動を覚えるも、叫ぶのは迷惑かと思い自重した。もっとも、心の内では叫んだが。

サカキさんは、モンスターボールを出し、一体のポケモンを出した。そしてその背に乗る。後ろいる俺を振り向き、早く乗れ、と促すように俺を見る。慌ててポケモンの背に乗る。ポケモンは、それを確認して飛び去った。

着いた場所は、何もないような街だった。ちらほらと家が見えるが、数は圧倒的にすくない。出歩いている人間も少なく、活気があるとは、言いづらい。

「つまらん、街だろ。」
あれの心を読んだかのように言った。びくりとするも、別に俺の心を読んだ訳じゃないらしい。

「だが、それがいい。」
どんな意味か、考えてみる。静かな街が好きなのかもしれない。正体がばれたらまずいからか。考えても結論はでない。

「そこだ。」
サカキさんの目線の先を追う。見ると、そこには、旅館というにはは烏滸がましい宿があった。そこまで新しくはなく、古くはない。特徴と言う物がなかった。そこで、合点がいった。今日の寝床か。

宿に入ると、年輩のおばさんが出迎えてくれた。これまた、特徴がない。
「いらっしゃい。電話通り、二部屋用意しておきました。」
うやうやしくお辞儀をして話し出す。いつの間に電話したんだ、と思うも、結構機会があったかと独り納得する。おばさんは二つ鍵を差しだし、何かあったら言ってくださいと言い、下がった。

サカキさんは、二つ鍵を受け取り一つを俺に差し出す。そして、もう一つ別の物も渡した。なんだ、と思うも受け取っておく。悪いものじゃないだろう。

「傷薬だ。」
そう一言言って部屋に向かった。後ろ姿を見送ってから俺も部屋に行こうと思い、部屋を探す。

部屋には大きなベットが置いてあったので、倒れ込む。夜まで何しようと思うも、何も浮かばない。ぱっと傷薬を貰ったのを思い出す。ズバットは、かなり傷ついていた。瀕死ぎりぎりまで追いつめられていた筈だ。慌てて傷薬を使う。そんな効くのか疑うが、疑いはすぐに消えた。みるみる内に回復して、部屋の中を飛び回る。すげぇなこれ。感動していると、睡魔に襲われる。慌ててズバットをボールに入れる。睡魔に耐えきる自信がないので、そのままベットにもぐる。まともに寝るの久し振りだなぁ。ベットの暖かさを感じ眠りについた。

とんとん、とリズムよく扉を叩く音で、目が覚めた。見覚えのない

景色に一瞬ここがどこか分からなくなるが、すぐさま思い出す。
とんとん、再び扉が叩かれる。やべ、早く出なくちゃ。ベットを飛び降り、慌てて扉をあける。扉を叩いていたのは、おばちゃんだったらしい。

「お食事お持ちしました。」
手には、おぼんを持ち、その上には料理が数品のっている。今何時だろ、と窓から外を見ると、すでに暗闇が広がり空には月が淡く輝いている。もう夜らしい。これは晩ご飯か、と少し遅れて理解する。失礼します、と一言述べて、部屋にある机に置く。きびきびとした、年を感じさせない動作だ。そのまま戻り、また一言失礼しました、と一礼してから、立ち去る。

はっきり言って、腹が減っていた。カロリーメートだけでは、当然足りなかった。そのまま貪るように食事をした。

夜は過ぎ、また朝がやってきた。目を覚ましたら辺りはすでに明るく。窓から射す光が、まぶしい。太陽の明かりが、気持ちよかった。

その後起き上がり、昨日のように朝食をとり、外に出た。すると、そこには、サカキさんがいた。もしかして待っていたんだろうか、不安が胸をよぎる。だが、怒ることなくポケモンを出し、その背に乗る。

「乗れ」
また昨日のように飛び立った。

朝に洞窟に来て夕方に宿に飛び夜は宿で寝る。しばらくそのサイクルで過ごした。初日に昼から宿に向かったのは、俺の疲れを見抜いてらしい。

今俺は洞窟のいつものラジオのある部屋にいた。サカキさんはここが気に入ってるらしく、よくここにいる。

今日の俺はラジオが気になっていた。こんな悪い環境にあるし、一度も動いているとこを見たことないから、もしかしたら壊れているのかと思ったからだ。

試しにラジオをいじってみる。だが、反応はない。やはり壊れているか、とあきらめかけるが、その途端、ザーと砂嵐のような音がかすかに流れ出す。もうちょっとかも。希望が見え始めたので、いじる指の速度が増す。段々と電波を捕らえたのか音が聞こえてきた。

「こちらは、コガネラジオ塔。こちらは、コガネラジオ塔。三年間の努力が実り、今ここにロケット団の復活を宣言するー！サカキさまー！きこえますかー！我々ついにやりましたよー！」

六話

ロケット団の復活？内容が飲み込めずに、きょとんとする。背後から、足音が近づいてくるのが分かる。後ろを振り向く。サカキさんだ。顔は俯いているのでよく見えない。ラジオから流れる内容は、俺だけではなくサカキさんの耳にも届いたらしい。

「おい、今こいつはなんて言った。」

ラジオを足で指しながら乱暴な口調で言う。口調が乱暴になった時は、テンションが高くなっている証拠だ。この数日で理解したが、こういう時のサカキさんは怖い。

「えと、ロケット団が復活したとか。あ、もう一度流れます。」

音量を上げて、聞きやすいようにする。

先ほどと同じような内容が再び流れる。音量を上げたせいか、さっきよりも洞窟内に響きわたる。少しでも聞き取りやすいように、俺は音を出さないよう、じっと動きを止める。呼吸もできるだけ止めておく。

「ふふっ」

薄く笑う。

「はっーーはっはっは！」

我慢できないとばかりに笑い出す。サカキさんの笑い声が響く。こ

んなに全力で笑うサカキさんは初めて見た。口元だけでふっと笑うのはよく見たが、大口を開けて狂ったように笑う姿は見たことなかった。思わずに、止めていた息を吐き出す。

俺が、どうすればいいのか戸惑っていると、笑い声はしだいにおさまってきた。やがて完全に笑い声がやみ、こちらを振り向いた。まだ口元には薄い笑みが残っている。そして口を開く。

「聞いたか？」

「はい」

勿論だ。聞き逃す訳がない。

「分かっているな」

「はい」

どうするかなんて分かっている。サカキさんは行くんだろう。

「行くぞ。部下が私を待っている」

やっぱり。こんな人だから俺は惹かれたんだ。

ロケット団のボス。そのことは理解していた。否、理解していたつもりだった。だが、このしばらく一緒にいて真に理解した。この人はこういう人なんだ。悪人であり、トップに立てる人間。人を引きつけて止まない悪のカリスマだ。

三年前に解散した筈のロケット団。見捨てられた。そう考えた部下

も少なくないだろう。それでも、それでもあきらめない。今、ラジオ塔を占拠してボスを探している。まるで麻薬だ。一度はまると、もう抜け出せない。サカキさんは、見捨てない。部下の叫びには、必ず答える。だからカリスマなんだろう。部下に応えるために行くのは分かっていた。

「はいっ！」
万の思いを込めて返事をした。すでに俺もどっぷりとはまっていた。もう抜け出すことなどできない。

サカキさんは背広を翻し歩き出す。その三歩後ろをついていく。どこまでもついていく。そう決めたんだ。

だが、俺の決意を遮るように突如前方の空間が歪み出す。サカキさんと俺の歩みが止まる。見間違いか、と思うも実際に空間がねじ曲がっている。
サカキさんは、モンスターボールを構えて警戒する。慌てて俺も構える。

何が起こっているんだ。状況が理解できない。ポケモンならできるのかも知れないが、こんなポケモン知らない。訳が分からずに、答えを求めるようにサカキさんを見る。視線に気づき俺を見る。だが、分からないらしく首を横に振る。

歪みは、やがて爆発するように光を発した。光が辺りを満たす。あまりのまぶしさに思わず目をつぶり、両手で光を遮るようにかざした。やがて光が収まり出す。チカチカする視界で、誰かいるのが見える。二人、いや三人か？

視界が完全に回復してきたので、やっと確認できた。そこには、少年が一人、少女が一人。それに加えて一匹のポケモンがいた。二人はきょろきょろと辺りを見回している。

「誰だ？」

サカキさんも知らないらしく、警戒しつつ声をかける。当然俺も知らないので警戒の目を向ける。

少女が反応してこちらを向く。頭に乗せた大きい帽子が揺れる。そしてサカキさんを見て、何かに気づいたかのように、声を上げた。

「あっ！さっきの目つきの悪い子と喧嘩してたおじさんだっ！」

訳が分からない。サカキさんは、ずっと俺といた。この女の子は、何言ってんだ。サカキさんに視線を向ける。　サカキさんはを少女を無視して、もう一人の少年を睨んでいた。そして口を開く。

「その眼差し、三年前を思い出す。私の前に立ちふさがった、あの時の子供」

俺も気になって、サカキさんの後ろから、黄色い帽子を逆にかぶった少年の目を見るもまったく分からない。なんとなく意志が強そうに見えるくらいだ。

俺の視線に気づいたのか、その少年が俺を向く。

「あっー！お前はメガネ！何でこんなとこにいるんだよっ！」

心底驚いたとでも言うように、俺を指さしてそう言った。メガネ？確かにメガネを掛けているが、そんなふうに呼ばれたことはない。もしかして記憶喪失以前の知り合いか？

「おいおい、どした？反応悪いな？」

俺が何のリアクションも取らないのを不審に思ったのか、心配するように声を掛けてきた。馴れ馴れしいな、こいつ。てか、誰だよ、ほんと。

「お前の知り合いか？」

サカキさんもその反応を疑問に思ったのか、俺に聞いてくる。勿論、知らない。

「いや、知りません。えと、誰ですか？」

サカキさんに答えてから、その少年に聞いてみる。

「ゴールドだよ！ゴールド！オイラを忘れたのか！？」

少年、ゴールドは必死に俺に叫ぶが、まったく記憶にはない名前だ。

「あっ！そういえば、あたしも知ってるかもっ」少女もそんなことを口にする。

なんなんだこいつら？

疑問ばかり思い浮かぶ。

「誰だよお前ら。お前らなんて知らないよ！」

「何言ってんだよ！オイラたちは友達だろうが！」

「だ～か～ら、知らないって！」

「何を～！」

そんなやりとりをしていると、サカキさんから嫌なオーラを感じた。まずい、機嫌が悪くなってきてる。

「ゴールド、この話は後だ。俺たちには、今しなくちゃいけないことがあるんだ！」

「え、何それ？」
「コガネシティに行かなくちゃいけないんだ。だからそこを通してくれ」
二人が道を塞ぐように立っているので、進めない。
「用事？そんなの後でいいだろ！」
「ダメだ！今行かなくちゃいけないんだ！」
早く呼びかけに答えなくては、三年前のように誰かに潰されてはたまらない。それに、サカキさんを今か今かと待っているロケット団の人達にいち早く会わせてあげたい。
「そうだ。我々は、仲間の呼びかけにこたえるために、コガネシティに向かう。邪魔するなら容赦しない。」
これ以上時間はとりたくないらしく、サカキさんは強引に会話に入り込む。そしてモンスターボールを見せつけるように持った。

「呼びかけ？コガネシティ？もしかして、この人がラジオ塔で呼びかけていたボスのサカキ！」
サカキさんの正体に気づいたらしく、声を荒げて少女は言う。目には、驚愕と警戒の色が見える。
「それじゃあ、メガネの君もロケット団！？」
「そうだよ、なんかおかしいか！」
少女は驚いて俺を指さした。そんなに、俺がロケット団だとおかしいか。
ふと、ゴールドの様子がおかしいのに気がついた。さっきまで、うるさいほど俺に怒鳴りかかってきたのに、今では、何も言わずに俯いている。手はぎゅっと握られている。

「メガネ、お前、ロケット団だったんだな」
「ああ」
「サカキとかいう奴とラジオ塔に行く気か？」
「ああ」

「なら、通すわけにはいけねぇな」
そうはさせないとゴールドが前を向き、そう言い放つ。その目には意地でも通すか、という気迫と強い怒りが伝わってくる。こいつ強いかも。なんとなく貫禄があった。あと、なんで怒ってんだこいつ。

「ここは、俺がなんとかーーー」ここは俺がなんとかするから、先に行ってください。そう言おうとするも不意に、誰かの強い視線があるのに気づく。視線を辿った先には、ポケモンがいた。
そのポケモンは、まるで妖精みたいだった。身体は、薄い緑色をしていて、頭はタマネギのように後頭部が尖っている。背中からは羽まで生えている。

そのポケモンと目があった。その瞬間、一瞬だがニコリと微笑んだ気がした。見間違いかと思い、瞼を閉じて、目をもむ。

「あっ！セレビィ、なにやってんだ！」

ゴールドの声が響く。
なんだ？慌てて目を見開くがすぐにつぶる。視界は、真っ白に染まっていた。いや、俺が光に包まれていた感じだった。
トゲトゲしい光が閉じた目の奥をチカチカさせる。何があった？ま

ぶしさに目を細めながら前を見る。目の前には、セレビィ？の顔があった。

唐突に浮遊感に襲われる。辺りは暗闇に包まれ、黒以外何も見えない。宇宙にでも浮いている気分だ。次第に上下左右が分からなくなり本格的に無重力を味わう。脳がぐらつき、乗り物酔いでもした時のように、気分が悪くなる。ぎゅっと固く目を閉じて、これの終わりを待つ。だが、中々終わりは来ず、意識が薄れてきた。意識を強く持ち耐えようとするも次第に意識は薄れ、完全に意識を失った。

森独特の濃い酸素の匂いが鼻をつく。目を開き、ゆっくりと身体を起こす。何も考えずしばらくぼうっとする。そこで、ようやく何が起こったのか思い出す。

「あのタマネギ頭〜！」

絶対あいつが何かやったんだ、間違いない。あの妖精みたいなポケモンを恨まずにはいられない。

サカキさんのとこに戻らないと。でもあの洞窟はどこにあるんだ。それに俺一人じゃ空を飛べない。その前にここどこ。頭の中では、色んな考えが回り出す。回りすぎている。所謂パニックというやつだ。だが、あることを思い出す。

「コガネシティ」

呟くように声に出す。ラジオから流れていた内容なら、たしか今はロケット団がコガネシティのラジオ塔を占拠しているはず。そして

サカキさんは、ラジオ塔に向かおうとしていた。それならコガネシティに向かった方がいいはずだ。

まず、コガネシティだ。方針が決まったので、歩きだそうとして、あることに気づく。

「どこだよ、ここ」

七話

大木とでも言える木々が集まって、降り注ぐ日差しを遮っている。そのせいか、少し肌寒さを感じ腕をさすりながら歩き回った。どうやら、俺は森の中にいるらしい。

最初は洞窟で、次は森か。さらに次はどこに飛ばされるのか不安に思う。いいとこに飛ばされたいなぁ、と願わずにはいられない。

あたりには虫ポケモンでもいるのか、時折ゴソゴソと何かが動く音がする。気のせいかと思うも、一応モンスターボールを構え、迎撃できるように準備しておく。

ある程度歩いてみて分かったが、この森は広い。その上、同じような木がいくつも生えているので、自分がどこにいるのか分かりづらい。自分が初めにいた場所は、古ぼけた祠の前だった。そこに戻らないということは、一応進んでいるのだろう。

洞窟でのことを思い出す。あの時は、全てが未知だった。金魚、つまりトサキントにビビっていたころが懐かしい。ずっと昔のようにも思えるが、昨日のようにも思える。

サカキさんに会えて良かった。会えなかった時のことは考えたくもない。

不意に自分の荷物のことを思い出す。歩みを止め、肩にななめにかけたバッグに何があったか確認する。このバッグは、サカキさんに買って貰ったバッグだ。見た目以上に多く物が入るので中々便利で重宝している。

バッグを開き、何が入っているか確認してみる。まず目につくのは、数種類の傷薬だ。傷薬には、いくつかの種類があり、効き目は全部違う。ポケモンセンターというのもあるらしいが、まだ行ったことはない。

サカキさんも好んで行こうとはしない。

次に見つけたのは、木の実だ。ポケモンに与えることで、回復させたり、状態異常を治すことが出来る。中には、人間が食べれるものもあり、小腹が空いたときなど、よく食べる。

もうないか、と漁っていると、底に何かあるのに気づく。取り出してみる。

本である。だが、ただの本ではない。ポケモントレーナーガイドブックだ。基本的なポケモンやタイプの相性、ポケモントレーナーとしての基本など、覚えることは多い。手のひらサイズの小さめな本で、持ち運びに便利だ。

やることもないし、本でも読むか。実の所まだ読み終わっていない。ポケモンには、二つのタイプを持った奴が、結構いたりする。そういうポケモンは弱点が少なく、厄介だ。だが、その反面数少ない弱点をつけば、とんでもないほど効いてします。だから、どのポケモンがどんなタイプかを知っているだけで、戦いでは、かなり有利だ。だから少しでも多く知っておきたいのだが、あまりのポケモンの多さに覚えきれない。

「出ろ、ゴルバット」

モンスターボールから、ゴルバットを出し、周囲を警戒をさせる。本を読むのに夢中で、気づいたらポケモンに囲まれていたでは、たまらない。ゴルバットは、指示に従い、俺の周囲を飛んでいる。

このゴルバットは、ズバットが進化したものだ。もう進化するだけの強さは持っていたらしく、鍛えたらすぐに進化した。進化したら、力強さも増し、顔がでかくなった。そう顔がでかくなったのだ。ズバットの頃は、コウモリそっくりだったのに、進化したら、胴がなくなり、顔から手足や羽が生えたような、奇妙な生物になったのだ。

ゴルバットが、周囲を警戒しているので、安心して本を読み歩く。

しばらくして、ズシンと木が揺れる音が聞こえてきた。葉のざわめきが耳まで届く。本をしまい、ゴルバットを近くに呼び寄せる。

気になるのでその音の方向に向かった。もし人がいれば、と向かったのだが、とんでもない光景がそこにあった。

太った中年の男が一心不乱に木に頭突きをしていた。

まずいものを見てしまった。思わずに、ゴルバットと目を合わせる。俺はゴルバットと木に隠れながらそれを見ていた。予想外の光景に思わず目を疑う。見なかったことにしよう、と踵を返しこっそり帰ろうとしたのだが、その男は俺を目ざとく見つけ近づいてくる。血走った目が怖い。敵意がないことを示すためにゴルバットをボールにしまう。

「メガネの君、はぁ、頭突きという、技を、はぁ、ポケモンに、お

ぼえさせ、ないか？」
はぁはぁと息切れしながら聞いてくる。親切な人なのかも知れないが、はっきり言って迷惑だ。信用なんてまったく出来ない。男は鼻息が荒く、その身体からは熱気をいやに放出させる。今すぐここから逃げたい。そんな気持ちでいっぱいだ。

「ねぇ、どうなんだい？」顔を近づけるな、この野郎！心の中でぶちぎれる。

「い、いえ。結構です」早くここから逃げ出したい。ここから逃げ出せるのならなんでもする。

「そんな、いいじゃないか！」
興奮したかのように男は言う。あれ、こいつ変態じゃないか。

「勘弁してくださいって！」
声を荒げて断りの言葉を言う。すると、

「ーーそうか、君もか。分かったよ、引き留めてすまなかった。頭大切にな」
そう言って男は少し寂しそうな顔をして、とぼとぼと戻っていく。君も？いろんなやつに断られてるのか。そりゃそうか。少し悪い気もするが、あきらめてくれて良かったと俺は安堵しながら元来た道を戻った。

あ、道教えてもらえばよかった。今更ながら気がついた。

森は深く、どれだけ進んでも終わりが見えない。次第に、足にも疲

労が溜まってくる。次の木を左を曲がったら休憩しよう。そう思い曲がると、人を見つけた。

「すいません、そこの舞妓さん」

見つけたのは、艶やかな色合いの着物を着た舞妓さんだ。顔はおしろいで白く染まり、唇だけが真っ赤で目立つ。

「はい、なんでしょか　」独特のイントネーションで舞妓さんは喋る。

「えっと、この森の出口知りませんか。ちょっと迷っちゃって」正直に言う。見栄を張ってもしょうがない。

「あら、それは奇遇やわ。実は、私もなんどすえ」

まるで困ってないように明るい口調で言う。

「あ、そうなんですか」この人も迷子なのか。なんか余裕だなこの人。さすが舞妓。などとトンチンカンなことを考える。

「ええ、だから誰か来るのを待ってはるんです。一緒にどうどすか」話相手が見つかった、と嬉しそうに聞いてくる。

「う～ん、じゃあよろしくお願いします」

とりあえず、この人から情報を得よう。色々黒いことを考えながらそう言った。

へ～、ここウバメの森って言うんですか。コガネシティのすぐ側！？え、何でそんなことも知らないのか？いや、ちょっと訳ありで。

などと話していると、一人の少年が歩いてくるのが見える。あの少

年も迷子じゃなければいいんだが。とりあえず、話を聞こう。

「お～い！そこの少年！」

大きく手を振り少年に呼びかける。少年もそれに気づいたのか、ダッシュでこっちに向かってくる。少年の姿がどんどん大きくなる。あれっ、もしかして。いや、見間違いかも。少年が近づくにつれて予感が確信に変わってくる。やがてその少年は二メートル前で止まった。

「オイラになんかようか？」

中央に大きく黄色いラインが入り、それ以外が黒く染まった帽子を前後逆に被った少年が不思議そうに尋ねてくる。こいつだ、間違いない。

「お前かっ！！」

「えっ！何がっ！？」

八話

「なんだよお前、いきなりっ！」
「俺だよ、俺。お前、ゴールドって名前だろ。」
記憶をたよりに言ってみる。忘れもしない。俺をメガネと呼んだあの少年だ。確か、ゴールドって名前の筈だ。自分からそう名乗っていた。

「えっ！なんでオイラの名前知ってんだよ。」
「お前が名乗ったんだろ！」
「名乗ってねぇよ！」
「お前、俺のこと覚えてないの？」
そう言うと、ゴールドは顎に手を当てて考え出す。しばらく唸ってから、ぱっと閃いたかのよいに、こちらを向く。

「あ、分かった！もしかしてオイラのファン？サインならやってないよ」
最初は疑いの目で俺を見るも、どう勘違いしたのか、俺をファンだと思い始めたらしい。頬は緩み、困ったなぁと頬を掻いている。

「違うって！そんなのいらないし。俺だよ、俺。忘れたか？」なにしらばっくれてんだよこいつは。こいつも記憶を失ってんのか。話があまりにも噛み合わないので、少しおかしさを感じ始めた。そういえば、初めてあった時もおかしかったな。初めて会ったときのことを思い出す。いきなり光と共に現れて、初対面のはずの俺に妙に馴れ馴れしく接してきた。考えてみると、今はまるで立場が逆だ。俺がゴールドを一方的に知っていて、ゴールドは俺をまったく知らない。

「そうは言われてもなぁ。あ、名前はなんつうの？」
困ったようにガシガシと頭を掻き、突如閃いたのかそう言ってきた。

「え、名前？名前は言えない」
言えないというより、思いだせんだが。

「なんだよそれ。思い出しようがないって」
ゴールドは呆れたように俺を見てそう言う。

「それは、そうなんだけどさぁ」
どう説明すればいいものか、中々説明に困る。改めてこの状況を考える。俺にとってこいつと会うのは、二度目だ。だが、あっちは俺のことをまったく覚えてない。あのセレビィというポケモンは一体何をしたんだ。

不意に脳裏に嫌な予感が過ぎる。それは、この上なく悪い予感だ。

「ゴールド、お前コガネシティに何をしに行くんだ？」
もしかしたらサカキさんに勝って、今はコガネのラジオ塔へ向かっているところなのか。それともサカキさんに負けたけれどあきらめずにコガネシティまで追おうとしているのか。どちらにしろ俺が、ここで止めないと。俺が決意をしているてと、ゴールドが口を開いた。

「よくぞ聞いてくれた。オイラはポケモン図鑑の完成とジムバッチを集めてんだ。」
ゴールドは胸を張って誇らしげに言った。あれ？

「え、それだけ？」
毒気が抜かれた気分だ。ほんとにどうなってんだ。

「それだけって何だよ、お前変わってんなぁ」
変なやつ、と加えて言う。
「お前に言われたくねぇよ！」
「なんだと！オイラよりお前のほうが変だろ！」
「お前だ！」
「お前だ！」

「そろそろえどすか？」
今まで黙って聞いていた舞妓さんが話に加わってきた。そういえば忘れてたな。

「実は、私たち迷子なんどす。出口を知りまへんか？」
今更ながら思い出した。そうだ迷子だった。話をするなら森を抜け出してからだろう。

「出口？えっと、多分分かるよ。」
自信なさげにゴールドが言う。ほんとに分かっているのか。俺が疑わしい目で見ていると、ゴールドの背後にいたポケモンが、前に出る。まったく気づかなかった。

「あれ、アリゲイツどうした？」
ゴールドの指示じゃないらしい。卵のからをおしめのように被った、二足歩行のワニのようなポケモンが一歩一歩近づいてくる。もしかして、俺の疑いの眼差しに怒ったのか。

「ゴルバット！」
俺も警戒して、ボールからゴルバットを出す。このまま襲われるな

んてごめんだ。
だが、予想に反し、アリゲイツはゴルバットの前を素通りしていった。そのまま一人歩きだし、ある程度の進んだところで振り向きこちらをじっと見つめる。
「来いってことか？」
ゴールドに聞いてみる。
「たぶん」ゴールドは微妙な顔をして自信なさげに言う。ゴールドもよくわからないらしい。ゴールドの言葉の聞こえたのか、アリゲイツは不機嫌そうに戻ってきて、ゴールドの服を引っ張り出す。
「分かった、分かった！信頼してるって！引っ張るなよ！」
ゴールドは、アリゲイツにバランスを崩しながらも引っ張られていく。なんとなく微笑ましい光景だ。舞妓さんも、口元を袖で隠して笑っている。
「ほな、行きまひょか」
そう言って舞妓さんはゴールドの後をついていく。俺もその後を追いかけた。

「ほら、やっぱりオイラのいうとおりついたじゃねぇか。」
どうだ、とゴールドが俺に向かって胸を張る。確かにゴールドのいうとおりにアリゲイツの後をついていったおかげで、ウバメの森を抜けることができた。
「いや、それはアリゲイツのおかげだろ」
アリゲイツも、うんうんと頷いている。こいつのポケモンは感情表現が豊かだ。気に入らないことがあれば怒るし、嬉しければ、身体

いっぱいで表す。まるで人間だ。

「そ、そりゃそうだけどよ」

うっ、と言葉に詰まっている。しばらくいて分かったが、こいつはポケモンをポケモンと扱わない。ポケモンとの距離が近いのだ。

「ま、いいじゃねぇか。こうやって抜けられたんだから」

俺の背中をバシバシと叩きながら誤魔化すように言う。

「確かにそれは感謝しているよ。ありがとな」

素直に感謝する。ゴールドが通りかからなかったら、今でも舞妓さんとウバメの森で迷っていたかもしれない。

「えへへっ、どういたしまして！」

照れているのか鼻を掻きながら、顔を赤らめてゴールド言う。

「それじゃ、私も行きますわ。ほな、さいなら」舞妓さんはそう言って、すたすたと歩いていった。やがて姿が見えなくなったところで俺は口を開いた。

「なぁ、ゴールド？」

「なんだ？」

舞妓さんの行った方向をぼうっと見ていたゴールドが視線を俺に移した。

「さっきは悪かったな。混乱してて、よくわかんないこと言っちまった」もう訳が分からなかった。あのセレビィというポケモンが何かしたのは分かった。この事態を引き起こしたのは、セレビィなのだろう。だが何をしたのかは理解出来ない。ゴールドが俺のことを

知らないのも、そのポケモンが関係しているのだろう。ポケモンは謎だ。ポケモンなら最早世界を作ったと言われても驚かない。

「いいよ、気にすんなって」
ゴールドは許してくれるらしい。

「その代わり、名前教えてくれよ。それで許してやるよ」
別の条件を出してきた。ゴールドは軽い気持ちで言ったんだろう。だが、俺にとっては中々に重い。

「悪い、それは言えない」こいつは、いいやつだ。そうでなければポケモンに好かれない。そんなやつの頼みを断るのは、心苦しい。だから悪いと思った。

ゴールドは、文句を言おうとしたが俺の顔を見て押し黙る。感情の機微には敏感らしい。ほんとにいいやつだ。

「よし、分かった。じゃあ、あだ名をつけてやる！それなら言いだろ！」

「い、いいけど」
ゴールドは俺をじろじろと見て、なにか特徴を探している。やがてゴールドの視線は俺の顔で止まった。そして、一度頷き口を開く。

「お前のあだ名は、メガネだ」

九話

ゴールドはいいあだ名だ、と自分がつけたあだ名に満足しているのか、一人頷いている。

「それだ！メガネだ！」

思わずに声が大きくなる。ゴールドが洞窟内で俺をそう呼んでいた。こいつもしかして覚えているのか。疑いの目で見る。

「お、おおう！そんな喜ぶとは思わなかった」

俺の反応に驚いたのか、少し引きながら話している。ほんと変なやつ、と小さくこぼしている。覚えているようには見えない。演技か？と思うも、そんな器用なやつじゃないのは分かっている。

「なぁ、なんでメガネなんだ？」

ストレートに聞いてみる。こうゆうやつには、これが一番だろう。回りくどい言い方をしたって伝わらない。洞窟内のことを覚えているならなにかしらボロを出すだろう。

「だってさ、お前あんまり特徴ねぇじゃん。髪が長い訳でもないし、太っている訳でもない。だから、なんかないか探していたらメガネがあったから、メガネ」

少しイラッとするが、確かに俺は特徴がない。平凡顔と言うか、地味顔と言うか、とにかく覚えづらい。メガネだけが唯一の特徴だ。だが、この話で分かったことがある。こいつは洞窟内でのことを覚えていないということだ。よけいに訳が分からなくなってきた。

「ま、メガネは止めてくれ。イラッとくる」

何よりかっこわるい。名前を言わないのは悪く思うが、メガネはな

いだろう。こいつは、中々センスが悪い。
「えぇ、何だよいいじゃねぇか」
本気でいいあだ名だと思っていたらしく、口を尖らせて文句をいう。
「あ、そうだ。メガネは何しにコガネシティに行くんだ」
コガネシティのビル群がかすかに視界に映るようになってきた。あと、少しでコガネシティというところでゴールドが聞いてきた。てか、メガネっていうな。
「うん？そうだなぁ」
少し考える。コガネシティに向かうのは、サカキさんを追っているからだ。だが、色々状況がおかしくなっている。今やラジオ塔も占拠されているのか疑わしくなってきた。
「ある人を探しているんだ。その人がコガネにいるかもしれなくてさ」
サカキさんという言葉をふせて話す。元ロケット団のボスだ。もしかしたら知名度が高いかも知れない。
「へぇ、そうなんだ。オイラも一緒に探そうか？」
俺が困っているのを察して、手伝おうとしてくれる。
「大丈夫だって。それにジムリーダーに挑むんだろ。そっちに集中しろよ」
ありがたいが、断らせてもらった。確かに人手が多い方が見つけやすいだろう。しかしサカキさんは元ロケット団ボスだ。指名手配されている可能性もある。だから顔を教えるのは、抵抗があった。
「そうか？あっ！コトネだ！」

前には大きい白い帽子を被った、ツインテールの少女が立っていた。後ろには、風船のように丸い身体に耳と足がちょこんとついた、青いポケモンいる。その少女とは知り合いらしい。ゴールドの声が聞こえたのか、その少女は、こっちにぶんぶんと手を振り出した。なんか見たことがある気がしないでもない。

「知り合いか？じゃあ、ここらへんでお別れだな。じゃな」
知り合いなら、俺はさっきに行ったほうがいいだろう。邪魔はしたくない。

「そうか、悪いな。またどこかで会おうな、じゃなメガネ」
そう言ってから、ダッシュで少女の方に向かっていった。靴が特殊なのか、恐ろしいスピードだ。あんなのどこで売ってんだ？コガネに行ったら買おう、と心に決めた。
あと、メガネっていうな。

コガネシティは、ジョウト地方の中でも開発が進んでいる都市らしい。ラジオ塔やゲームコーナーがあり、カントー地方のヤマブキシティとはリニアモーターカーで繋がっている。本に書いてある情報だが、かなりの都会だということが分かる。

だが、今日のコガネシティはいつもの活気を失っている。ロケット団がいるからだ。現在ロケット団は、コガネシティ内に無数に存在しており、住民に恐怖を与えている。そしてラジオ塔は、ロケット

団に完全に占拠されていている。

ということはなく、いつも通りの活気に満ちあふれたコガネシティだ。なんでだと思う気持ちもある一方で、やっぱりかと思っている俺もいる。でも、それならサカキさんも来ないだろう。サカキさんがコガネシティを目指したのは、あくまでラジオ塔をロケット団が占拠したからだ。それが起こっていない今、サカキさんがコガネに来る理由がない。はぁ、一つため息をつき、ポケモンセンターの中に入った。

ポケモントレーナーの友として、ポケモンセンターは余程の田舎でない限り、街に一つは存在する。ポケモントレーナーは国にとって重要な労働力だ。ポケモントレーナーを援助する目的で、国営でポケモンセンターは、管理されている。そのためにポケモンの回復や寝泊まりなどを無料で行える。

「またいつでもご利用くださいませ」

ピンク色の髪をした優しそうなジョーイさんがそう行って頭を下げる。

無事ポケモンを回復できて、俺はほっと胸をなで下ろした。実は、少し緊張していた。情報だけは知っていても、やはり実際やらなければ分からない。落ち着いた俺はあたりを改めて見渡した。

すると壁に地図が入っているのに気づいた。地図に近づき、眺めてみる。洞窟がある場所はどこだ？現在サカキさんに関する情報は、洞窟にいることぐらいだ。

地図には、ジョウト地方が描かれている。その中で洞窟は三つだ。つながりと洞窟。スリバチ山。暗闇の洞穴。恐らくこの三つのどれかだろう。一番近いのはつながりの洞窟だ。だが、またウバメの森を抜ける必要がある。次に近いのが、スリバチ山だ。エンジュシティとチョウジタウンの間にある大きな山だ。つながりの洞窟までの距離と変わらない。最後が暗闇の洞穴だ。フスベシティの近くにある長い洞窟である。だが、フスベシティに行くまでには、氷の抜け道という過酷な道を踏破しなければならない。
う～ん、と俺が腕を組みながらどの洞窟に行こうか考えていると、ポケモンセンターのドアが開く音が聞こえた。

「それ、ほんま？ロケット団が復活なんかありえへんて」
若い少女特有の甲高い声が聞こえてくる。ロケット団という言葉に思わず反応して振り向く。

「噂なんですけど、もしほんとうなら大変じゃないですか！」
前髪を赤い髪留めで止めた女の子がそう言った。理解してもらおうと必死なのが見てとれる。

「ハハハッ！心配しすぎやって」
濃いピンク色の髪を二つに結んだ少女が、独特のなまりで言う。

「でもロケット団ってカントー地方で大暴れした組織ですよ。怖くないんですか？」
あたしは怖い！と、冗談めかして少女は言う。本当に怖がっているのではなく、演技なのだろう。

「なんや自分怖がりやな。」
呆れたように言ってから、安心させるように口を開いた。

「もし復活しててても大丈夫やろ。たかがガキ一人に潰された組織やで」

その瞬間、頭にかっと血が上り、頭の中で何かが、ぶちぎれる音がした。

十話

つかつかと少女二人に歩み寄る。許せなかった。許すことなんかできやしない。ロケット団を侮辱されたまま、ほっとくことなんてできなかった。握る拳は痛みを訴えるが、それでも握る。ロケット団は、サカキさんが作った最高の組織だ。それに間違いはない。あっていいはずがない。

自分の組織を一人の少年に壊滅させられた。そう話していたサカキさんの顔を思い出す。つらつらと何でもないように話していたが、隠した怒りと憎しみは確かに俺に伝わった。そして恥じてもいた。こんな組織しか作り上げられない自分を。だが、こんな少女にすら馬鹿にされなくてはならないのか。そんなことはない。そこまでロケット団は弱くない。俺がそれを証明する。

少女達も剣呑な雰囲気に気づき、強ばった顔でこちらを睨む。楽しそうに話していたのが嘘のようだ。

「なんか、ようですか？」

ピンクの髪の子が、警戒したように声を出す。その後ろでは、おどおどとしたもう一人の女の子が隠れるようにたっている。

「勝負しろよ」俺はぶっきらぼうに言った。失礼なのは分かっているが、下手に出るなんてしたくなかった。

「は？なんでウチがあんたと戦わなあかんねん？」眉間に皺をよせて、喧嘩腰で返してくる。思わずに怒鳴りたくなる。その衝動を喉元でなんとか抑え込む。ここで切れてめちゃくちゃにしてはいけない。俺の目的は、この少女をポケモン勝負でぎゃふんと言わせることだ。「いいだろ、お前どうせ暇だろ」

こんな少女が忙しい訳がない。そう思って言ったが、どうやら違う

ようだ。

「暇ちゃうわ、ていうか、あんた、ウチが誰か知らんの？」呆れたように俺を見て、言った。

「知らないけど、誰だよお前」

まったく記憶にない。もしかしたら、有名人なのか？だが、有名人だからと言って、許せる訳がなかった。

「ほんまに知らんのかい！なら、なんでウチと戦いたいねん」そう言われても、なんて言えばいいんだろう。俺がロケット団だからだ！というのは得策じゃないだろう。と言うより、この少女の話だと、この少女を知っていれば戦う理由になるのか。

「えっと」

「えっと？」

「いいから戦え！」

「なんやそら！？」ちょうどいい嘘なんて思いつかなかった。少し冷静になり気づいたのだが、今この場は静まり帰っている。どうやら俺とアカネのやりとりは、ポケモンセンター内に大きく響いていたらしい。そこで気づいた。そういえばここポケモンセンターだ。

「お客様失礼ですが、喧嘩するなら外でお願いします」

笑顔だが妙に怖い威圧感を放つジョーイさんがそこにいた。

「お願いします。一度でいいんだ」ポケモンセンターを出て直ぐに

敬語とタメ口の混じった口調で頭を下げる。こんな奴に頭を下げたくない、俺のなけなしのプライドがそれを拒否したが、プライドを捨てて頭を下げた。顔が強ばる。その顔を隠すためでもあった。

「え、そんな頭下げんといて！」基本的に善人なのか、俺が頭を下げると、慌て出し、考え込む姿を見せる。真摯にお願いすれば良かったのか。

「う～ん、でもジムを長時間開けとく訳にもいかんしなぁ」

少女が考え込んでいると、今まで気配を消していたもう一人の少女が声を出す。

「そ、そうよ、アカネちゃんは意外と忙しいんだからね！」

アカネちゃんとやらの後ろで控えていた少女がおっかなびっくり、最後にはやけくそになって声を出す。意外は余計や、とツッコンでるのが目に映る。

「そ、それに、だいたいあなたどこの誰よ！名を名乗りなさい、名を！あと、あと、アカネちゃんはこんなだけどジムリーダーなんだよ。す、すごいんだからね！だからやめときなさい！、お願いだからやめときなさい！あんたなんかコテンパンなんだからね！ほんとだよ、ほんとだからね！」言葉が切れないように、早口でまくしたてるように舌を回らす。舌を噛まないか心配になるほどだ。

「色々言いたいことはあるけど、時間なら心配ないって」

話のほとんどを聞き流し、少女が息継ぎをするタイミングで言葉を挟む。

「すぐに終わるから」挑発のつもりで言ったが自信はある。サカキさんと共に特訓したことで、ポケモンの扱いには慣れた。手持ちの

ポケモンも増えた。負ける気なんて、さらさらなかった。

「上等や。やってやろうかないか」予想通り乗ってきた。アカネとやらは、やはり喧嘩っ早い。

「アカネちゃん、い、いいの？今ジムに挑戦者が来たらどうするの？」

もう一人の少女が心配そうにそう言った。

「コガネの女が喧嘩売られて、黙ってられる訳ないやろが！」

アカネは怒鳴る。よほど馬鹿にされて怒っているのだろう。その沸点の低さには感謝しなければならない。

「え～、そんなルール聞いたこともないよ」

少女は困ったようにアカネに言って、俺に恨まし気に視線を向けた。事実困っているのだろう。サカキさんは、自分を元ジムリーダーだと言っていた。だが、ロケット団ボスでもある。そのせいでジムはほとんど開けていたらしい。それは、多くの挑戦者を困らせただろう。なにせ、ジムバッチが八つなければチャンピオンロードにも進めない。やはりジムリーダーがジムにいないのは、まずい。

「それに安心せぇ」

そんな少女を安心させるようにアカネは付け加える。

「すぐに終わるわ」

アカネは俺をぎろりと睨み、そう宣言する。俺の発言をよほど腹に据えかねているらしい。その睨みには、なんとなく威圧感があった。

あたりにはとりたてて何もなく、ポケモン勝負のしやすさを感じさせた。太陽は、ぎらぎらと忌々しいほど輝いている。時折吹く風が、清涼感を運んでくる。よくポケモン勝負に使われるのか剥き出しの大地が目立つ。十メートルほど離れて俺とアカネは向かい合っていた。

「覚悟はいいな、ぶっとばしてやる！」
ビシリと指をさして、そう宣言する。心臓がどくどくと拍動する。ポケモン勝負の前の、この緊張感と高揚感がたまらない。ボールを持った片手が震えた。

「やれるもんなら、やってみろや。後で、泣いても知らんからな」
アカネもそう言い返して、ボールを構える。構えが堂に入っていた。ポケモン勝負になれていだろう。俺も負けられない。

「いけ、ゴルバット！」

「いけ、ピッピ！」

十一話

ピッピは、丸っこく愛くるしい、ピンク色の体をしている。前髪と尻尾が丸くカールしていて、耳だけが黒い。戦うのが、可哀想になるほど可愛い姿をしている。思わず抱きしめたくなるほどだ。ピッピは、能力的にはそれほど高くない。愛玩用として可愛がられているほうがずっと似合う。そんなピッピがどっしりと構えて、可愛らしい顔をしかめてこっちを睨んでいる。

ゴルバットは翼をはためかせて軽やかに宙を舞って、今か、今かと俺の指示を待っている。コンディションは良さそうだ。

「ピッピ、おうふくびんたや！」アカネの指示が飛ぶ。その指示に従ってピッピが動き出す。ピッピは短い足に似合わずに素早い動作でゴルバットに近づいてくる。

「ゴルバット、あやしいひかり！」
だが、そう簡単にやらせはしない。こちらも負けじとゴルバットに指示を出す。あやしいひかりは命中率百パーセントの技だ。その光は相手を惑わせて混乱状態にする。

ピッピも例に漏れずに混乱したようだ。足下がふらつき、目がぐるぐると回っている。こちらにつっこんできた勢いは殺せずにその場で足をからませ転んだ。

「チャンスだ！ゴルバット、つばさでうつ」
ゴルバットは、指示に従い、翼を広げて飛んでゆく。風を切り勢いをつけて飛んでゆくゴルバットに脅威を感じたのかアカネが再び指示を出す。

「ピッピ、てきとーでええからおうふくびんたや」
ピッピが何とか立ち上がりやぶれかぶれで腕を振る。未だ混乱していて足はふらついている。だが、その指示がうまく言った。ピッピに突っ込んでいったゴルバットは勢いを殺すことができない。カウンター気味にゴルバットにピッピの一撃が入る。ピッピはそれを逃がさない。手の感覚を頼りにあいた片手でビンタする。ゴルバットが逃げる前にもう一度ビンタを決めた。隙をついてゴルバットがビンタの嵐から抜け出す。計三度のビンタを喰らってしまった。
ピッピも混乱が直ったのか、しっかりと立ち、視線も定まっている。

「ナイスやピッピ、よくやった！」
アカネも予想以上の活躍だったのか、ピッピの働きを褒めている。対照的にこっちは、予想以下の活躍だ。本来ならダメージを与えられる絶好のチャンスだったのに、逆にこっちが傷を負った。そのうえ、混乱まで治りやがった。舌打ちをひとつとする。

「ゴルバット仕切り直しだ、あやしいひかり！」もう一度あやしいひかり。治ったならもう一度やればいい。だが、指示通りにゴルバットは動かない。

「なにをやっているゴルバット！」
ゴルバットに叱咤を加えるも、動かない。何だと思い、ゴルバットの目を見る。ゴルバットはとろんとした目でピッピを見ていた。

「ピッピの特性メロメロボディや！ピッピに触れたポケモンはメロメロ状態になるんや！」
ありがたいことに、アカネ自ら説明してくれた。なるほど、厄介だ。

「ピッピ、ゆびをふるや！」
ゆびをふる、とは、無数にある技の中からランダムに技を出す技だ。だがランダム要素が高すぎる。相手を一撃で倒すような高威力の技を出す時もあるが、まったく意味のない技を出してしまうこともある。こんな賭けのような技、普通使わない。

ピッピが左右に指を振る。その姿は可愛らしいが、一体何がでるのか。ピッピが指を振るに従って、炎が爆発的に集中していく。そしてピッピはそれを解き放つ。それは大の字になりながらゴルバットに飛んでいく。

「よっしゃ、だいもんじゃ！」
まずい。あんな高威力の技、当たったら終わりだ。ゴルバットをちらりと見る。ゴルバットは未だ動きが鈍く、メロメロ状態だと分かる。

「ゴルバット、動け！」
それでも叫ばずにはいられない。元々、だいもんじという技は高威力の反面、命中率は低い。避けられない技じゃない。ゴルバットも自分に近づく危険と俺の叫びに気づいたのか、間一髪でなんとか避ける。安堵のため息を一つ吹く。

「やるやんあんた！」アカネがそう言うが嫌みにしか聞こえない。実際、ピッピには一ダメージも与えていないのだ。気持ちが焦り出す。

「ゴルバット、つばさでうつ！」

「ピッピ、ゆびをふる！」

同時にポケモンに指示を出す。ゴルバットは、相当のダメージがあるはずだが、それを感じさせなずに、ピッピに突っ込んでいく。ピッピもゆびをふり、体をぎゅっと腕で腕で抱き込み丸くなる。まるくなるという技だ。そのまま一直線にゴルバットが突っ込み、もう少しというところでピッピが体を解き放つ。それに合わせてピッピが爆破する。

ピッピから放たれた爆風がこちらまで吹いてくる。倒れないように足を踏ん張り、目を隠すように腕を上げる。だいばくはつか。体を丸めたのは、丸くなるという技じゃない。だいばくはつをするために力をため込んでいたのか。やがて爆風が止んだ。空には、もうゴルバットが飛んでいない。視線を下げる。地面には、気絶しているのか、ぐったりと伸びているゴルバットとピッピがいた。ゴルバットは、ピッピのだいばくはつに巻き込まれたのだろう。明らかに俺の判断ミスだ。もし、あれがだいばくはつだと見極められれば、ゴルバットは回避することができただろう。

ゴルバットをボールに戻す。アカネもピッピをボールに戻したようだ。

「ラッキーやなあんた！こっちのだいばくはつでピッピを倒せて！」
アカネが馬鹿にするように俺に言う。それに少しカチンとくる。

「なめんな！運も実力の内だ！」
そもそもゆびをふるなんて賭けのような技を使うお前が悪いんだろうが。

「次は運じゃ勝てへんで！いけっ、ミルタンク！」
アカネの放ったボールからは、光が溢れる。その光が止むとそこに

は、二足歩行の牛がいた。全体的にピンク色の体をしていて、小さい角がちょこんとついている。重量感のある体からは、防御力の高さが窺える。

「いけ、チョンチー！」
二匹目のポケモンを出す。チョンチーとは、青い体と先の黄色い二つの長い触手を生やした、水、電気タイプのポケモンだ。
「チョンチーか、厄介なポケモンやけど、ミルタンクには関係ないやろ」
その通り。その特性故に電気タイプには、圧倒的な強さを持つが、ミルタンクは電気タイプではないのであまり関係ないの。それでも出さなくてはならない。ポケモンは、チョンチーを合わせてあと二匹しかいないのだ。それにもう一匹のポケモンでは、あまりに心許ない。できれば、このポケモンでけりをつけたい。

「チョンチー、みずでっぽう！」
チョンチーは、口から勢いよく水を発射する。それはミルタンクに直撃するも、ミルタンクは微動だにしない。ダメージを受けているのか疑問に思うほどだ。やはり、防御力は高い。

「そんなん効かへんて。ミルタンク、ころがるや！」
ミルタンクはチョンチーに向けて転がり出す。その体からは信じられないほど速いスピードだ。その勢いのままチョンチーにぶつかり、チョンチーをふきとばした。指示を出す暇もない。その後もミルタンクは転がり続けて、何度もチョンチーをふきとばす。そして驚くことにそのスピードを上げていく。威力も増しているのだろう。

「チョンチー、スパークだ！」
スパークとは、電気を纏い相手に突進する技だ。少しでもあの勢いをとめなければならない。チョンチーは、体に電気を纏い始める。

バチバチと電気の音が耳に届く。転がりながら近づいてくるミルタンクにチョンチーが視線を定める。ミルタンクの勢いは、小さな岩なら軽々と破壊してしまいそうなほどまで上がっている。そして、ミルタンクのころがるを迎え撃つように、チョンチーが電気を纏い突進した。

一瞬拮抗するように見えたが、チョンチーはまた飛ばされた。直もミルタンクは転がり続ける。そして一直線にチョンチーに向かっていった。

「チョンチー、じたばた！」
チョンチーに指示を出す。じたばたとは、自分の体力が少ないほど相手にダメージを与えられる技だ。ここまでいいようにもて遊ばれたが、この技を使えることを思い出した。今、チョンチーはかなりのダメージを受けている。これほどうってつけの技はない。

「ヤバ！ミルタンク止まって！」
アカネも俺が指示した技の危険性に気づいたのか、ミルタンクに指示を出す。だが、ミルタンクは止まれない。一度転がりだしたら、中々止まれないのが、その技の欠点だ。

そのまま、暴れ出したチョンチーとミルタンクが衝突して、両者が弾かれた。ドサッと足下までチョンチーがとんでくる。立つのも厳しいらしくもう限界だということが分かる。
チョンチーをボールに戻す。前を向く。ミルタンクも限界らしく、なんとか立っているのが見える。

「あんた、結構やるやないか！予想以上や！」

「でもな、こんな技もあるんやで！ミルタンク、みるくのみ！」
ミルタンクは、みるみる内に体力を回復し始めた。初めはふらついていた足も、今やしっかりと大地を踏んでいる。冗談だろ。そう思わずにはいられない。チョンチーが与えたダメージをほとんどなかったことにされた。手持ちのポケモンは、あと一匹だ。しかも、さっき仲間になったばかりだ。一瞬悩むも、もしかしたらという一縷の望みを懸けてそれを出す。

「出ろ、イーブイ！」
ボールからは、犬のような体にウサギのよいな長い耳を持つ、ポケモンが現れた。このイーブイは、コガネシティで拾ったポケモンだ。コガネシティに入ってすぐに、誰かに跡を着けられると思い、振り向いたらこいつがいた。その後もトコトコと着いてくるので、空のボールを投げたら、嫌がる素振りも見せずに捕まってしまった。だが、まだ戦いで使ったことはない。

「イーブイやん！可愛いけど容赦はせえへんからな！」
当たり前だ。もし手加減されたら俺が怒る。

「イーブイ、たいあたり！」
指示に従い、イーブイがミルタンクに向かって走り出す。

「ミルタンク、ふみつけ！」
イーブイのたいあたりに合わせるように、ミルタンクは踏みつけようとする。そして、両者が激突した。結果はある程度分かっていた。イーブイはミルタンクの足に踏まれてしまっている。イーブイはぐったりしているから、気絶してしまっているのだろう。あっけないほど簡単にやられてしまった。

捕まえたばかりのポケモンで勝てるほど、アカネは甘くないのだろう。それでも負けたくなかった。ロケット団を侮辱されたのもあるが、ただ単純に勝負に負けたくなかった。ボールにイーブイを戻す。

俺の負けだ。もうポケモンは持っていない。悔しさが顔ににじみ出てきた。ばれないように下を俯く。こんな顔を誰にも見せたくなかった。アカネが何か言ってるようだが、頭に入らない。

早くこの場から去りたかった。自分が井の中の蛙だと気づき、恥ずかしくなった。サカキさんと一緒に修行したからと言って、所詮数日だ。この少女は何年もポケモンと共にいて、鍛えていたんだろう。

何も話したくなかった。何も話したくなかった。何も話したくなかった。そのまま無言で逃げるようにこの場を後にした。

「おーい！そこの子供！」

数分歩いた時だろうか。俺を呼び止める人がいるのに気づく。声色から判断するに女性だろう。女性にしては低く、大人っぽい声だ。だが、俺にそんな知り合いはいない。人違いだろう、と無視して歩きだす。

「あなたよ、あなた！聞こえてるでしょ！」

再び声が響く。これは、俺のことなんだろうと理解した。後ろを振り向く。俺を呼び止めたのは、やはり女性だった。髪は燃えるように真っ赤で、妙齢の大人の女性だ。

「なんでしょうか？」ほんとに記憶にない人だった。疑問に思い尋ねてみる。

「あなた、ロケット団に入らない？」その女性はそう言った。

十二話

ロケット団？俺はもうロケット団の一員のつもりでいたが、そう言えば、違うのだ。俺をロケット団と認めているのは、あくまでサカキさんだけだ。組織のトップが認めれば、俺はロケット団の一員なのだろう。しかし、解散して、再び隠れて集まった他のロケット団のメンバーは誰も俺のことをロケット団と認めていない。そのことを今更ながらに理解した。

「私には分かる。あなたには、才能がある。それをロケット団で活かしましょう。あなたなら幹部になれるかもしれない」
お姉さんははそう言って、俺を勧誘してくる。正直嬉しい。サカキさんの作った組織の一人が俺を評価してくれている。その上、俺をロケット団に入れようとしてくれている。こんなに嬉しいことはない。だが、だ。果たしてこんなに弱い俺にそんな資格はあるのだろうか。

「それにポケモンセンターでのいざこざは見たわよ。あなたにその気があったかは知らないけれど、あの小娘に喧嘩を売りにいったのも良かったわ」
正直私もムカついていたの、と女は付け加える。あれも見られていたのか。喧嘩を売ったのは、後悔していない。あそこで行かなければ、俺はもうサカキさんに顔向けできなかった。だが、羞恥心も共にある。戦う前は、あれだけ言っていたのに、結局はのされてしまった。ビックマウスにも程ある。恥ずかしいこと、この上ない。俺は羞恥心を隠すように下を俯いた。お姉さんはそんな俺をちらりと見るも関係なく話を続ける。

「その後の戦いも見たわ」俺はさらに恥ずかしくなる。あの戦い、

ミルタンクはかなりの余力を残していた。それに比べて俺のポケモンは、全滅だ。実力の差は明らかだった。すぐに終わらせる、ポケモンセンターで言ったあの言葉が恥ずかしくてしょうがない。結果は真逆。アカネとの勝負は完敗だった。

「負けたのはしょうがないわ、相手はジムリーダー。そんな簡単に勝てる訳がない」

「それでも善戦したほうよ。ミルタンクは、防御力が高いから、並大抵の攻撃は効かない。それに、回復技まで持っているわ。後一歩まで追いつめたのに逆転負けなんてよくあるわ。ほんとに面倒くさい相手よ」

そう言って俺をフォローしてくれる。それでも悔しかった。相手は、ジムリーダー。そんなことは戦う前に知っていた。それでもサカキさんを、サカキさんが作った組織を馬鹿にするやつを許したくなかった。その時のことは思いだけで悔しさに顔が歪む。アカネを見返せなかった悔しさが蘇ってしまう。その顔を見てお姉さんが優しく微笑んだ。

「そう、その顔。自分の弱さを恥じ、悔しむその顔。そんな顔ができる人はきっと強くなるわ」

強くなる。信じてもいいのだろうか。誰とも知らぬ人からの評価を真に受けていいのだろうか。でも、もしそうなら、信じたい。俺は強くなるのだと。

「まぁいいわ。言いたいことは色々あるけど、一つにまとめると、あなたは私の眼鏡にかなった。ロケット団に入りなさい」

「はい！」

「そ、そう。ず、随分と決断が早いのね。さすが、私が見込んだだけはあるわ」
お姉さんは、多少困惑しながらそう言った。お姉さんにとっては、俺の反応はおかしいのかもしれない。ロケット団は一般的に悪の組織だ。入る人の方が少ないのだろう。だが、俺にとっては違う。ロケット団はサカキさんの作った最高の組織だ。そして、それを受け継いだ新星ロケット団。サカキさんの意志を受け継いだその組織なら、俺は信じられる。

それに別の理由もある。俺は、以前洞窟でロケット団がコガネシティのラジオ塔を占拠したことを知った。そしてサカキさんに呼びかけていたことも。セレビィによって訳が分からない状況にさせられたが、それは変わっていないなら、ロケット団に入ることで、サカキさんに近づくことが出来る。

「あの、一つ質問いいですか？」
だから、訊いておかなければならないことがある。これが違っていたら、どうしようもない。

「何かしら？」
お姉さんは、不思議そうにこちらを見る。

「ロケット団は、ラジオ塔を占拠しますか？」
これが違っていたらサカキさんがコガネシティに来る理由もない。あのラジオが流れたから、サカキさんはコガネを目指したんだ。

俺がそう言った直後、空気が変わった気がした。その空気に息がつまる。空気を変えたのは、アテナさんが放つ鋭い気迫だ。その気迫に怯んだ俺の肩をがっと掴み、アテナさんは口を開いた。

「何故あなたがそのことを？」
先程までとは変わり、声色は冷たい。怖い。ただひたすらに怖かった。

「ご、ごめんなさい！」その迫力に思わず謝ってしまう。

「いいから言いなさい、どこでそのことを知ったの？」
力は強くなり、ミシリと肩に指が食い込む。目も、ぞくりとするほど冷たいものになっている。尋問でも受けている気分だ。というより尋問なのだろう。その目を見るとこの後何をされるのか嫌な想像が頭を過ぎる。
「わ、分かりました。言います、言いますよ！」

「えと、サカキさんと一緒にいる時に、ラジオから流れて、それで」

「サカキ様！？あなた、サカキ様にあったの！？」
お姉さんの手から力が抜ける。同時に痛みすら感じていた空気が弛緩する。余程驚いていたらしい。その隙をついて手をふりほどき、後ろに下がる。その反応で理解した。やっぱりロケット団はサカキさんを探しているらしい。これなら、ロケット団に入る価値がある。問題はこの状況をどうくぐり抜けるかだ。俺に嘘をつく才能はない。それなら、正直に言おう。俺に起こった訳の分からないことをどう説明するか。痛む肩をさすりながら声を出す。

「話しますから、落ち着いて聞いてください」

「分かりましたか？俺は訳がわかりません。なんでこんなことになったんでしょう」
たどたどしくだが、俺に起こったことをなんとか説明した。所々突っ込まれたりしたが、理解してくれたことを願おう。

「事情は大体分かったわ。」
「そうですか」
「あと、あなたに起こったこともね」
「え！本当ですか！教えてください、お願いします！」
この訳の分からない状況が分かるのなら、教えて欲しかった。

「いいわよ。恐らくだけど、あなたは時間を渡ったわ。あなたは未来から来たのよ。それなら、辻褄が合うでしょう」
「は？」
俺はぽかんと口を開き唖然とする。だが、確かにそれなら辻褄は合う。ゴールドが俺のことを知らなかったり、ラジオ塔がまだ占拠されてなかったこと。現実感があまりにないが。いや、でも一つだけ疑問がある。

「じゃあ、ゴールドが俺のことを知っていたのは何ででしょう？」
そう。あいつは、俺のことを初めから知っていた。初めてあった時から、俺をメガネと呼んできた。

「簡単なことよ。その子は、あなたより更に未来から過去に飛んで

きたのよ」
お姉さんはそう言うが、そんなポンポン時間を飛べるものなのか。
俺の疑いの眼差しに気づいたのか、お姉さんは口を開く。
「それが可能なのよ。噂だけどセレビィには、時渡りという能力があるらしいわ。そのポケモンをゴールドって子が持っているなら、楽勝ね」
やはり、あのポケモンか。何故ここに送ったのかは分からないが、恨まずにはいられない。だが、時間を操るなんて馬鹿げた能力を持っているポケモンに対する恐怖もある。その気になったら人間なんて滅ぼせるのではないか。

「それより問題は、サカキ様がコガネに来るのを妨害されるってことね。もしかしたら、負けるかもしれないし」
「そんなことない！サカキさんが負けるわけない！」
サカキさんは、絶対勝つ。勝ってコガネまでやってくる。
「分かってるわよ。あくまで、可能性の話よ、可能性の」
俺をなだめるようにお姉さんは言う。そして少し考え込む素振りをしてから、再び口を開く。
「ねぇ、あなたは元いた洞窟がどこにあるか、おぼえていないのよね？」
「はい…」
自分のふがいなさに呆れてしまう。
「じゃあさ、これからその洞窟を探しなさい。」

「え？いいんですか？」ロケット団としての仕事はないのだろうか。サカキさんを探せるなら、それはそれで嬉しいのだが。

「私たちのコガネシティを占拠する目的は、サカキ様に呼びかけること。でもサカキ様はある少年の妨害を受ける。なら、妨害を受ける前に見つけてつれてなきなさい。それも立派な仕事よ」

「期限はラジオ塔占拠まで」

どう？とお姉さんは聞いてくる。もちろん、願ってもないことだ。

「やらせてください！」

だからそう返事をした。

十三話

「でも洞窟ねぇ。」
お姉さんがそういって考え込む。このジョウト地方に洞窟は無数にある。どこにサカキさんがいるか、考えているのだろう。

「近場で言ったら、スリバチ山か、つながりのどうくつ。」
俺も最初は、そこらへんを探そうと思っていた。

「遠い所だと、うずまきじまか、くらやみのほらあな。」
うずまきじまは、考えていなかった。うずまきじまは、海上にある四つの島だ。でも、そこは候補からはずしていた。サカキさんと一緒にいたあの洞窟では、潮の香りなどまったくしなかったからだ。

「もしくは、チャンピオンロード」
チャンピオンロード。バッジを八つ持ったトレーナーだけが行ける、ジョウトで最も厳しい場所だ。だが、一番いそうな気がする。サカキさんは、修行をするために旅にでたのだ。修行するには、うってつけだろう。それに元ジムリーダーだ。入るのも許されるだろう。

「あのチャンピオンロードだったら、どうします？」
「どういうことよ？」
「だって、バッジ八つなんて持ってませんよ。俺じゃあ入れません。」
そう、バッジ八つなんて集まられない。というより集める時間もないだろう。だから、心配してそう言った。だが、お姉さんは呆れてようにこっちを見て、ため息をついた。

「あのねぇ、あなた、私たちはロケット団よ。そんなのどうにかす

るわよ。」
「どうにかって、どうするんですか？」
「そうねぇ、例えば、チャンピオンロードの前で張って、バッジ八つ持ったトレーナーを襲うとか。バッジを偽造するってのもありね」
確かにそれなら入れそうだ。というより、なんで思いつかなかったんだろう。

「まぁ、チャンピオンロードはまだ考えなくていいんじゃない？」
「何でですか？」
「あなたまだそこまでの実力ないでしょう？」
そうだ。今アカネに負けたばかりだった。今の俺では、あんなに強いジムリーダー八人に勝った人が集まるチャンピオンロードに行けるわけがない。思い上がりもいいとこだ。なに考えてるんだ俺。改めて自分の弱さを認識して落ち込んでいると、お姉さんが口を開く。

「落ち込むことはないわ。あそこは、ロケット団でも幹部位しか行けないし」
ロケット団幹部は行けるのか。さすがロケット団。サカキさんが作った組織だけのことはある。

「なら、幹部の人達が行ったほうがいいんじゃないですか？俺なんかじゃなくて」
俺は、まだまだ弱い。俺が行くより幹部の人が行ったほうが、ずっと早くサカキさんが見つかりそうだ。

「それがダメなのよ」
「なんでですか？」
「幹部の数はたった四人よ。そんな暇はないわよ。」
四人しかいないのか。それなら確かに無理だろう。ラジオ塔占拠のために色々な活動をしているだろうし、他にも活動資金を確保する

ために動かなければならない。サカキさんもカントー地方では、活動資金を得るためにタマムシシティで色々やっていたと言っていた。

「幹部って、そんな少なくなくて大丈夫なんですか？」

純粋に疑問だったので聞いてみた。幹部がそこまで少なくて組織が回るのか。

「何とかなってるから、大丈夫なんじゃない。まぁ、昼夜問わず働くから、疲れるんだけどね。ほんともっと増やしてわよ」

アバウトな答えが返ってきた。そういうのなら大丈夫なのだろう。だが、それより気になることがある。

「あの」

「何よ？」

「お姉さんは幹部なんですか？」

「あら、言ってなかったかしら。私は幹部のアテナよ。よろしくね」

軽々しく言われたが、中々驚いた。この人幹部だったのか。なんでこんな所にいるんだよ。その視線に気づいたのか、アテナさんは口を開く。

「コガネのラジオ塔を見に来たのよ。どう制圧すれば、手っ取り早いか作戦をたてるためにね」

そんなの下っ端にやらせればいいのにね、と愚痴をこぼす。アテナさん直々に来るとは、それほど重要なのだろう。そりゃそうか。新星ロケット団の今まで最大の作戦だ。下っ端には、任せられないか。

「そうだ、ある程度サカキさんの居場所を調べたら報告に来なさい。場所はチョウジタウンにあるアジトよ」

「アジトって町中にあって誰かに見つからないんですか」

「大丈夫よ。チョウジタウンの地下にあるから。私の名前を出せば

入れると思うわ。」
地下にあるのか。そういえばサカキさんも地下にアジトを作ったって言っていたな。なにか、関係あるのか。

「あ、そうよ。あなた、ポケギア持ってる？私の番号教えておこうと思ったんだけど」
「いえ、持っていません」
俺の持ち物は、ほとんどがサカキさんに貰ったものだ。サカキさんもポケギアを持っていなかったし、俺にも持たせようとしなかった。たぶん、必要ないと思ったんだろう。もしくは、あんな生活しているから、ポケギアの存在を知らないか。

「あ、そう。じゃあ一つ上げる。番号は入れておくわ」
「あ、ありがとうございます」
俺貰い物ばかりだな、と思わないでもない。

「ラジオが聞きたいなら、ラジオカードを貰いにラジオ塔に行きなさい。なんか、キャンペーンやってるらしく、ただで貰えるわよ」
それは、ぜひとも欲しい。旅の途中やることがなくて暇すぎる。ただで貰えるなら尚更だ。

「それじゃ、こんなところかしらね。他の幹部には言っておくわ。私直属の部下が一人できたって、感謝しなさいよ」
「勿論ですよ、アテナさん」
本当に感謝してもしきれない。俺が過去に来たのを教えてくれたのはアテナさんだ。俺をロケット団に入れてくれたのもアテナさんだ。
「あ、あと、他のメンバーの前ではサカキ様と言いなさい。皆そう呼んでいるから、他のメンバーが聞いたら、怒るかも」俺にとってサカキさんはサカキさんだ。だが、つまらないいざこざを起すくらいなら、メンバーの前ではそう呼ぼう。

「はい、分かりました。色々ありがとうございます」
改めて頭を下げた。

本当に感謝している。

十四話

アテナさんと別れた俺は、再びコガネシティに戻ってきた。ラジオカードを入手するために戻ってきたのだが、一つ問題がある。

コガネシティは、一見入り組んだ街には見えない。街の中央を大きな道が通り、その道をさけるように左右に建物が建てられている。だが、細部はだいぶ入り組んでいる。建物が不規則に建てられており、案外行き止まりが多いのだ。

つまり、今俺が道に迷っているのは、俺のせいでなく街のせいなのだ。今俺の周囲には背の高い建物が並び、日射しと共に俺の視界を塞いでいる。その上、三方を建物に囲まれていて、残った後ろにしか、進めない状況だ。ラジオ塔に向かっていたのに今俺はどこにいるんだろう。心中で嘆きつつ、元来た道を戻ろうと、踵を返す。

すると、前方にある比較的小さな建物から、自動ドア特有の機械的な開く音と共に人が出てきた。あの人に道を聞こうと思い近づき、それが誰か分かった。

「よう、メガネじゃないか！」

ゴールドである。何故かにこにことしていて、機嫌がいいのが分かる。

「ああ、さっきぶり。何してんの、こんなとこで？」

俺がそう聞くとより一層笑みを深めた。ほんとに何やってたんだろうか。

「にししっ！聞きたい？聞きたい？」

というより、ものスゴく話したそうだ。

「聞きたい、かな」

とりあえずそう答えておく。ゴールドの話し方に少しイラッときたものの好奇心もあった。

「実はさ、オイラ、この店で自転車をただで貰ったんだ！」

そう言って、バックから折り畳まれた自転車を引っ張りだして、数秒で組み立てた。

「じゃーん！どうだ、かっこいいだろ！」

口で効果音をつけて、見せびらかしてくる。自転車はぴかぴかに磨き上げられていて、新品さを感じさせる。自転車もスタイリッシュだ。正直ものすごくかっこいい。

「かっけぇ」

思わず声に出てしまった。ゴールドはそれを聞き逃さない。

「だろ！だろ！かっこいいだろ」

俺の反応が嬉しかったのか、ゴールドのテンションが上がる。

「いいなぁ！それ、俺も貰えるかな？」

できるとことなら、俺も欲しい。ただなら尚更だ。ゴールドのシューズも欲しいが、こっちのほうが速そうだし。

「う～ん。多分、無理」

「え、何で？」

ゴールドは少し考えてからそう答えた。なんでゴールドはいいのに、俺はダメなんだ。純粋に疑問だ。もしかして、ゴールドにはこの店との特別なコネでもあるのか。

「オイラはさ、ある仕事をするためにこの自転車を貰ったんだ。メガネは普通に自転車を買わないと無理だって」
やっぱりそう簡単には、貰えないか。やはりただで貰うには、相応の条件が必要か。まあ、俺も交渉すればいいか。それよりも聞きたいことがある。

「なぁ、ゴールド」
「何だ？」
「ラジオ塔ってどこ？」

「そんなとこにあったのかよぉ」
「メガネって方向音痴だな、ウバメの森でも迷ってたし」
ゴールドが言うには、ラジオ塔と真逆の方向に俺は進んでいたらしい。落ち込まずにはいられない。

「そ、そんなことないよ。たまたまだ、たまたま」
口ではそう言うが、やっぱり方向音痴なのかもしれない。あまり強く否定できない。

「ま、いいや。あ！そういや、ラジオ塔でジムリーダーのアカネにあったんだけどさ」
アカネに会ったのか。できれば、俺は会いたくない。格好悪すぎる。あっちも良い印象を持っていないだろう。勝負前は馬鹿にした上に、勝負後は何も言わずに逃げ出したのだ。好印象を持っているほうがおかしい。

「なんか、メガネのトレーナーと戦ったって言ってたけど、それおまえ？」
完全に俺だ。もしかしたらアカネは、俺との事をゴールドに話したのだろうか。それならば、ゴールドにはばれたくない。

「まぁ、一応」
少し曖昧に返事をする。一応って何だよ、とゴールドに突っ込まれるも、はは、と苦笑する。

「やっぱりか。なんかメガネに言いたいことあったらしくて、オイラが友達なんで伝えておくって言っといた」
おいおい、一体何言ったんだよ。悪い予想しか浮かんでこない。俺の暴言にまだ怒っているのだろうか。

「なんて言ってた？」
恐る恐る聞いてみる。聞かなければ、話が進まないのだろう。というより、聞きたくないと言う方が逆に怪しい。

「リベンジ受付中、いつでもジムに来いや。だってさ」

「え、それだけ？」
もっと罵詈雑言が来るかと思った。はっきり言って拍子抜けだ。もしかして、あまり怒っていないのだろうか。まぁ怒っていなくて良かったんだが。俺の覚悟を返して欲しい。
それにリベンジ受付中と言われなくても、俺はアカネにもう一度挑む気だった。
確かにアカネには敗れた。だが、チャンピオンロードを目指すなら、

ジムリーダー位倒さないといけない。それだけの実力がなくちゃ、チャンピオンロードなんて夢のまた夢だ。
「ぷぷっ。ってか、メガネ、アカネに負けたのかよ」

「笑ってるけどアカネは本当に強いからな」
ほんとに強かった。ゴールドの強さは知らないが、ゴールドも苦戦するだろう。というより、俺が勝てなかった相手に、楽に勝って欲しくない。勝つにしても苦戦して欲しい。そうでなければ、俺は何だったんだということになる。

「へへん、オイラをなめんなよ！これを見ろ！」そう言ってゴールドは、バッグから二つの小さい何かを差し出してくる。どうだと自慢するように見せてくるが、なんだろうこれ。

「なにこれ？」
「おまえ、知らないのかよ！？」
「うん」堂々と見せてくるが、まったく分からない。そんな俺を驚いたかのように見てくる。

「ジムバッジだよ！ジムバッジ！オイラはもう二人ジムリーダーを倒してんの！」
そう言われても、ジムバッチなんて初めてみた。よく見ると案外簡単な作りをしているので、アテナさんが偽造することもできそうだと言うのも分かる。それにゴールドの自信の理由も分かった。もう二人もジムリーダーを倒しているんだ。その経験から来ているのだろう。

「ゴールドって強いんだな」
改めてゴールドの強さを理解した。

「やっと分かったか。だから大丈夫。アカネなんかコテンパンにしてやんよ！」メガネの敵討ちだな、と付け加える。ありがたいが、やっぱりアカネと対戦した俺から言わせると、そんな簡単にいくのかと思わないでもない。簡単にいって欲しくない。

「じゃ、オイラはそろそろジムに挑戦しに行くよ」

「ん、そうか」

「おう、まぁ期待しててくれよ」

それじゃ、と言って、自転車に乗って行ってしまった。そして、あっという間に姿は見えなくなってしまった。

ゴールドが行った後、俺はゴールドが居た自転車屋に入った。中には、おじさんが一人いて、俺に背を向けて自転車を磨いていた。自動ドアの音に気づいたのか、振り向く。

「あ、いらっしゃい！」

俺は取りあえず、自転車の値段を聞こうと、おじさんに話しかけた。

「これ、いくらですか」

身近にあった自転車を指さしてそう言った。

「百万円です」

「え、もう一度？」

「百万円です」

聞き間違いじゃないようだ。どうやら、俺は場違いらしい。ゴールドは、ただの代わりに、ある仕事を引き受けたと言っていたが、百

万円分の仕事って何だよ。なんにせよ、とんでもない仕事だろう。
俺には絶対無理そうな。俺は踵を返し、再び自動ドアをくぐった。

十五話

その後無事ラジオ塔に着き、ラジオカードを手に入れられたものの、今俺は別のことで頭を悩ませていた。

ラジオ塔内に、置かれたソファに腰掛け、ポケギアとにらみ合っている。ポケギアには、様々な機能が付いている。電話であったり、ラジオであったり。その中で、俺はタウンマップを見ていた。地図を開き、チョウジタウンの位置を確認する。

というのも、アテナさんに言われたように、報告のために一度はチョウジタウンに行かなければならないからだ。電話ですむことだと思うが、アテナさんには別の目的があるのだろう。それが、何かは分からないが。

俺は、空を飛べるポケモンを持っていない。空を飛べるポケモンなら、一度行った場所を記憶し、指示を出すだけで、そこまで運んでくれる。歩く時間を大幅に短縮することができるので相当便利だ。

だから、途中で空を飛べるポケモンを手に入れたにしても、一度はチョウジタウンまで歩きで行かなければならないのだ。

俺の仕事は、サカキさんのいそうな洞窟を探すこと。なので、各地の洞窟を探しつつ、チョウジタウンに向かわなければならない。どのようなルートを通れば、一番効率的なのかを考えていた。

最初に思いついたルートは、一度キキョウシティに向かい、キキョウシティのすぐ横にあるくらやみのほらあなを調べ、その後キキョ

ウシティとヒワダタウンをつなぐつながりのどうくつを調べる。そしてチョウジタウンの近くにあるスリバチ山を調べた後にチョウジタウンに行くルートだ。このルートなら周辺の洞窟には大体行くことができる。だが、時間がかかりすぎる。サカキさんを探すのは、ロケット団がコガネシティを占拠するまでだ。チョウジタウンに着くまでに時間切れ、一度もチョウジタウンのアジトを訪れなかった、なんてことは避けたい。

次に考えたルートはスリバチ山を調べた後にチョウジタウンに向かい、アジトを訪れる。その後に各地の洞窟を訪れるルートだ。これなら、確実にアジトまで行けるが、洞窟を調べる時間がない。

どっちもどっちだ。一長一短。どっちを選んでも変わらないような気がする。

「はぁ」

ため息をつく。自分で言うのもなんだが、俺は頭があまりよろしくない。サカキさん曰く、メガネをかけなくちゃ、馬鹿にしか見えないらしい。そんな馬鹿な頭を必死に回転させたが、答えを出てこない。

ソファの背もたれに頭を乗せて、天井を仰ぎ見る。いい案なんて浮かんでこない。そう言えば、上の階では、ラジオの放送をするスタジオもあるらしい。音が漏れるということがないので、まったく気づかなかった。このラジオ塔から各地に電波が飛び、サカキさんまで届くのかと思うと、少し感慨深いものがある。少しでもサカキさんと繋がっていると思えるからだ。

「痛っ」

急激に頭が痛み出す。こんな頭痛は、度々あった。だが、セレビィに過去に送られてから頭痛の頻度が多くなった。時折、既視感に襲われる。俺は、ここに来たことがあるような気がするのだ。もしかしたら、記憶喪失が関係しているのかもしれない。　ぎゅっと目を閉じて痛みが通り過ぎるのを待つ。脂汗が流れる。

「あの、顔色が悪いようですが、大丈夫ですか？」

目を開く。受付にいたお姉さんが心配そうにこちらを見ている。俺の様子を見て近づいてきたのだろう。

「ええ、大丈夫です。心配かけてすいません」

無理矢理に笑顔を作り、そう返事をする。頭痛はまだ続いているが、顔には出さない。

「そうですか、何かあったら言ってください」

なにか言いたそうだったが、そう言った。本当に限界だったら、頼ってくると考えたのだろう。

「はい、ありがとうございます」

感謝を述べて、一礼する。頭痛も少しずつだが痛みが引いてきた。お姉さんは受付まで戻っていく。それを確認して、小さくため息を吐く。

もお、てきとーでいいか。どっちを選んだところで後で後悔してしまうような気がする。それなら、どっちを選んでも変わらない。それに早く結論を出して、ここから早く出たいというのもある。さっ

きのお姉さんがじっと俺を見ている。心配してくれているんだろうが、あまり居心地がいいものじゃない。

ソファから立ち上がり、出口まで歩く。ラジオ塔を出て初めに見た人が男だったらまず周辺の洞窟を調べる。女だったらチョウジタウンを目指す。つまるところ、運にすべてを任したのだ。そして、自動ドアを開き、外に出た。

外にでると、すでに夕方だった。コガネの街は赤く染まり、昼間の騒がしさもなくなっている。街灯もつき始め、もうすぐ夜だと知らせてくれる。あたりには、見渡す限り人はいない。とりあえず、街を一直線に通っている大通りに出ようと思い、歩き出す。すると、上のほうからもの凄い速度で走る少年が見えた。ゴールドだ。その悔しそうな顔から、アカネに負けたんだと分かった。なんとなく話しかけづらい。あれだけ大口叩いて負けたのだ。あっちも話しかけて欲しくないだろう。ゴールドは、そのまま俺の前を通り過ぎていった。ポケモンセンターに向かっているのだろう。

これで決定した。向かう先はキキョウシティ。だが、それよりもすることがある。寝床の確保と食事だ。確か、ポケモンセンターでは有料だがベッドと食事を出してくれるらしい。金を出すのは辛いが、しょうがない。野宿はきついものがある。だが、それ以上に辛いのが、負けたゴールドと会うことだ。できれば会いたくない。

そんな憂鬱な気持ちを持ちつつ、ポケモンセンターに入ったのだが、ゴールドの姿は見あたらない。不思議に思い、ジョーイさんに尋ねる。

「すいません」
「はい、なんでしょう」
「ここに黄色と黒の帽子を逆に被った少年来ませんでした？」
「ああ、来ましたけどけどすぐ出て行きましたよ。今日は寝ずに特訓だ！とかポケモンに言っていましたっけ」
さすが、ゴールド。負けん気がはんぱじゃないな。ってか、俺以上の馬鹿に見えるな。でも会わないなら、それでいい。あっちは、俺に気づいていなかったみたいだし、俺も見なかったことにしよう。

十六話

コガネの朝は静かだ。昼間の喧騒はなく、どこか神聖さを思わせる静寂が満ちている。あたりは、朝というにはまだ薄暗く、少し肌をひやりとさせる。ポケモンセンターから出た俺は、自分の足音だけが響くコガネの街を歩き出した。

向かう先は、キキョウシティ。キキョウシティとコガネシティは、案外近い。コガネシティとキキョウシティをつなぐ道があるからだ。俺は、これからその道を通ろうと思い歩いていた。

俺の左にはラジオ塔が見えてきた。これから占拠するのだ。未来では、確かにそうだった。だから今回もそうするのだろう。リニア鉄道の線路が上空にある。その下を通り抜けて先に進む。

右には、ジムがある。早朝ということで開いていないのか、電気が着いていなく、人の気配を感じさせない。昼間はここでゴールドが戦ったのか。俺もいつかは、行くがまだその時じゃない。そう思い、先に進む。そして俺はコガネの外に出た。

道は広く、人が通りやすいようにしっかりと整えられている。だが、あちこち不自然に凹んだりしているのは、ポケモンの技の効果だろうか。未だ早朝だと言うのに、ポケモントレーナーらしき人もちらほら見える。ポケモンを戦わせている人もいるので、横切る時は、注意しよう。この道が広いのはそのためかもしれない。

「ねぇ、君、ポケモントレーナー？」

早速、声をかけられた。ポケモントレーナーというのは、お金を賭

けて勝負をする。金欠気味の俺にとっては、ありがたい。それに、ポケモンも強くなるので一石二鳥だ。

「ああ、そうだけど」

だからこの道は俺にとって、いいことしかないのだ。負ければ、別なのだが。

「よし、じゃあ勝負よ！」

「喜んで！」

数回戦ってみて分かったのだが、ポケモントレーナーというのは、気に入ったトレーナーの電話番号を聞きたがるらしい。大抵の人は一度断ればあきらめてくれるが、中には、しつこい人もいる。知らない人に電話番号を教えるのも、嫌なので断って来たのだが、中々面倒くさい。

今俺は、道と道を繋ぐゲートという所にいる。街の入り口と出口にあることが多く、不審な人物を入れないためにか、警備員のような人がゲート内で見張っている。ウバメの森とコガネシティの間にもゲートがあった。俺が今いるゲートはそこより広く、今俺はそこで一休みしていた。

というのもポケモンの傷を治すためだ。予想外にお金を貰えるので、必要以上に戦ってしまった。そのため、ポケモンも強くはなったが、傷ついてしまった。きずぐすりを出し、回復させる。相変わらずに、効果が強い。きずぐすりを使った瞬間、元気になるのは、驚くばか

りだ。

「ねぇ、そこの君、今暇かい？」
ポケモンを回復させて、先に進もうとしていた俺に受付にいたおじさんが話しかけてきた。

「暇じゃないですけど、どうしたんですか？」
実際暇じゃない。できるだけ早く各地を回る必要があるのだ。そのために、早起きまでした。

「ああ、あと数時間たったら虫取り大会を開くんだけどね、あまり人が集まってないんだよね」
むしポケモン。はっきりいってそんなに強いイメージがない。というより苦手だ。あのいもむしが木からぼとぼとと落ちてくる姿はトラウマものだ。

「はぁ、そうなんですか。」
「あ、いや、急いでいるならいいんだ。悪かったね」
そう言って、おじさんは元の仕事に戻っていった。悪いとは思うが、俺だって忙しい。なんとなく居づらくなったのでゲートを出て、ゲートの向こうの自然公園に向かった。

自然公園は、想像以上の広さを持っていた。草むらが円を描くように広がり、中心には大きな噴水が水を噴き上げている。草むらには、数人のトレーナーがいる。ポケモンでも探しているのだろうか。
俺もポケモンを鍛えたいが、そんな時間はない。草むらをさけるように進み、遠くにあるゲートを目指す。だが、中々遠い。コガネシ

ティの半分以上の面積があるのではないだろうか。ゲートに近づいている気がしない。日も昇ってきたのか、肌が汗ばんできた。コガネとキキョウシティは近いと言っても、かなりの距離がある。キキョウとヒワダほどではないが。

結局ゲートについたのはすっかり日が昇った頃だ。今日も、天気はいいらしい。今日くらい休んでくれよと思ってしまう。なんとかゲートに着いた俺に、受付にいるおじさんが言った言葉は、衝撃的だった。

「え！キキョウシティまで行けないんですか！？」

「そうだよ、残念ながらね」

折角ここまで来たのに。俺の努力は何だったのか。そう思わずにはいられない。

「な、なんで行けないんですか！？」

理由を知りたい。くだらない理由なら無理矢理通ってやる。

「道のど真ん中にいきなり、木が生えてきたんだよ。それで誰も通れなくなっちゃってね」

「木？」

木がいきなり生えるなんて不思議なことがあるのか。タイムスリップした俺は、強く言えないが。

「それなら、切り倒したりすればいいんじゃないですか」

「その木が硬くてね。何をやっても傷つかないんだよ」

困ったもんだ、とおじさんがこぼす。そんな木ほんとにあるのか。そう思ってしまう。このおじさんが俺を通さないために嘘をついているんじゃないか。無茶苦茶だと思うが、そう思わないと、ここま

で来た俺の努力が無駄になってしまう。

「自分の目で確かめてきます！」

そう言って、俺はゲートを飛び出した。

「木だ」立派な木が立っていた。周りの木よりは小さいが、どっしりと立っている。キキョウシティに行く道は狭い。普通の道では邪魔にならないが、この道では、絶妙に邪魔になっていた。どうやら、おじさんの話は本当のようだ。

「はぁ」

これで、今日の行動すべてが無駄になってしまった。ふつふつと怒りが湧いてくる。この木のせいで、この木があるから、全部この木が悪いんだ。その怒りを込めて、木を殴る。

「痛っ！硬っ！」

だが、その木は岩のように硬く、逆に手を痛めてしまった。おじさんの言葉を思い出す。そう言えばこの木は、切ろうとしても切れなかったんだ。俺の拳程度で傷つく訳がない。渋々と俺は、元来た道を戻った。

ゲートに戻った俺を迎えたのは、おじさんの生温かい視線だった。

なんか恥ずかしい。

「虫取り大会がもうすぐ始まるんだが、やるか？」
おじさんの優しさが痛かった。疑ってすいません。

「はい、やります」
どうせ今日は、もう何もできない。遠回りしてキキョウシティに行くにしても明日だ。今行ったら、夜をウバメの森で過ごすことになる。それなら、今日は自由に過ごしていいだろう。

「そうか、ならついさっき始まったばかりだ。早く行くといい」
ゴルバット以外のポケモンを預けて、自然公園に俺に向かった。

大会と言うだけあって参加者は、結構いるらしい。草むらでうろうろしている人がそうなのだろう。俺も探しているのだが、中々強そうなポケモンは見あたらない。見つけるのは、キャタピーやビードルなどのいもむしばかり。たまに見つかるのも、さなぎのような形をしたかっこわるいポケモンだ。ノリで参加してしまったが、軽く後悔し始めていた。

「うわっ、また出てきたよ、気持ちわる」
またもや、キャタピーが出てきた。ほんと、いいかげんにしてほしい。ゴルバットでなぎはらいつつ進んできたので、俺の後ろは気絶した、いもむしだらけだろう。想像するだけで、気持ち悪くなる。同じように、キャタピーを倒す。気絶したキャタピーをそのままにしてさらにポケモンを探す。

「うわっ！なんだこれ！」
すると、後ろから驚くような声が聞こえてくる。男か女か分かりづらい声だ。

「うわっ！まただっ！」
再び声が聞こえてくる。だんだんと俺に近づいてきている気がする。

「くそっ！何が起きている！」
その声と共に草むらを進む音が聞こえてくる。後ろを振り向く。そこには、男にしては髪が長く、女にしては髪が短い、つまり男か女か分からない、人が俺の跡を追ってきていた。たぶん、俺が倒した、いもむしたちを追ってきたのだろう。やがて、その人も倒れている虫の先に俺がいるのに気づいたのだろう。俺を指さして口を開く。

「何やってるんだ、君！？」

「む、虫取り大会です」

十七話

「だからね、君はむしポケモンを…」
俺は、今よくわからない人に説教を受けている。なにやら、俺のむしポケモンの扱い方が気に入らないらしい。むしポケモン苦手なんです、と正直に白状したら、さらに怒らせてしまった。

「君にはむしポケモンの可愛さが…」
話が終わらない。どうやら、むしポケモンへの溢れる愛が止まらないようだ。厄介極まりない。虫取り大会にも時間制限がある。今も刻一刻と時間がなくなっている。このままでは、虫取り大会が終わってしまうのではないか。そう思わせるほど話に熱がある。

「そもそも虫取り大会と言うのわね…」
そういえばこの人は、虫取り大会の参加者ではないのだろうか。片手に持った虫取り網で、虫好きだというのは分かるのだが。そういえば、半ズボンに真っ白なシャツ、麦わら帽子を被った少年も虫取り網を持っていたのだが、虫ポケモンばかり出してきた。その虫取り網でポケモンを捕まえたのなら、とんでもない身体能力だ。ポケモンは、人を簡単に壊せる力を持っているのだから。もしかしてこの人もその虫取り網でポケモンを捕まえるのだろうか。

「この前も僕のストライクがね…」
話がポケモン自慢に変わってきた。ガサガサと草をかき分ける音が聞こえる。誰かがこっちに近づいてきた。虫取り大会に参加しているトレーナーだろう。俺に気づいたトレーナーは、可哀想にという同情の視線で俺を見てきた。助けてくれ。そう期待を込めて見るが、黙って首を横に振られた。ダメか。

「あ、あの？」
「なんだい？」
「もうそろそろ虫取り大会終わっちゃうんですけど？」
説教が嫌なのもあるが、本格的に時間がなくなってきた。このままでは、なにも捕まえられないまま終わってしまう。

「あれ、もうそんな時間？ご、ごめん。つい熱くなっちゃった。」
このまま何も言わなければ、永遠に喋り続けていたのではないだろうか。でも、この人がむしポケモンを愛していることは理解できた。

「あの虫取り大会で優勝するコツとかないんですか？」
だから、質問をしてみた。これほどむしポケモンが好きなら、虫取り大会に参加したこともあるだろう。

「あれ、僕さっき言わなかったっけ？」
「言ってません」
話の大半を聞き流していたので、言ったかどうか覚えていない。だが、本人もあまり覚えてなさそうなので誤魔化した。そうだっけなぁ、と首を傾げている。

「えっと、まず一つ目は
できるだけ体力を残したまま捕まえること。二つ目が育ったポケモンを捕まえることかな。あとは、ストライクやカイロスが評価が高いよ」
そうは言われても、ストライクとカイロスがどんなポケモンなのかまったく分からない。

「ストライクとカイロスってどんなポケモンですか？」
この人なら、具体的に教えてくれるだろう。聞かないことまで事細かに。俺がそう言うと、それを待っていたとでも言うように目が輝

く。

「知りたい？」
これは、ゴールドが自転車を自慢してきた時のように、答えるべきなのだろう。

「知りたいです」
なんか面倒くさいことになったなぁ。

「ふふっ、じゃあ特別に見せてあげよう。出ろっ、ストライク！」
ボールを取り出し、ポケモンを出してきた。確かに口答で言うより、直に見たほうがいいだろう。俺のためではなく、ただ自慢したいだけなのだろうが。

光と共に一匹のポケモンが出た。顔は竜のようにりりしく、両腕は鎌のような形で切れ味が鋭どそうだ。背中には薄い翼が生えている。全体的に緑色でカマキリを思わせる。

「どうだい、かっこいいだろう。見てくれよ、この鋭い目をりりしいだろう。それに、この鎌。うっとりするほどきれいだろう。それに、スピードだって速いんだ。見たい？見たいだろう？ふふっ、でもダメだよ。今は虫取り大会中。そういうのは大会の後でね。それにこの前なんか…」
またもや、始まった。一度こうなったら、中々止まらないだろう。放っといてストライクを見る。
「かっこいい…」
かっこいい上に、強そうだ。確かにこのポケモンなら、高い評価をとれそうだ。というか、俺も欲しいな。

「そうだろう。かっこいいだろう。君は見る目があるなぁ。それに

…」未だトリップ中だが、俺の言葉は聞こえたらしい。スゴいな、この人。こんなポケモンがこの自然公園にいるのか。そう思うと、途端にやる気が湧いてくる。

「俺にも捕まえられますか？」

「ああ、あれは僕のストライクがまだ弱い頃の…え、何、なんか言ったかい？」

「あ、なんでもないです」

まぁ、いい。少なくとも、この自然公園内にはいるんだろう。時間は、残り十分。運が良ければ、虫取り大会中に捕まえられるだろう。もう時間がない。

「色々、ありがとうございました、それじゃ」

「そうその時だ。僕のストライクのれんぞくぎりが…」気づいてないようだが、いいだろう。虫取り大会が終わった後に謝ろう。そして、俺はストライクを探し始めた。

「一位は、ストライクを見つけたカナさん！おめでとうございます」パチパチと拍手の音が鳴る。結局ストライクなんて見つけられなかった。出てくるのは、相変わらずにいもむしばかり。残り一分で、しょうがなくキャタピーを捕まえたが、入賞すらできなかった。

離れて結果発表を見ていたのだろう、ストライクを自慢してきたあの人が近づいてきた。

「やぁ、今回は残念だったね」
何をしにきたんだ、この人。慰めにでも来てくれたのだろうか。

「まぁ、こうゆうは時の運だよ。そこまで落ち込まないで」自分では分からないが、周りから見たら、落ち込んでるように見えるのか。ストライクが欲しかった。今更ながら、最初からちゃんとやっておけば良かったと後悔した。

「大丈夫です。明日になればすっかり忘れてますよ」
はは、と誤魔化すように笑うも、目の前にいるこの人には通用しないようだ。未だ同情の視線を向ける。

「ねぇ、もし良ければなんだけど、僕のストライクと君のキャタピー交換しない？」
耳を疑った。この人は、どうやら、こんないもむしとストライクを交換したいらしい。

「いいんですか？」
一時の同情で、大事なポケモンを渡すなんて、後で後悔するだけだろう。交換した後になって、やっぱり返せと言われたら面倒だ。
「いや、もちろん今持っているストライクはダメだよ。違うストライクだよ。ストライクなら十匹持っているから。それに君なら、大事にしてくれると思ってね」
ストライクを十匹も持ってるのか。かなり引くものがあるが、そのおかげでストライクを手に入れられるのだ。感謝しなければならない。それに、いつのまに、信頼されたのだろう。

「ありがとうございます！」
頭を下げる。虫マニアの変人だと思っていた。今でもその評価は変わらない。だが、それに付け加えるものがある。とてつもない、いい人だと言うことだ。

「あの名前を教えてくれませんか？」
せめて、名前くらいは知りたかった。

「ああ、僕の名前はツクシ。よろしくね」

十八話

「おーい！メガネ！」
遠くから凄まじい速度で、ゴールドが近づいてくる。あの速度で自転車を操作するのは、至難の技だろう。それを事も無げに操作するゴールドの運動神経が凄いのか、自転車の性能が凄いのか。おそらく、どちらもだろう。ゴールドは運動が得意そうだし、あの自転車は百万円だ。並じゃないのだろう。

「おお、ゴールド！」
俺の直前で、急ブレーキする。ゴールドがブレーキを握るのに合わせてタイヤが止まる。急激なブレーキに地面に跡がつく。一体何をしに来たんだろう。ってか、危なっ。

俺は、今コガネに帰る途中の道を歩いていた。日は暮れ始めていて、涼しい風が吹き、肌をなでる。もうすぐ夜だ。こんな時間帯にどうしたのだろう。

「へへっ！これを見ろ！」
そう言って、ゴールドは菱形の薄い石のようなものを見せてきた。
これはジムバッチ！？

「おまえっ、アカネを倒したのか！？」
予想よりずっと早い。一週間はかかると思っていた。一日特訓した程度でジムリーダーを倒せるものなのだろうか。

「おうよ！宣言通り、コテンパンにしたやったぜっ！」
ゴールドはそう言うが、俺はゴールドがジムから泣きそうな顔で出てくるのを見た。きっと何度も挑戦したのだろう。俺にした宣言を、

嘘にしないようにするために。一度吐いた言葉は違えない。何というか、漢だな。

「そっか、お前凄いな」

逃げ出して後回しにした俺が小さく見える。そして、一度負けても、すぐ立ち上がり向かっていくゴールドが大きく見える。どうしようもない差があるように思えて仕方なかった。この気持ちを劣等感と呼ぶのだろう。

「どした、元気ないな？　」

「いや、大丈夫。気にすんな！」

元気に声を出し、この感情を心の奥に閉じこめる。まぁ、それならいいんだけど、と俺の反応を見たゴールドが言う。

「そういえば、何しに来たんだ？ジムバッチを見せにきたのか？」

ジムバッチを見せるためだけに、俺を追ってきたのか。そのためだけ、というのも十分ありえそうだが。

「ん、ああ。それもあるけど、エンジュに行こうと思ってな」

「エンジュには行けねぇよ。道を塞ぐように木が立ってるからな」

そう、俺はそのせいで先に進めなかった。あの木の場所につくには、ここから数時間はかかる。自転車を使えばもっと早いだろうが、どっちにしろ大分時間を無駄にする。だから、ゴールドも時間を無駄にしないように教えた。

「おう、知ってる、知ってる」

「じゃあ、どうして行くんだ？」

道が塞がっているのに何故行くのだろう。疑問に思ったので俺がそう言うと、ゴールドは自分のバッグを漁り始めた。やがて目当ての物を見つけたのか、あるものを取り出した。

「じゃじゃーん！秘密兵器だ！」
ゴールドは、自分で効果音を出しながら、ゼニガメを象ったじょうろを出した。これで一体どうするんだろう。劇薬でも入っているのか。ああ、でも持ち運びが危険過ぎるか。そんなあれこれ考えている俺に気づいたのだろう。ゴールドが口を開く。

「これは、ゼニガメジョウロだ」
正式名称はそう言うのか。いや、違うだろ。俺が聞きたいのは、それじゃない。

「そうじゃなくて、それでどうすんの？」
「へへっ！秘密っ！」
秘密って。なにを考えているんだこいつ。何をしようとしてるのか、まったく分からない。だが、自信満々に出したのだ。ゴールドなりの考えがあるのだろう。失敗しそうな気もするが。

「まぁ、安心しろって、明日には通れるようになってるから。」
そのくせ、妙に信頼できる。これは、ゴールドの人柄から来ているのだろう。俺には、ないものだ。心底羨ましく思う。

「そんじゃ、オイラはそろそろ行く。じゃあな」そう言って、ゴールドは自転車であっというまに行ってしまった。相変わらずのスピードで、もう見えなくなってしまった。俺もコガネに行くか。俺は、コガネに向けて再び歩み始めた。

次の日、再びキキョウシティを目指して俺は歩き始めた。まだ日は昇り始めたばかりだ。俺は、また昨日の木の場所まで行こうと思っていた。別にゴールドを信頼している訳じゃない。ただ合理的に考えただけだ。

もし回り道をしてキキョウシティに行った場合、最低二日、もしかしたら四日かかるかもしれない。というのも途中で、巨大な森と洞窟があるからだ。俺は、どうやら方向音痴らしい。そんな俺ならもっとかかるかもしれない。それなら、一日で行けるルートに賭けるのも悪くない。そう考えたからだ。

「木がない」

俺は、昼過ぎに昨日の場所に着いたのだが、そこには、なにもなかった。確かに昨日はあった筈なのだが、きれいさっぱりなくなっている。だが、地面や周りの木にまだ新しい傷跡があるのが見える。ゴールドは、あの木と戦ったとでも言うのか。

「…凄いな、ゴールド」

口から思わずにこぼれた。俺が出来なかったことを簡単に乗り越えていく。アカネしかり、この木しかり。きっと相応の努力をしたのだろう。それは分かる。けれど嫉妬せずにはいられない。その実力、その人柄に。俺は、平凡だ。壁に当たれば避けて通り、いつか、いつかと言い訳する。ゴールドは、立ちふさがる壁を破壊して進んでいくのだろう。そんな感じがする。改めて思う。あいつは凄い。けれど負けたくない。何故かと言われても困る。俺だって理由は分からない。でも負けたくない。

俺はそう決意して、ゴールドがなんとかした道を通り、キキョウシティに向かった。

キキョウシティに入り、真っ先に目に入ったのは三十メートルほどある巨大な塔だ。というより他に目立つものがない。大都会であるコガネと比べるのが間違っているのかもしれない。コガネはラジオ塔やリニアなど目立つものが多すぎた。どことなくほっとする感じの街だ。

とりあえずポケモンセンターを目指そうと思い、探そうとしたところ、突然なにかが鳴った。その音はポケギアから出ている。なんだ、と思い見てみると、電話らしい。俺に電話を掛けてくるのはあの人しかいない。

「はい、もしもし」

「私よ、アテナ。あなたに頼みたい任務があるわ」

十九話

「任務ですか？」
今まで任務なんてしたことがない。サカキさんを探すのが任務と言えば任務なのだが。思わず聞き返してしまった。

「そ、任務よ。今のあなたにうってつけの仕事があるのよ」
「はぁ」
今俺は各地の洞窟を放浪中だ。ということは、それに関係しているのだろうか。

「気の抜けた返事ねぇ。まぁ、いいわ。あなたには、ラプラスの確保を頼みたいのよ」
ラプラス。確か水と氷タイプのポケモンだ。生息地がよく分かっていなく、個体数も少ない筈だ。そんな珍しいポケモンを俺に探させるのか。

「あのラプラスなんてどこにいるんですか？」
俺にラプラスを見つけられるなんて思わない。それに、そんな暇があるなら、サカキさんを探しに行きたい。

「あなた、つながりのどうくつを知ってる？」
「一応、場所くらいは…」
確か、キキョウシティとヒワダタウンの間にある長い洞窟だ。空を飛べるポケモンがいない場合、ヒワダに行くトレーナーは必ず通らなければならない。ゴールドもそこを通ったのだろう。

「知ってるなら話が早いわ。そこでね、最近夜な夜な何かの叫び声が聞こえるのよ。」

「幽霊の、ですか？」
それなら、行きたくない。幽霊なんてポケモンでも倒せない。よし、その洞窟は後回しにしよう。いや、それが俺とゴールドの差か。やっぱり行こう。

「分かりました。幽霊を倒しに行きます」
ゴールドには負けられない。もう逃げるのはやめよう。できるだけ。そう決意して言ったのだが、アテナさんの反応がない。沈黙が痛い。

「…あなた、もしかして馬鹿？」
沈黙の果てに言ってきたのだが、その言葉だ。この声色は懐かしい。サカキさんが時折俺に向けていた。

「違うわよ。幽霊じゃなくてラプラスのよ」
ああ、なるほど。ラプラスか。よく考えれば、話の流れから言って、そっちか。サカキさんのしてくれたガラガラの幽霊の話が、頭に残りすぎていた。あれは、怖い。

「つながりのどうくつにラプラスがいるんですか？」
「そうよ。まぁ、洞窟のかなり奥なんだけどね」
ラプラスはその稀少さ故に、過去に乱獲されたポケモンだ。利用者数の多いつながりのどうくつにいながら、まだ捕まえられていないということは、余程奥にいるのだろう。もしかしたら、サカキさんもいるかもしれない。サカキさんといた洞窟でラプラスの声なんて聞いたことがないが。でも今いるのは、過去だ。可能性はある。

「だから、あなたがつながりのどうくつに行った時に、ついでに捕まえて欲しいのよ」
各地の洞窟に行こうとしている俺なら、つながりのどうくつにも行くと考えたのだろう。実際、俺はつながりのどうくつに行こうとし

ていた。なら、丁度いい。

「はい、分かりました。ラプラスを捕まえます」サカキさんを探す途中で、ついでにできることならやる。それがロケット団のためになるなら。

「もし捕まえたら、どうすればいいですか？」
チョウジのアジトに向かえと言われても困る。まだ全然サカキさんを探していないのだ。

「そうねぇ、私に電話をくれれば、いいわ。そしたら、メンバーの一人を送るから」
それなら、ありがたい。まだまだ旅を続けることができる。わざわざ、ロケット団の一人を送ってくれるとは、本当にアテナさんには感謝しなければならない。

「じゃ、そんなとこかしら。頑張ってね」
ぶつり、と電話が切れた。つながりのどうくつは、幸運なことにキキョウシティのすぐ下にある。すぐと言っても、かなり歩かなければならないが。そのため今日は行けない。もうじき日が沈む。今から行ったら、着くのは真夜中だろう。俺は再びポケモンセンターを目指して歩き出した。

ポケモンセンターは、意外とすぐに見つけることができた。コガネと違い建物が少なくすっきりしているからだろう。だが、困ったことにやることがなくなってしまった。日はまだ沈んでいる途中。今から、つながりのどうくつを目指すほど馬鹿じゃない。だが、まだまだ人が行動できる時間帯だ。

何をしようか、と悩んでいたところ、不意にあの塔が頭をよぎる。キキョウシティに着いてすぐに見た、キキョウで一番目立つ建物だ。寂れたとは言わないが、なんとなく歴史を感じさせる。

だが、サカキさんを探さずに暢気に塔を観光しに行っていいのだろうか。別にダメでは、ないのだろうが、罪悪感を感じてしまう。そうは言っても以前、虫取り大会に参加してしまったのだが。考える。だが、何がよくて何が悪いのか結論なんて出てこない。結局思考を放棄した。まぁ、サカキさんならそれくらい許してくれる。そう自分に思い込ませて塔に向かった。

塔に入って最初に目に入ったのは柱だ。塔には、一本の大きな柱があり、それが塔を支えているらしい。その柱は、常にぐらぐらと揺れている。この塔大丈夫か、と心配になってしまう。中にいたおばあちゃんに聞いたところ、まったく問題ないらしい。ついでに言えば、この塔は、マダツボミの塔と言うようだ。各所にマダツボミの像が置かれているのは、そういうことか。

納得して、上の階にあがる。大きな柱が床を貫ぬき、天井まで貫いていた。やはり一番上の階まで伸びているのだろう。コラッタが床を這い回っているのが、目に入る。だが、取り立てて目立つものはない。さらに上の階にはなにがあるんだろう、とさらに上の階を目指そうとすると、お坊さんが立っていた。お坊さんは、目を瞑りなにかを呟いている。どこか不気味だ。気づかれないように俺がこっそり前を通り過ぎようとすると、カッと目を見開いた。

「そこの子供、勝負だ！」

「は、はいっ！」

「ま、参った」
勝負自体には勝ったのだが、なんで勝負したのか分からない。ここは、観光名所じゃないのか。俺はただ観光しに来ただけなのに。

「あの、ここって何なんですか？」

「何と言われても…。ここは、マダツボミの塔。ポケモンの修行をするために建てられた 」
なるほど。俺が間違っていたのか。だが、それなら好都合だ。サカキさんを探すために、強さは絶対必要だ。ロケット団員としても、一人のトレーナーとしても。観光なら罪悪感を感じても、修行なら許されるだろう。

「じゃあ、お坊さん見たいな人が、いっぱいいますか？」

「ああ、いっぱいいるよ。一番上の階には長老様もいる。一度相手にしてもらえばいいだろう」
長老様。なんか強そうだ。とりあえずそこを目指そう。

「しかし、最近の子供は強いな」
「え？」
「いやな、ついこの間子供に負けてな」
もしかして、ゴールドのことだろうか。ゴールドがこの塔に来ている可能性は十分ある。それに、強さも申し分ない。

「もしかして、黄色と黒の帽子を被った、ワニノコを連れた子供ですか？」

「ああ！その子だ。確か長老様に勝ったらしいな。君の知り合いなのか」
やっぱりゴールドか。それに長老様に勝ったのか。なら、俺も負けられない。俺の中の対抗心がめらめらと燃えてきた。

「あとは、目つきの悪い子供だな。その子も長老様に勝ったはずだ。その子も君の知り合いか？」
「え？違います」
誰だそれ？俺は、そんな子供見たことがない。ゴールドの他にも、そんなに強い奴がいるのか。

「そうなのかい？長老様が少し気にかけていてね。まぁ、君には関係ないか。」

「時間があるなら、このマダツボミの塔で腕試しでもして行くといい。皆戦いたくてうずうずしているからね」
そのつもりだ。ゴールドにも、その目つきの悪い子供にも負けるつもりはない。お坊さんに一つ礼を言って、上の階に進んだ。

二十話

お坊さんの使うポケモンは、大抵がマダツボミだ。線のように細い体を持ち、マヨネーズのチューブに似た顔をしている。そのひょろっとした体を見ると、俺でも倒せるんじゃないかと思うが、戦ってみると、意外に力強く驚かされた。やはりポケモンは見かけで判断してはいけない。それにしても、何故皆マダツボミを持っているのだろうか、まマダツボミの塔にいるトレーナーは、マダツボミを持っていなければならないというルールでもあるんだろうか。

「ストライク、つばさでうつ！」
ストライクが背につけた翼を広げ、相手のマダツボミに向かって突進していく。ストライクは、実践ではあまり使う機会がなかったが、この塔では、よく使う。それで分かったのだが、ストライクは速い。今の手持ちの中では、一番速いのではないだろうか。一瞬だ。目の前にいたストライクが、瞬く間にマダツボミとの距離をつめる。そしてその勢いのまま、マダツボミを吹っ飛ばした。気絶しているのだろう。まったく反応しない。

「参りました」
お坊さんが、マダツボミをボールに戻し、一礼をした。もう何人のお坊さんと戦ったのだろうか。少なくとも十人はいっただろう。すべてストライクで戦ってきたがもう限界だろう。身体中に細かな傷ができ、スピードも落ちている。これ以上戦わせるのは、酷だろう。
「あの、長老様のところはまだですか？」
まだまだだと言われたら、帰ることも考えなくてはならない。時間的にももう遅いだろうし、ポケモンをこれ以上傷つけるわけには、いけない。

「この奥にいらっしゃいますよ。挑むのなら心してかかりなさい」
どうやらもう、すぐそこまで来ていたらしい。大分上の階まで来たので、そろそろだとは思った。それにこの階には、お坊さんの数が多い。もしかしたらという予感はあった。お礼を言って、俺はさらに奥に進んだ。

そこには、多くのマダツボミの像が置かれていた。物言わぬ像の、何も写していない瞳が、どこか不気味だ。ゆらゆらと揺れる柱の、ぎしぎしと言う音が嫌に響く。誰もいないのかと思い、あたりを見渡す。すると見つけた。マダツボミの像の横にひっそりと老人がたたずんでいた。

「あなたが長老様ですか？」
おっかなびっくり声を掛ける。存在感ない姿はどこか幽霊にも見えた。

「いかにも、そうじゃ」
どうやら、長老様で合っていたらしい。長く伸ばした真っ白な髭が、仙人のようにも見える。刻まれた皺が、その老人の歴史を物語る。

「ここに来たということは、わしと戦いに来たんじゃろ」
顔の皺を歪めて口を開く。しわがれた声がのどの奥から出てくる。
「はい！」
その通りだ。このおじいさんと戦うために、ここまで上って来たのだ。

「ほっほっほ。いい返事じゃな。さて君はどうかの」
そう言って、見定めるように俺を見る。重たそうに開いた目蓋から

は、鋭い瞳が姿を表す。どこまでも見透かされてそうで居心地が悪い。

「ふーむ。君は前に来た二人とは、また違うようじゃな」
前に来た二人とは、ゴールドともう一人の少年のことだろう。ゴールドと違うなんて自覚している。俺は、あんなに強くないし、まっすぐじゃない。もっと弱い。俺はその弱さをなくすために努力しているのだ。このおじいさんに言われなくても、とっくに分かっている。

「違いが分かるんですか？」
一目見ただけで、その人を見極めることなんてできるのだろうか。それなら、この人の目に俺はどう写っているんだろう。よほど矮小に写っていることだろう。

「ほっほ、なんとなくじゃよ。なんとなく。そこまではっきりとは、分からんよ」
なんとなくでもすごい。というより、もしはっきりと分かるのなら、妖怪の域だろう。もしかしたらこの人なら俺の望む答えを出してくれるかもしれない。

「一つ聞きたいことがあるんですが」
「なんじゃ」

「あなたの目には、ゴールドと比べて、俺はどう見えますか？」
このおじいさんから見た、俺とゴールドの差を知りたかった。俺はゴールドより劣っている。そんなこと分かっている。だけど追いつけないと諦めたくない。その差を知ることから、俺は一歩進めるのだ。おじいさんなら、その差を正確に評価してくれるだろう。

「ゴールド？」
「えっと、帽子を逆に被った、ワニノコを連れている少年です」
「おお！あの少年か。あの子は、強いぞ。強く、優しく、真っ直ぐじゃ。人だけでなく、ポケモンからも信頼されとった」俺から見たゴールドもそうだった。そんなゴールドに嫉妬をしたし、劣等感を感じた。

「君は、そうじゃの。分からん」
「は？」

「いやなに、見るだけじゃ、さすがに分からんのよ。君は何をしにここに来たんじゃ？」
そう言って、おじいさんは、モンスターボールを掲げてにやりと笑う。戦えば分かる、と言っているのか。元よりそのつもりで来たんだ。それで分かるのなら、戦うだけだ。

「分かりました。戦いましょう」
俺もモンスターボールを構える。ストライクはもう限界だ。今いる手持ちは三体。それで、どうにかして勝つ。

「さて、君がどれほどのものか見せてもらおうかの。出るんじゃ、ウツボット」
そう言って、ボールから化け物を出した。そのポケモンはウツボット。マダツボミの二段階進化系だ。マダツボミなんかと格が違う。その大きく開いた口は、人一人なら、軽々と飲み込みそうだ。

「いけっ、イーブイ！」
モンスターボールから光が溢れて、イーブイが現れる。目をきっと細めて視線鋭くウツボットを見つめる。捕まえたばかりの時は、力強さなどまったく感じなかったが、今では、強く成長したのが分か

る。しばらく、ウツボットとイーブイがにらみ合う。

「イーブイ、とっしん！」

防御や反動を無視して、相手に勢いよくぶつかりに行く技だ。そのため威力は強いが、自分もダメージを受けてしまう。イーブイは、走り始めて段々と勢いに乗っていく。

「ウツボット、ヘドロばくだんじゃ」

イーブイは遠距離からの技を持っていない。そのために、まずは距離を詰めなくてはならない。だが、ウツボットはそれをさせない。禍々しい色の球体状の物をとばしてくる。イーブイの勢いに負けじと、ヘドロばくだんの勢いも強い。ヘドロばくだんとイーブイが衝突するも、イーブイが勢いに負けて弾かれる。そして着地もできずにどさっと倒れた。

「イーブイ！」

ダメージはあるようだが、戦闘不能とまでは、いっていないようだ。イーブイはすぐに立ち上がり、ウツボットに視線を合わせて、慌てたように俺を見た。なんだと思い俺もウツボットに視線を戻す。ウツボットのまぶしさに目を細める。ウツボットは、光を集めていた。ウツボットに光が段々と集まり、何をしようとしているのかやっと理解した。慌ててイーブイに指示を出す。

「イーブイ、こらえる！」

「ウツボット、ソーラービーム！」

ウツボットから放たれた光に、イーブイが飲み込まれた。ソーラービーム。溜めが必要なこの技だが、草タイプ最強を誇る威力の技だ。決して喰らっていい技じゃない、やがて、光線の威力が落ちてきて、イーブイが姿を表す。

「なんと…」
おじいさんから、声が漏れる。倒したと確信していたのだろう。だが、イーブイは未だ健在だ。身体中に傷を負い、足取りもふらふらだが、立っている。目は未だ光りを失なわず、ウツボットを睨んでいる。こらえるという技がある。どれだけ威力の高い技を喰らっても、戦闘不能の一歩前で耐えることができる技だ。指示を出すタイミングがぎりぎりなので、危なかった。俺もどうなるか分からなかった。

「だが、わしが有利なことに変わりはない」
そう。ぎりぎりで耐えたところで、おじいさんが未だ有利。ウツボットは体力が有り余っているし、イーブイはあと一撃でもあたれば負ける。だが、こういう危機的状況で威力を発揮する技がある。

「イーブイ、じたばた！」
体力がないほど威力を発揮する技だ。全てはこの技の布石だ。この技を狙っていた。今から逆転劇の始まりだ。逆転の狼煙を上げようと指示を出したのだが、イーブイは、動かない。

「イーブイ？」
イーブイに声をかける。すると、一度ふらっとふらつき、そのまま倒れた。

「毒、か」

「その通り。ウツボットの放ったヘドロばくだんには、相手をどく状態にする効果があるんじゃ。、残念だったの」
状態異常というものがある。どく、ねむり、まひなどがそれにあたる。ポケモン勝負を優位に進める上で、重要な要素だ。イーブイが、どくの状態異常になっているのに、気づかなかった俺のミスだ。と

いうより相手が一枚上手だった。

イーブイをボールに戻す。そして俺はおじいさんに視線を合わせた。このおじいさん強い。長老様と言われるだけのことはある。でもゴールドは、この人に勝ったんだ。負けられない。

「出ろっ、ゴルバット！」

ゴルバットは、一番最初に仲間になった、最も信頼しているポケモンだ。光と共にゴルバットが現れ、宙を駆ける。バタバタと忙しなく翼を動かし、今か今かと俺の指示を待っている。

「ゴルバット、あやしいひかり！」

「ウツボット、ヘドロばくだん！」

ほぼ同時に指示を出す。どちらのポケモンも、同時に動き出すが、初動の差でゴルバットが勝った。ゴルバットから奇妙な光が放たれて、ウツボットが混乱する。今にも発射しそうだったヘどろばくだんは、制御を失い、はじける。ウツボット自身にも当たったが、元々どくタイプも入っているウツボットだ。さほど効いているようには見えない。

「ゴルバット、つばさでうつ！」

今がチャンスだ。草タイプのウツボットにひこうタイプのつばさでうつ。相性の上では勝っている。その上、今が一番の隙だ。攻撃しない手はない。翼を広げ、ゴルバットは、突っ込んでいく。

「ウツボット、ヘドロばくだん！」

混乱しているからと言って、何もせずにダメージを喰らう気はないのだろう。ウツボットも混乱しているが、指示が聞こえたのかヘドロばくだんを放つ。だが、まるで見当違いの方向に放ってしまった。その隙を見逃さずに、ゴルバットが勢いそのままにウツボットをそ

の翼で切り裂いた。ウツボットが甲高い悲鳴を漏らす。その悲鳴と共にウツボットが崩れ落ちる。

「ねむりごなじゃ！」

最後の力を振り絞り、ウツボットが持ち直す。今から放つ技は、その名のとおり、浴びたら眠ってしまうのだろう。ウツボットがゴルバットに粉を放つ。ゴルバットは、ウツボットから少しでも距離をとろうと、翼をはためかせ逃げる。結果としてゴルバットは、逃げ切った。未だウツボットは、混乱中で見当違いの方向にねむりごなを放ったのだ。ウツボットはそのまま力つきたのか、地に伏せた。

「おつかれさん、ウツボット」そう言って、おじいさんはウツボットをボールに戻す。正直危なかった。完全に倒したと思って気を抜いていた。なにか一つ間違っていたら、ねむりごなが当たっていただろう。この人との勝負では、一切気が抜けない。おじいさんは、次のポケモンを出してくる。一体いくつのポケモンを持っているのだろう。

「行くんじゃ、ヨルノズク　」

ヨルノズクはぐるりと首を回し、ゴルバットを観察している。それに自然と目が行ってしまう。姿はフクロウそっくりだ。その目からは高い知性が窺える。このまま落ちるのではないかと心配してしまうほど、首を回している。やがて百八十度回転したあたりで、一気に首を戻した。そこで、自分が気を取られすぎていることに気がついた。

「ヨルノズク、さいみんじゅつ」

「ッ！、ゴルバット、あやしいひかり！」

指示を出すのが遅れた。おじいさんに一歩遅れて指示を出す。その

差だろう。さいみんじゅつが簡単に当たってしまった。一瞬光を出すも宙を飛んでいたゴルバットが、ばたりと地面に墜落する。本来さいみんじゅつは、それほど当たりやすい技じゃない。それを簡単にあてさせた自分の愚図さに腹が立つ。相手のポケモンに見入っていた。そんなの言い訳にもならない。ボールにゴルバットを戻す。眠ったまま出し続けても、相手のサンドバックになるだけだ。わざわざサンドバックにさせる必要もない。

「いけっ、ランターン」
相性の上でも、ランターンの方がいい。ランターンはでんきタイプも混じっている。ひこうタイプのヨルノズクには天敵だろう。

「ヨルノズク、さいみんじゅつじゃ」
さいみんじゅつは、強力だ。眠ってしまえばほとんどのポケモンは抵抗できない。ねごとやいびきを覚えていれば別だが。あいにくと、ランターンは覚えていない。なら、当たる前に倒せという単純な作戦だ。

「ランターン、十万ボルト！」
ランターンはバチバチと電気を溜め始める。そしてヨルノズクがさいみんじゅつを発動させた。少し遅れてランターンも溜めた電撃を解き放とうとした。発動したのは、ヨルノズクのほうが早かった。だがランターンは眠ることなく、ヨルノズクをに十万ボルトを当てた。電撃を浴びたヨルノズクが、地面に墜ちる。ヨルノズクは地面に痛々しい音を立ててぶつかった。そのまま気絶するのかと思ったが、再び飛び立とうと体を起こす、しかし途中で力尽きたかのように倒れた。

「な、何故ヨルノズクはまったく別の方向にさいみんじゅつをやったんじゃ！？」

ランターンの十万ボルトが当たったのは、ヨルノズクが別方向にさいみんじゅつを使い、技をはずしたからだ。だが、運なんかじゃない。

「もしや、先ほどのゴルバット…」

「ええ、ゴルバットのあやしいひかりは命中してたんです」

さいみんじゅつで眠らされる直前発動したあやしいひかりは、ヨルノズクに命中していた。それに気づいたから、俺はランターンに十万ボルトを使わせたのだ。勝利を確信して。

「参った。わしの負けじゃよ」

二十一話

「ありがとうございました」
俺もそう言って頭を下げる。本当に勉強になった。最近勝ち続けていたから、俺は調子に乗っていたのかもしれない。勝って当たり前だと、心のどこかで思っていた。だが、現実はどうだ。最後まで気の抜けないぎりぎりの勝利だった。緩んだ気を引き締め直す、いいきっかけになった。

「ほっほっほ。いいんじゃよ。わしも楽しんだからの」
俺も楽しかった。勝つか負けるか、最後まで分からない。ひりつくような戦いとは、こういうのを言うんだろう。

「それでなんですけど」
「何じゃ？」
「俺とゴールドを比べてどうでしたか？」
今一番気になるのはそのことだ。途中からは、それを忘れてポケモン勝負に夢中になってしまった。だが、元々ゴールドとの差を知りたくて始めたのだ。勝負が終わった今、結果はどうなのか知りたかった。

「ふーむ、そうじゃのう。ポケモン勝負の強さで言えば、同じくらいかの」
「まさか！そんなはずないですよ」
「ん？何故じゃ？」
「だってゴールドですよ。トレーナーとしての才能に満ちあふれたあいつですよ」
あいつは、俺と違って凄いんだ。うじうじといつまでも後悔しないし、誰からも好かれるような豪快な性格だ。根性だって優しさだっ

てある。だから、俺は嫉妬したんだ。俺との違いに。もし俺とゴールドが同じ強さならこの嫉妬は何なんだ。

「そうじゃよ。そのゴールド君じゃ」事も無げに長老様は言う。
「なら、なんでそんなゴールドと俺が同じ強さなんですか？」
「君にも、それだけの才能があるからじゃ」
「え？」
そんなわけない。俺は才能がないから、才能のあるゴールドに嫉妬したんだ。
「慰めてるんですか？」そうとしか思えない。
「とんでもない。わしの本心じゃよ。わしは本気で君はゴールド君と並び立つ才能があると思っとる」
「う、嘘です。そんなわけないですよ」俺がそう言うと、長老様は呆れたようにため息をついた。そして「強情じゃの」と呟いた。

「君は、何故そう思うのじゃ。ゴールド君は自分より優れていると」
「それは、そう。見てきたんですよ。身近でゴールドの強さを。」
俺がそう言うと、長老様は意味深に「強さ、か」と言った。俺は気にせず続ける。

「俺が出来なかったこと。俺が諦めたこと。ゴールドはそれを軽々とこなすんです。それを見ると、自分の弱さを嫌でも思い知らされるんですよ」俺が倒せなかったアカネを倒した。俺が通るのを諦めた木をどうにかした。

「それ以外には、ゴールド君を見て何も感じんかったのか？」そう言われて考えてみる。俺はゴールドの強さと自分の弱さ。それ以外に何を感じたか、自分自身に問いかける

「…特に何も」ゴールドの強さばかり、感じていた。

「君はゴールド君と戦ったことは？」
「ない、ですけど…」実際には、一度も戦ったことはない。
「なら、戦っているのを見たことは？」
「…ないです」戦っているところも見たことがない。
「なら、ゴールド君の本当の強さは分からんの」
確かに俺はゴールドが実際に戦ったことも戦っているところを見たことがない。あくまで想像だ。

「でも、俺が勝てなかったトレーナーに、ゴールドは勝ちました」
これは、俺がゴールドより弱いことの証明ではないのだろうか。
「勝負は時の運じゃよ。勝つこともあれば、負けることもある。もしかしたら、次戦ったから、君も勝てるかもしれんぞ」
「それは、そう、ですけど…」

「ふむ、君はさっき、自分が出来ないことを軽々とこなすと言ったの。それはポケモントレーナーとしての強さと直結するのかね？」

考えてみる。あいつは、俺が敗れたアカネに勝った。だが、俺が本当に嫉妬したのはそこか。いや、違う。あいつも一度アカネに敗れた。それでも、すぐに立ち直りリベンジしていく様に俺は嫉妬したのだ。ゴールドの負けん気の強さは、トレーナーとしての強さなのか。

俺が通るのをあきらめた木の件だってそうだ。ゴールドは、どうにかすると言って、実際に取り除いた。俺は、俺ができなかったことをゴールドが成し遂げた、ということから、ゴールドに嫉妬した。だが、木を取り除くということにトレーナーとしての強さが直結するのか。

そもそも強さって何だ。冷静に場を見つめて、的確な指示を出し、その指示に従う屈強なポケモンを育て上げるトレーナーが強いのか。

それなら、負けん気があってどうなるんだ。負けん気があるから強いトレーナーになれる。確かにそうかもしれない。しかしそれは強くなるための要因であって、負けん気があるから強いという訳ではない。ゴールドは強くなる可能性があるだけだ。

だが、強くなるための才能を持っているなら、それはトレーナーとしての強さではないのか。

ああ、もう訳分からん！

「分かんないです」頭がこんがらがってきた。そもそも考えるのは、苦手なのだ。俺の頭では、答えなんて導き出せない。

「ほっほっほ。そうか、そうか」それでいいんだとでも言うように、おじいさんは優しく笑う。

「わしの意見は変わらんよ。君はゴールド君と並び立つ強さを持っている」

「そんなこ」俺が否定しようとすると、長老様はかぶせるように声を出した。

「疑問に思うなら今度、ゴールド君をじっくり観察するがいい。なにか分かるかもしれんぞ」

ゴールドを観察することで何が分かるのか。観察すればするほど、自分との差を実感してしまう。弱い自分が嫌になる。そして強いゴールドに嫉妬してしまう。ゴールドに悪い所なんて一切ない。悪いのは俺だ。俺の一方的な嫉妬だ。あいつは、俺を友達だと言ってく

れた。そんなゴールドに、こんな感情を持ってしまう自分が嫌だ。

「はぁ、分かりました。やってみます」

だが、おじいさんは善意で言ってくれているのだ。俺のために。ここで、嫌です。というのも子供すぎるだろう。

それに、もし、もしこの感情を払拭できるのなら、やってみるのもありだろう。

「それじゃ、俺はそろそろ帰ります」

もう夜だろう。暇を潰すために来たのに、予想外に時間を使ってしまった。そして始めに来た時より、もやもやとした、感情を抱えて戻ることになってしまった。嫌なお土産だ。持ち帰りたくなんてない。

「そうかい。では、そなたの旅が実り多いものでありますように」

おじいさんは、そう言ってお辞儀をする。ありがたい。多くの人に言っているのだろうが、今は俺のために言ってくれている。このおじいさんが言ってくれるなら、いい旅になるような気がした。いつかゴールドの強さを乗り越えて、自分に自信を持てる時が来るかもしれない。俺もお辞儀をして、マダツボミの塔を降り始めた。

その日の夜、俺は夢を見た。というより夢を見ている途中だ。なんとなくこれが夢だと分かった。部屋の中には、一人の少年がいた。テレビをつけているが、それには目もくれず、手元にあるゲームに集中している。ゲーム機は、縦長で上半分が画面になっている。少年はピコピコと忙しく、ボタンを押している。俺は、その少年の後

ろに立っていた。だが、少年は俺に気づいていないのか、まったく反応しない。やがて、テレビは番組が変わり、アニメが流れ出す。少年は、それには興味を持ったのか、ゲーム機を投げ捨て、テレビの前に座る。やがて母親らしき女性がやってきて、投げ捨てられたゲーム機に気づく。注意しようと少年を探すのだが、少年がアニメに夢中になっているのに気づき、一つため息をついて、あきれたように声を出した。

「まったく、あなたは本当にポケモン好きなんだから」

がばり、と布団を勢いよくはいで、俺は目を覚ました。頭が嫌に痛く、吐き気がした。冷や汗が頬を伝う。痛みに耐えるように頭を両手で押さえる。なにか、見ちゃいけないものを見た気がする。必死に思いだそうとするも、さらに頭痛がひどくなる。なにか、俺に関わる重要ななにかを見たんだ。これを逃したら、もう手が届かないような気がした。その痛みを無理矢理押し殺し、夢を思いだそうとするも、掴もうとすればするほど霞のように消えていった。結局、夢の内容は完全に忘れてしまった。それに従い頭痛も吐き気も次第に弱まっていった。時間を確認しようとポケギアを見る。時間は、まだ四時頃。まだまだ起きるには早い時間だ。今自分に起きた異常を疑問に思いながらも、俺は再び眠りについた。

つながりのどうくつには、キキョウシティを道のりに南下していけば、入り口までたどり着くことができる。だが、道は長く、半日は歩かなければたどり着くことはできない。そのため、俺は朝早くから、キキョウシティを出発して、つながりのどうくつに向かおうと思っていた。だが、一度四時頃に起きたせいだろうか、予定の時間

に起きれずに、寝坊してしまった。そのため、今日目指すのは、つながりのどうくつ一歩手前のポケモンセンターである。さすがに洞窟内を探険する、時間も気力も残っていないだろう。

今、俺は順調にキキョウシティを南下している。順調はいいことなのだが、暇だ。暇でしょうがない。太陽はすでにぎらぎらと輝き始め、俺の体力を順調に奪っている。こういう時は、ゴールドの帽子が羨ましくなる。帽子の大事さが、改めて分かった。それは、置いておいて、暇だ。ただ足を動かし、前に進むという単調な作業を続けるのに慣れてくると、他のことが頭に浮かんでしまう。

ゴールドと俺の差はないのか。ゴールドは、凄い、とんでもないやつなんだ。だが、長老様は差なんてないと言っていた。そんなわけない。俺との差があるなんて、当たり前だ。なら、なんでサカキさんは、アテナさんは、俺を誘ってくれたのか。俺に才能があったから？それなら自信を持っていいのだろうか。

頭の中では、答えを必死に探している。だが、やはり答えは出ない。

まぁ、いいか

どうせ考えても結論は出ない。ここで、思考を打ち切る。おや、と前を向けば目の前には看板があった。いつの間にここまで進んだのか。考えている間に大分距離を進んだらしい。看板を見る。

アルフのいせき
東側入り口

あれ、俺の考えていたのと違う。もしかしてまた道に迷ったのか、と慌てるも、別方向にもう一つの看板があるのを見つけた。慌てて

その看板を見る。

ここは三十二番道路
南、ヒワダタウン

おそらく、こっちの道が正しいのだろう。考えながら進むのは危ない。危うく道を間違えるところだった。考え込むのをやめ、道に注意しながら、また進み出した。

二十二話

ポケモントレーナーとは、至るところに存在する。足場の悪い、山の中。広大な海。砂で前も見えない砂漠。ということは、なんのへんてつもない道にいるのは、当たり前のことなのだろう。目の前には、俺が通るのを今か今かと待ちかまえている半袖短パンのトレーナーがいる。視線はすでに俺を捉えている。それに気づいた俺は、視線を下に向けていた。

普段なら喜んで戦いたいが、今は違う。太陽はすでに昇りきっている。つまりもう昼なのだ。洞窟前のポケモンセンターは、まだまだ遠い。このまま何事もなく歩けば、夕方には着くかもしれないが、トレーナー一人一人と戦っていたら、着くのは夜になってしまう。そのため、戦うのは、できるだけ避けたいのだ。

どうしようか、と立ち止まり、しばらく悩む。話しかけられたら、強制的に戦わされる。目があったら、即勝負！なんて過激なトレーナーもいるのだ。おそらく彼もその類の人間だろう。そのため俺は視線を合わせないようにしているのだ。

少年の視線が痛い。ああ、そうか。一つの案を思いついた。だが、これには足の強さが必要だ。俺にそれだけの強さがあるのか。ゴールドの自転車があれば。そう思わずにはいられない。考えてる間にも時間は刻一刻となくなっていく。迷っている暇はない。思考を打ち切り、俺は全力で駆けだした。

高架下までたどり着いた俺は、ゼーハーと荒い呼吸しながら、座り

込んだ。高架下は、太陽を遮り、影がかかっているので、日なたよりずっと涼しい。見上げれば、空には、ふわふわと白い雲が浮かんでいる。そういえば、コガネにも線路があったが、俺の上を走る線路とつながっているのだろうか。

作戦は、全力で逃げただけだ。トレーナーは、何故か一言話してから、勝負に入る。逆に言えば、何も話さず、奇襲のように勝負をしかけるトレーナーは少ない。だから、話しかけられないように全力で逃げた。短パンの少年が、追いかけてきた時は焦ったが。呼吸を整えるように、深く呼吸をする。次第に、正常な呼吸に戻ったころ、トレーナーがいないことを祈りながら、再び俺は進み出した。

俺の目の前には、ポケモンセンターがある。周囲に灯りがないために、一層映えている。周りはすでに暗く、月がぼんやりと淡く輝いている。夕方には着くつもりだったのだが、もう夜だ。これもつりおやじ共が原因だ。

今まで通りに、トレーナーに話しかけられる前に逃げようとしたのだが、釣り人は数が多かった。何故か異様な連携を見せて、逃げ切ることができなかった。結局、釣り人一人一人と戦うはめになってしまった。全員と戦い終わったのは、もう夕方。慌てて、先に進もうとしたのだが、釣り人はしつこかった。釣りのコツや竿の違い、はたまた息子とうまくいっていない、など関係ないことを聞いてもいないのに話してくる。その上、逃げようとしたら、これまた異様な連携を見せてくる。結局、話を最後まで聞いてしまった。

「はぁ」

一つため息をつく。肉体的にも疲れたが精神的にも疲れた。それに

やっとついた、という安堵のため息でもある。もお、今日は何もしない。俺はそう心に決め手、ポケモンセンターに入った。

自動ドアが機械音と共に開く。ポケモンセンター内は、光に満ちていて、俺に安心感を与えてくれる。こんな位置にあるポケモンセンターだが、意外と人はいるらしく、ちらほらと目に写る。ポケモンの傷を治すために一直線に、大きな装置と共にいるジョーイさんの元に行く。お願いします、と言い、モンスターボールを差しだす。ジョーイさんは、それを装置にはめる。ジョーイさんの後ろにある装置は、ポケモンを一瞬で回復させる、とんでもない装置だ。そのため利用客が多く、並ぶこともあるのだが、今日はそういうこともないようだ。装置から軽快な音が鳴り響く。これが回復終了の合図だ。どうやら、終わったようだ。モンスターボールを受け取り、後ろに人がいるのに気づく。

そこにいたのは、中性的な顔立ちに、紫色の髪。俺にストライクをくれたあの人だ。

「ツ、ツクシさんじゃ、ないですか？」

「ん、ああ、君か」

こんなところで合うなんて、ほんとに奇遇だ。想像もしなかった。なんでここにいるんだろう。

「君と交換したストライクは、元気にしているかい？キャタピーはもうバタフリーに進化したよ」

俺があげたキャタピーを育てたのか。あんないもむしを育てるなんて凄いな、この人。それもバタフリーまで育てたのか。さすが、虫マニアだ。

「はい、ストライクは元気にしていますよ。そんなことより、なんでここに？」

「ああ、調査だよ。最近つながりのどうくつを通るトレーナーから、苦情が寄せられていてね。僕が調査することになったんだ」

調査って、なんでこの人がそんなことを。それより、調査されるのはまずい。おそらく、その苦情の原因はラプラスだろう。俺の目的は、ラプラスの確保だ。そのためにボールだって、いっぱい買った。先にラプラスを捕まえられてしまったら、全てがダメになる。口を開き、震えそうになる舌で、声を出す。

「い、いつ調査をするんですか。もう真っ暗ですし、今日はやめた方がいいんじゃないですか」

「はは、さすがに今日は行かないよ。明日の朝一番に行こうと思ってる。」

どうやら、時間はまだあるようだ。だが、時間は明日の朝まで。時間は短い。道に迷って、ラプラスを見つけられなかった、では済まされないだろう。今日は徹夜になる可能性だってある。ほんと、なんて時に来てくれたんだこの人。

「そうなんですか。じゃあ頑張ってください。僕は行くところがあるんで、そろそろ行きます」

「ん、そうかい？外は真っ暗だ。行くんなら気をつけてね」

「はい、ありがとうございます」

そう言って、俺はツクシさんに背を向けて、歩き出した。

つながりのどうくつ。サカキさんといた洞窟かもしれない、と思ったが、違うのかもしれない。サカキさんと一緒にいた洞窟の全貌を知っているという訳じゃない。知っているのは、一部だ。滝があること。ラジオがある部屋があること。入り口を一カ所。それくらいだ。つながりのどうくつには入ったばかりだ。勿論、奥にラジオの置いてある部屋があったり、滝があるかもしれない。だが、なんとなく。なんとなく違うのだ。それは直感でしかない。普段は、そこまで信用できるものじゃないのだが。だが俺は何故かその直感を捨てきれないでいた。

洞窟に入る前は、道に迷うかもしれない、と少し不安でいたのだがその不安は解消された。鳴き声がするのだ。俺はラプラスだと分かっているのだが、知らない人には不気味だろう。洞窟内をこだまするその声は、幽霊の声にも聞こえかねない。俺だったら、絶対びびっている。

声を頼りに洞窟の奥に進む。声は、洞窟の下の方から聞こえているようだ。下に進むにつれて、心なしか、じめっとした空気の湿り気を感じる。滝でもあるのだろうか。進んでいるうちに気づいたのだが、トレーナーがいない。時間の問題もあるのだろうが。わざわざ、不気味な声の出る方向に進むトレーナーもいないのだろう。

俺は、その音源目指して、さらに洞窟の奥に進んでいった。

二十三話

洞窟の中なのに、池のように水がたまっているところを何カ所か見た。どこから水が来ているのか知らないが、意外と透明感があり、清潔だ。まぁ、見た目だけなので専門的なことはよく分からないが。ラプラスもこの水を好んでいるのだろうか。ラプラスの声はまだ聞こえる。なにが、そんなに気にくわないのだろうか。薄暗い洞窟を歩いていると、自然と関係のないことが頭を過ぎる。

サカキさんのことを考える。サカキさんが俺と出会ったのは、ラジオ塔を占拠する数日前のことだ。ラジオ塔を占拠した時は、すでに俺はサカキさんと出会っているのか。そう思うと、サカキさんとの初対面が懐かしくなる。そう言えば、サカキさんは、一度どこかに行ってから、俺をロケット団に誘ったな。それに、どういう意味があったんだろう。考え直してまた戻ってきたんだろうか。

まぁ、いいか

思考を打ち切り、また違うことを考える。ゴールドは今どこにいるのだろうか。確か、エンジュシティに向かったはずだが、次に向かうのは、アサギかチョウジ。どちらに向かったのかは、俺は知らない。知らないはずなのだが、頭の片隅では、アサギだと言っている。本来知らない情報を何故か知っている。そんな自分が不気味で堪らない。これも記憶喪失に関係しているのか。いや、記憶があったからと言って、未来予知ができるわけじゃない。なら、なぜ俺は。不意にラプラスの鳴き声が鼓膜を揺さぶる。はっと現実に引き戻される。腕には鳥肌が立ち、産毛が総立っているのに気づいた。ホントに不気味だ、自分が。腕をさすりながら俺は奥へ進んだ。

声を頼りに進んでいたのだが、不意に声が聞こえなくなった。何事だ、と思い俺も足を止める。耳を澄ませて、音を探る。聞こえてくるのは、ぴちょん、ぴちょん、と水滴が落ちる音だけだった。時折、岩でも動いたかのような、重量感のある音も聞こえるが、それは、イシツブテだろう。何も知らずに座り込んで、一度痛い目を見た。何が起きたのか、考える。一番ありそうなことが誰かに捕まえられたという事態だ。もし、そうだったら最悪だ。俺の目的が、完璧に潰されたことになる。それなら、どうすればいい。自分自身に問いかける。答えはすぐに返ってきた。自分でも分かっていたんだろう。ああ、そうだ。

戦って奪えばいいんだ。

ラプラスの声が、なくなった今、どこにラプラスがいたのか分からない。恐らくラプラスを捕まえたトレーナーは、捕まえた場所から、そう遠くに行っていないだろう。だから、ラプラスのいた場所に向かう途中で、そのトレーナーと遭遇することになるだろうと思っていたのだが、その場所が分からない。

今俺は、別れ道の前に立っている。片方の道がラプラスに繋がる道なのだろう。いや、もうラプラスはいないのか。もう一つ道があるが、洞窟の別の道に繋がっているのだろう。どちらにせよ、ここで待っていれば、そのトレーナーに会える。洞窟から出るにはそのトレーナーはどちらかの道を通るしかないからだ。そう考えて、俺は別れ道の前で待っていたのだが、一向に姿を現さない。足が疲れて

きたので、手頃な岩に腰を下ろす。勿論、イシツブテがどうか確認してからだ。そのまま、数十分待っていたのだが、誰も通らない。俺の考えが間違っていたのか。次第に自分の考えに自信がなくなっていく。所詮俺は馬鹿なんだ。もしかしたら、そのトレーナーは俺の浅知恵など見破っているかもしれない。

不意に、一つの可能性に思い至る。ラプラスがいた場所の近くに出口があるのかもしれない。それなら、ここを通る必要もない。やっぱり、俺は馬鹿だ。何で思いつかなかったんだ。来もしないトレーナーを、今か今かと待ちかまえていた俺が、ひどく滑稽だ。恥ずかしくさえ思える。きっと、別の出口があるに違いない。それが絶対的に正しいのだと思い、俺は別れ道を進み、洞窟のさらに奥に進んだ。

洞窟の最奥。ここが行き止まりだ。一歩先には、ラプラスが十分泳げるほどの水辺が広がっている。水も澄んでいる。ここまでの道のりから、ラプラスが今まで捕まらなかったのが、分かる。ここまでがたがたな道を奥深くまで来るトレーナーは少ないだろう。その上、不気味な声が響いているのだ。来たがる人は、いない。一目見て、ここにラプラスがいたのだと分かった。そして、ここでラプラスが捕まったのだと。戦闘の痕跡がありありと残っているからだ。確か、ラプラスは水、氷タイプ。この部分的に凍った水は、ラプラスの攻撃によるものだろう。そして、俺の足を支えている土が、不自然に濡れて、水浸しだ。抉れているところまである。ハイドロポンプでも使ったのだろう。

だが、いくら探しても出口など見あたらないのだ。もしや、水底にあるのではないか、とランターンに探させるも、見つからない。ゴルバットに空中から探させるも見つからない。じゃあ、他にどこに出口があるというのか。見過ごしているのではないかと、俺も念入りに探すも見つからない。こうなったら、とイーブイ、ストライクも捜索に加える。イーブイ、ストライクも思い思いの場所を探しに行く。

捜索から、数十分立った頃だろうか。イーブイが何かを加えて、忙しなく足を動かし、走って俺に向かってきた。俺の前で止まり、何かを期待するかのような顔で、俺をじっと見ている。取れということだろうか。手を差し出すとイーブイは加えているものを渡してきた。

「モンスターボール？」

洞窟内には、たまに落ちていることがある。誰かが落としていくのだろう。確かにありがたいのだが、今はそれどころじゃないだろう。どういう意図なのか、イーブイに視線を向ける。イーブイは、褒めてくれる？とくりっとした目で期待を込めて俺を見ている。もう一度モンスターボールに視線を戻す。すると、あることに気づいた。中にポケモンがいるのだ。普通、洞窟内に落ちているのは空のボールだ。ポケモンの入っているボールなんて、落ちているのを見たことがない。なにが入っているのか、ボールから出してみようと、ボールを投げる。ボールはカッと光を発しながら、あるポケモンを出した。

「ラ、ラプラス！？」

光が止むと、そこにいたのはラプラスだった。首長竜のような体をしていて、背中には硬そうな甲羅がある。ラプラスに間違いない。だが、ありえない。いるはずがない。ボールに入っていたということは誰か他のトレーナーが捕まえたということだ。そこは、俺が予想通りだ。

だけど、イーブイが持ってきた。すると、イーブイがそのトレーナーから奪ってきたのか。嫌、それもない。ポケモンを盗られたら、さすがに抵抗するだろう。なのに、イーブイは傷一つない。

なら、拾った？いや、それもないか。折角捕まえたポケモンを、落とすなんて、あまりにも馬鹿すぎる。

様々な考えが、頭を過ぎるが、やはり答えは分からない。ラプラスを見る。ラプラスは、人懐っこそうな目で俺を見返す。分かっていることは、ここにラプラスがいるという事実だけだ。意味不明に慣れていると思ったが、やはり慣れるものではないらしい。ラプラスをボールに戻す。

理解できないこともあるが、これで一応任務を達成したことになる。だが、このまま帰っていいのだろうか。ラッキーで済ませていいのだろうか。なんとなく後ろ髪を引かれる思いだ。しかし、ここにいてもなにも解決しない。それに、朝にはツクシさんが来てしまうのだ。できるだけ早くこの洞窟を抜けるべきだろう。腑に落ちないこともあるが、俺は渋々と帰路についた。

あれ、こんな道通ったっけ。歩き始めて、数時間たった頃だった。岩の置かれている場所など、全て覚えている訳じゃないが、どうしても違和感が拭いきれない。道の凸凹だったり、道幅の広さが、なんとなく違うような気がするのだ。もしかして、道を間違えたのだろうか。俺は一番俺を信用していない。俺なら、間違っていてもおかしくない。違和感を感じながらも、俺は進んだ。

道を間違った。そう確信を持ったのは、出口の光を見つけたからだ。こんなに早く、出口を見つけられるわけがない。本来なら、あと二、三時間は歩かなければいけないのだ。

また同時に、ここからラプラスを捕まえたトレーナーが逃げたのだと理解した。がっくりと肩を下ろす。こんな所に出口があるとは思わなかった。しかし、俺はどうやってここまで来たんだろうか。出口まで駆けていき、外に出る。

「い、遺跡？」

空には、星が瞬き、暗闇を背景に月がかかっている。その光が、俺を優しく照らし出す。まだ夜らしい。朝が来るのは、まだのようだ。だが、問題はそこじゃない。俺の目の前には、遺跡が立っていた。こじんまりとした、さほど大きくない遺跡だ。暗闇にひっそりと浮かぶその遺跡はどこか不気味だった。

二十四話

遺跡の中には、明かりというものがなく、一寸先すら見えない。完全な暗闇だ。恐る恐る、モンスターボールから、ランターンを出し、灯り代わりにする。もしかしたら、ゾンビでも出てくるかもしれない、と少し身構えたのだが、そんな必要なかったようだ。ランターンの放つ光によって、部屋の中が照らし出される。強い光によって、遺跡の全体が見えてきた。床は所々はげ、土が剥き出しになっている。整備などはされていないだろう。ごつごつとした岩も転がっていて、気づかずに躓いてしまいそうだ。そして部屋の中心には、ひっそりと一つの建造物が佇んでいた。

恐る恐るそれに近づく。この空間にぽつんと置かれているそれは、どこか不気味さを漂わせているが、それ以上に俺の好奇心を刺激した。近づいてみて、それがなにか分かった。パズルだ。あえてバラバラにしたとしか思えないほど、そこにあるパズルは乱れていた。誰にも解かせないために、そうしているのではないかと疑ってしまう。

なんでパズル？

何故遺跡にパズルがあるのか。何故あえてバラバラにしているのか。過去の先人は何を考えてこれを作ったんだろう。これは、組み立てていいのだろうか。ピースを一欠片外してみる。そして残ったピースをでたらめに並び替えるも、これが何なのか、まったくイメージできない。並び替える。並び替える。並び替える。そして気づいた。

鳥、か？

顔の部分しかできていないが、そう思った。その鋭い嘴、燃えるように立った鶏冠。勇ましさを秘めた目。これは、過去に何がしかをやった、凄まじい鳥ポケモンなのだろう、と。

組み立ててみたいと思った。組み立てて、このポケモンを見てみたい。人を魅了するだけの何かを、そのポケモンは、確かに持っていた。

目の奥がじくじくと痛み、寝不足のためか頭まで痛みを訴えてきた。それでも止まれなかった。このパズルが完成するまで、このポケモンを見るまで、止まっちゃいけない気がした。それは勘違いかもしれない。寝不足から来た精神異常だったり、この遺跡の雰囲気に呑まれているだけかもしれない。だが、このパズルしか目に入っていなかったのは、確かだった。

カチャカチャと、パズルを動かす音だけが、耳をうつ。時間を追うごとに姿が現れてくるポケモンに目が離せない。パズルは難解で複雑だ。この遺跡が見つかりにくい場所にあるのも原因だろう。今まで誰もこのパズルを組み上げていないのは。自分が初めて、これを見るのだと思うと、自然と口元がつり上がってしまった。ふと、光を発していたランターンが、いつの間にか寝てしまっているのに気づいた。なら、なんでパズルが見えるのか疑問に思ったら、遺跡の入り口から光が入り込んでいた。もう朝か。ランターンをボールにしまい、パズルの完成を急いだ。

最後の一ピース。これをはめたら終わりだ。頭を悩ませたパズルだったが、いざ終わるとなると寂しささえ感じてしまう。だが、それ以上にパズルの完成を見たいという、期待の気持ちが強かった。その気持ちに従い俺は、そのピースをはめた。

そこには、神の使いだと言われたら、信じてしまいそうになるほど、神聖な何かがいた。広げた翼からは、雄々しさを。その瞳からは、威圧感を。完成したパズルには、今にも襲いかかってきそうな、鳥ポケモンを描いた絵があった。

「すげぇ」

無意識に口から感嘆の言葉が漏れた。俺は、基本的に絵のことなんて分からない。高尚な絵ほどそうだ。ただの落書きにしか見えない。この絵は単純だ。鳥ポケモンを真ん中に描いただけだ。背景なんてまったくない。このポケモンの魅力だけで、この絵は持っていた。

「会ってみてぇ」

このポケモンが現実に存在するのなら、会ってみたい。本物はこの絵より、ずっと凄いのだろう。

俺がそう感動している時だろうか。何か大きな歯車でも回ったかのような、地響きのような音が響き出した。俺は何が起こったのか分からずに、しゃがみこみ、身を低くして、辺りを見渡す。その途端、地面が揺れた。縦横関係なく、揺れ始め、天井からは、ぱらぱらと砂が落ちてくる。

遺跡が怒っているようだった。もしかしたら、このパズルは解いてはいけないものだったのか、それでこの遺跡は怒っているのか、と不安になる。俺の不安を煽るかのように、揺れが段々と大きくなる。

そして、揺れが最高潮を記録した時だろうか。ピタリ、と揺れが止まった。不自然な止まり方だったが、やっと揺れが納まったのだ。何だったんだ、と思いその場に尻を着けて座り込む。その途端、床が抜けた。床が抜けたのは俺の真下だ。つまり俺は下に落ちていった。

俺は、はっと目を覚ました。何が起きたのかは、すぐに思い出せた。床から落ちたのだ。俺は慌ててメガネを持ち上げ辺りを見渡し、状況を確認しようとした。どうやら、俺がいるのは通路らしい。通路は中々に幅が広く、床は上と違ってボロボロだということもない。凸凹など一切なく、異様に整っている。整備でもされているのだろうか。

「ん？」

そして俺は、壁になにかが書かれているのに気づいた。なんだ？、と思い壁に近づく。壁の前で立ち止まり、それを見る。壁には、びっしりと文字のような物が書かれていた。だが、理解できない。最低限文字だと分かる程度だ。それ以上は分からない。

不自然に整った通路。理解不能な壁の文字。そこで理解した。こっちが本当の遺跡なのだ。上にあったパズルを解かなければ、下の本当の遺跡には行けない。上も不気味だったが、下はそれ以上に不気味だ。俺は完成したパズルの絵を見たかっただけで、遺跡なんか来たくもなかったのだ。あんなもの解かなければ良かった、と今更ながらに後悔した。

そう言えば、俺は落下したのだ。体に怪我はないかと見てみるも、不自然なほどまったく見あたらない。立ち上がり、体操するように体を動かしてみるも、特に痛みを感じる箇所もない。上を見上げる。床が抜けて、俺は下に落ちてきた。なら、上を見上げれば、天井に穴があると思ったのだ。予想通り、穴は確かにあった。あったのだが、恐ろしく小さい。

ということは、かなりの高さから落ちたことになる。なら何故傷がないのか。俺の体はそんなに丈夫だったか。

そう疑問に思うも、俺はすぐにそのことを思考の隅に追いやった。ポケモンを見つけたのだ。そのポケモンは奇妙な形をしていた。体は黒い棒のようなものを不規則に歪めたような形をしていて、中心には、人間のように白目と黒目のはっきりした一つの目があった。どこか壁に書かれていた文字に似ている。そのポケモンが、空を自由自在に飛んで、俺に近づいているのだ。不気味なポケモンだ。今まで様々なポケモンを見てきたが、こんなポケモン見たことがない。幸運にも俺に気づいた様子はない。俺は息を潜め、通り過ぎるのを待った。

そのポケモンは、俺の真上で一瞬止まるも、俺を気にせず飛んでいった。

「はぁ」

心臓に悪い。緊張を吐き出すように、息を吐いた。ここには、あのようなポケモンが生息しているのか。戦闘能力がありそうには見えないが、見た目と強さは、必ずしも一致しない。警戒して損はないだろう。俺は、辺りを警戒しながら出口を探し、歩き始めた。

二十五話

ポケギアを見て、今の時間を確認する。パズルを完成させた時は、まだ朝だった。だが、下に落下した後、しばらく気絶してしまった。今の時間がまったく分からない。

ポケギアが示す時刻は、九時三十分。俺が気絶していた時間は、あまり長くなかったようだ。バッグから、木の実を取り出しかじる。空腹も、これで我慢できるだろう。

かじりながらも、前に進む。ここは、まるで迷路だ。どれだけ進もうとも道の内装が変わらない。まるで進んだ気がしなく、またもや迷子になったのか、と俺を不安にさせる。

ポケモンも、文字のようなポケモンが一度出ただけだ。このようなところには、コラッタやラッタなどがいそうなものだが、まったく出てこない。ポケモンも、この遺跡の薄気味悪さを感じ取っているのだろうか。

気持ちが段々落ちていっているのに気づいた俺は、ポケギアのある機能を思い出した。ラジオだ。ラジオ塔で、わざわざクイズに答えてラジオカードを手に入れたのに、存在を忘れていた。あの苦難が思い出される。俺がどれだけ頭をしぼって答えようと、外れる答え。そんな俺に最後までつきあってくれた受付のお姉さん。最後は、ほぼ答えのようなヒントまでくれた。それでも外す俺。本当に大変だった。それだけ苦労して取ったのに、どうして忘れていたんだろう。まぁ、いいか。とポケギアのラジオ機能を着ける。

画面がラジオ用に切り替わる。これでラジオが流れるのかと思ったが、流れない。まだ電波を捉えていないのか、といじるも何も流れ

ない。遺跡の中ではもしかしたら使えないのか、と思ったら、微かに、微かにだが音が聞こえた。ラジオの音量を上げる。

それに、内容はなかった。流れているのは音だ。音楽とか、そういった類の物ではない。もっと味気なく、シンプルだ。不規則だが、どこか規則性のあるそれは、暗号のようだ。他には何かないのか、とポケギアをいじるも、これしか流れない。ラジオ塔は、こんなものを流しているのだろうか。苦情を出してもいいレベルだ。再び聞いてみるも、変わらない。暗号じみた音が流れるだけだ。そんな音を聞いて気分が上がる訳がない。俺は、ラジオの機能を止めて元の画面に戻した。

謎の遺跡。謎のポケモン。謎のラジオ。ここは、謎だらけだ。ゴールドの持っていたポケモン図鑑なら、あのポケモンが分かるのだろうか。だが、生憎と俺は持っていないので、謎は謎のままだ。

ふと背後に気配を感じた。慌てて後ろを振り向く。そこには、目があった。数十、数百の目が俺を捉えていた。前を向き直す。俺は脱兎の如く逃げ出した。

馬鹿みたいに足を動かしながら、考える。あれは多すぎるだろう。一匹や二匹なら、なんとかなるかもしれないが、あれは無理だ。後ろを向く。それを見て体に怖気が走った。あのポケモン達は、俺の後ろにぴったりとくっついて来ていた。

ひぃ！、と心中で悲鳴を上げる。なんで俺を追ってくるんだよ、あいつら！遺跡に進入した俺を排除しに来たのだろうか。それなら最初に見つけた一匹が、仲間を引き連れて戻って来たのか？　こんな

ところに来るんじゃなかった。後悔しながら、俺は逃げた。

滅茶苦茶に道を走っていたせいで、完全に道が分からなくなってしまった。まぁ、元から道は分からなかったが。だが、気づいたこともある。通路は完全に同じ内装ではないということだ。別に床や壁の変化という訳じゃない。どこまで行っても、同じ模様の床と壁だ。その変化の無さに、本当に進んでいるのか自信がなくなってしまうほどだ。だが、俺は途中で石像を見つけた。なんのポケモンの石像かは、分からないが、逃げてる途中度々目撃した。この迷路のような遺跡では、重要な目印だ。これ以外に道に変化がないのだから。今俺は、その石像の後ろに隠れていた。

どかっと勢いよく床に座り、荒い息を必死に整える。あのポケモンに見つかる前に、少しでも疲れを取りたかった。今後どうするか考える。一番理想的なのが、今後ポケモンに見つかることなく、出口までたどり着くことだ。だが、あれだけの数のポケモンだ。見つからずに、というのは困難だろう。第一出口すら分からないのだ。空を飛べるポケモンがいたら、落ちた穴から脱出できるが、生憎とそんなポケモン持っていない。だから、あくまで理想だ。そんなに上手くいくわけがない。最終手段は、アテナさんに助けを求めることだが、情けなさすぎる。それに役立たずと思われたくない。

どうしよう

行き当たりばったりで、上手くいく自信がない。でも、このまま何も案が出なければ、そうするしかない。取りあえず状況を確認しようと、こっそり石像の影から顔を出す。

「ひいっ！」
そこには、あのポケモンがいた。いるだろうとは思っていた。問題は数だ。宙を埋め尽くさんばかりに増えていた。その不気味さに、声が漏れる。しまった、と口を塞ぐも遅かった。俺の声に反応してか、そのポケモン達はぎょろっとした目で、俺を見ていた。

「なんでだよーー！！」
俺は脇目も振らず走り出した。

「そこのお姉さん、危ないですよ！」
またもや、鬼ごっこが始まったわけだが、問題が起きた。人に会ったのだ。本来なら喜ばしいことだが、今は違う。ポケモン達に追われたままでは、前方に見えるお姉さんにまで被害が及んでしまう。だが、俺も後ろに戻るなんてことは、できない。だから、せめて注意だけでも、と思ったのだ。

「え？」お姉さんはそう言って、振り向く。そして俺を見る。さらに俺の後ろにいるものを見て、ぎょっとしている。俺の後ろにいるとんでもない数のポケモンを見たのだろう。

「逃げてくださーい！」
そう言ったのだが、お姉さんは、その場から動かない。足がすくんでしまったのか、と思ったが違うようだ。お姉さんはボールを取り出し構える。もしかして、戦う気なのだろうか。無謀すぎる。俺の後ろにどれだけいると思っているんだ。違っていてくれという俺の

願いとは逆にお姉さんはボールからポケモンを出した。

ボールからは眩い光と共に一体のポケモンが現れる。恐竜と鮫を合わせたような姿だった。腕と背には、鮫の鰭ような翼があり、太腿と二の腕には牙のような突起がある。

そのポケモンが吠えた。

何かが爆発したのかと思った。空間を割らんばかりの声が俺の鼓膜を震わせた。反射で耳を塞ぐ。これは、技ではないのだろう。ただ吠えただけ。それなのに、その声は、俺の体の奥底まで震わせた。恐怖を超え、畏怖すら覚える。ここまで、怖い、強い、と思ったのは初めてだ。急にバランスを崩し、床に膝をつく。疑問に思い、足を見る。足が震えていた。まったく気づかなかった。俺はそのまま座り込んだ。

二十六話

サカキさんと鍛えた俺は、この世でサカキさんの次に強いのだと思っていた。アカネに負けた俺は、自分が井の中の蛙だと思い知った。でも次は負けない。そう思えた。ゴールドと出会って、劣等感を知った。それでも負けたくない。そう思えた。このお姉さんを見て、世の中には絶対的なものがあることを知った。絶対に勝てない。ただそう思った。

「大丈夫？」
お姉さんは、ポケモンをボールにしまい、そう言って手を差し伸べてくる。後ろにいたポケモンは、すでに逃げ出していた。「はい」と返事をし、手をかりて立ち上がる。改めて、お姉さんを見る。長い金色の髪に、黒い髪飾り。そして、黒を基調としたコート。そんな女性だった。付け加えるならば、圧倒的に強かった。あまりの強さに漠然としか、強さが分からなかったが、俺のものさしでは、計りきれない程強いというのは分かった。その強さには、嫉妬より清々しささえ感じてしまう。

「あの、助けていただき、どうもありがとうございました」
あのポケモンの群を追い払ってもらい、助かった。もしお姉さんがいなかったら、体力尽きるまで鬼ごっこが続いていたことだろう。

「ああ、別にいいわよ。それよりミズキ君は、こんなところで何してたの？」
「はい？」

今俺のことをミズキと呼ばなかったか。俺は、そんな名前になったことないのだが。確認のため、訊いてみた。

「えと、ミズキって誰ですか？」

「あなたのことでしょう？」

どうやら俺は人違いされているらしい。俺はこのお姉さんに会った記憶なんてない。それにもし一度でも会っていたなら、こんなに強い人を忘れないだろう。でも記憶喪失前の知り合いならありえるかもしれない。

「その人に最後に会ったのっていつですか？ 」

「一ヶ月前くらいだけど…」

一ヶ月前と言えば、俺がサカキさんと洞窟にいた以前の話だ。つい最近の話なら、俺じゃないと言えるのだが、一ヶ月前は記憶がない。これで人違いか記憶喪失以前の知り合いか、余計に分からなくなってしまった。

「その人はミズキと名乗ったんですか？」

「ええ、そう名乗って私に勝負を挑んできたわ」

「あ、あなたに！？」

「そうよ。まぁ、私が勝ったけどね」

俺じゃないな。まず間違いなく。記憶喪失前の俺がどんな人間か知らないが、そんな馬鹿ではないだろう。きっと、もっと臆病な人間だ。だから、こんな強い人に挑むのが、俺なわけがない。

「それ俺じゃないですよ。たぶん、人違いです」

「あら、そうなの。あぁ、でも確かにちょっと違う気がするわ。」俺をじろじろ見て、納得するように頷いた。

「そのミズキって人は、強かったですか？」深い理由なんてない。興味本位で言ってみた。俺と似たその人が、どういう人か知りたかったのかもしれない。俺がそう言うと、お姉さんは考え込む素振りも見せずに、即答した。

「ええ、強かったわよ。ジムバッジもいくつか持っていたしね。まぁ、私ほど強くはないけどね」鼻にかけて言うのではなく、それが当然のように言う。この人の強さから来る自信なのだろう。

そもそもこの人は、一体何者なんだろう。ジムバッジを数個でも集めた人は、当然強い。そんな人を軽く退けるなんて、ただ者じゃないだろう。それに、あんなに強いポケモン初めて見た。ジムリーダーだと言われても疑わない。

「あなた、何者なんですか？」俺がそう言うと、お姉さんはミステリアスに笑い、返答をした。その言葉は俺の度肝を抜いた。

「チャンピオンよ。シンオウ地方のチャンピオン、シロナ」

何言ってるんだ？その実力を見て分かっているはずだが、頭がそれを受け入れない。必死にその言葉をかみ砕き、なんとか理解した。

「はあ！？なんでこんな所にいるんですか！？」ポケモンリーグのチャンピオンが、こんなとこにいていいのか。そんなに暇なのか。

「遺跡の探索よ。中々チャンピオンまでたどり着くトレーナーは少

ないの。四天王がほとんど追い返しちゃうから。だからいつも暇で、よく遺跡に行くのよ」
「だ、だから、この遺跡に？」
「ええ、ここにはアンノーンが出るのよ」
「アンノーン？」
「ああ、文字のようなポケモンよ。でも、ほとんど謎のポケモン。何故かこういう遺跡に出没するの。シンオウでも、ズイの遺跡にだけ生息してるのよ」
やはり、あのポケモンは謎なのか。まさにアンノウンだ。でも、俺にとっては、どうでもいい。あまり興味もない。興味があるのは、研究者くらいだろう。それが顔に出ていたんだろうか。シロナさんは、そんな俺の顔を見て言った。

「あなたは興味がなさそうだけど、なんでアルフの遺跡に？」
「アルフの遺跡？」
「ええ、この遺跡の名前だけど、そんなことも知らないの？」
まったく知らなかった。そう言えば、アルフの遺跡と言う名前はどこかで聞いたことがある気がするな。知ってるけども、思い出せない。そんなもどかしい感じだ。思い出せないなら訊けばいいか。少しでも情報が欲しい俺は、事情を話し始めた。

「実は…」

「そんなところにもう一つ遺跡があったの！？」
「ええ、俺も偶然行き着いたんです」
ラプラス関連のことを除いて話した。つまり、俺はつながりのどう

くつで迷ってしまい、偶然遺跡に出てしまった、ということになっている。ラプラスは恐らく法外な値段で売ることになるんだろう。もしそれがばれたら、どうなるか分からない。だから、少しでもそれに繋がる情報を与えたくない。ラプラスのことを話して、こんなに強い人に怪しまれるのは、得策ではない。愚策だ。愚策中の愚策。

「で、パズルを解いたら落っこちた、と」

「ええ、そうなんです」

「出口探してるんなら、一緒に行こうか？私も一度その遺跡に行きたいし 」

「え、いいんですか？」正直ありがたい。出口まで案内してくれるのは勿論ありがたいが、シロナさんが一緒ならアンノーンの群に襲われても、平気だろう。

「ええ、いいわよ。行くならさっさと行きましょ 」そう言ってシロナさんは、歩き出す。慌てて俺もその後を着いていった。

「あの、シロナさん」

歩いている途中で、シロナさんに声をかけた。

「ん？」

「シロナさんって自分より強いトレーナーに会ったことありますか？」

純粋に興味から言ってみた。シロナさんは、今まで見たトレーナーの中で最も強い。最強だ。そんなシロナさんより強いトレーナーが存在するのか、訊いてみた。シロナさんは、少し考えてから口を開

く。

「そうねぇ、昔は数え切れないほどいたけど、今は数人程度かしらね」

それでもいるのか。シロナさん以上に強い人が。

「それなら、その中で絶対に勝てないと思った人はいませんか？」

俺は、ゴールドに対してそう思った。ゴールドには、何をしようが勝てないと。今度はシロナさんは即答した。

「ないわ。どれほど強いトレーナーが相手だろうと、絶対に勝てないなんて思ったこと一度もないわ。もし圧倒的実力差で負けたとしても、もっと強くなって相手を見返すだけ。私はそうやって強くなったのよ」

まぶしい。まぶしい程真っ直ぐな強者の理論だ。俺もそう思いたい。俺がもっと強くなってゴールドを見返す。いつかゴールドに勝つ。そう思いたいのだが、心の奥底には、絶対倒せない。そう思ってしまう自分がいる。

「もし、もしですよ。もし自分以上の才能を持った人が身近にいて、自分を追い抜いてぐんぐん前に進んだらどうしますか？」

「死ぬ気でくらいつくわ」

「え？」

「死ぬ気でくらいつくしかないんじゃない。案外死ぬ気でいけば何でもできるものよ」

すっとその言葉は心に入り込んだ。心に風が吹き込んだかのようにすっきりとした気分だ。長老様の言葉より、ずっと簡単で分かりやすい。確かに、異常な速度で前に進み続けるゴールドを追うならそれしかない。才能が違うのだ。俺が三日で進む距離を一日で進む男なんだ。うじうじと悩み、足を止めたら、その背中さえ見えなくなってしまう。

「ははっ」思わずに笑みがこぼれた。今まで小難しく考えすぎた。長老様の言葉に惑わされすぎた。長老様は、俺とゴールドの差なんてない、と言っていた。何故長老様は、そう考えたのか。本当に俺とゴールドの差はないのか。馬鹿な頭を使い、その答えを探していた。だが、今分かった。あれは長老様の優しさなのだろう。ゴールドは俺より圧倒的に強いのだから。なら、どうするか。決まってる。それに追いつくためには俺が死にものぐるいで強くならないと駄目なんだ。

劣等感もある。嫉妬もある。ゴールドは強く、俺は弱いのだから。だが、そこで腐ったら終わりだ。劣等感があるなら、嫉妬があるなら、それを感じなくなるまで、強くなるしかないのだ。

「死にものぐるいでくらいつく、ですか。いいですね」
「でしょう？で、それってあなたの実体験なの？」

やはり俺の話だと気づいていたのか。なんと答えるべきだろう。誤魔化したほうがいいのだろうか。まぁ、いいか。

「ええ、そうです。俺の話なんですよ」
誤魔化すこともないだろう。シロナさんなら、馬鹿にしたりしないような気がした。

「へぇー。そんな子が近くにいるんだ。あなたも大変ね。でもなんでそこまでして追いかけるの？」
「え？」
「私なら負けず嫌いだからそうするけど、あなたが追いかける理由が分からないわ」そう言われて、考えてみる。何故俺は勝てないと思いつつもゴールドの強さを追いかけるのか。俺は元々サカキさんを探すために旅をしていた。そのためにジョウトを旅する気だった。しかし途中でゴールドの強さに追いつく、という目的もいつの間にか加わっていた。なんでだろう。

ああ、そうか。

俺はゴールドと出会って、自分の弱さを知り、自信をなくした。その自信を取り戻したいんだ。サカキさんの最高の部下になりたいから。ゴールドなんかに負けたままじゃ、俺はサカキさんの部下を名乗れないから。

「自信を取り戻したいんです」
サカキさんの最高の部下になりたいとは、さすがに言えない。

二十七話

「さぁ、ここが出口よ」
目の前には、梯子があった。長い長い梯子だ。それは、木で作られているようで、腐っていないか心配だ。上を見る。遙か上にある天井の穴まで梯子は伸びている。恐らく俺が上の遺跡から落ちた時のような穴なのだろう。つまりこの梯子は上の遺跡に繋がっているのだろう。

「大丈夫？顔、青いわよ　」シロナさんが心配そうに言ってくる。
即答したいが、無理だ。

長すぎるだろ、この梯子

天井までの距離が長すぎるのだ。しかも、それなのに、梯子は木製だ。途中で梯子が折れ、落ちた時のことを想像して、鳥肌が立つ。それに、上っている最中にアンノーンに襲われた時のことなんて、考えたくもない。

まぁ、つまり、俺はびびっているのだ。

「だ、大丈夫です」
震える声でなんとか返事をする。怖くて上れませんとは、さすがに言えない。梯子が丈夫か確認するために、ぺたぺたと梯子を触る。人一人が上がる分には大丈夫だとは思うが、やはり一抹の不安は隠せない。

「これって、誰かが落ちて、大怪我したこととかないんですか？」
心配なので、一応訊いてみた。いつからこの梯子が設置されたか分

からないが、誰か一人くらいは落ちていそうだ。勿論、否定してくれと言う思いで言ったのだが。

「ないんじゃない？もしあったら、注意を呼びかける看板とかありそうだし」確かに、そうかもしれない。普通はそんなことがあったら梯子を止めるか、看板位立っていそうなものだ。それがないのなら、大丈夫なのだろう。

「ねぇ」シロナさんが俺を不思議そうに見ながら声をかけてきた。
「はい」なんだと思いながら返事をする。

「もしかしてあなた怖いの？」
びくっと体が震えた。核心を突かれた。まさにその通りだ。だが、それを表に出すのは、格好悪い。

「い、いえ、そんなことないですよ。じゃあ先に上りますよ」やけくそになりながら、俺は梯子に手をかけた。

俺が、一段上る毎に、木の軋むような音が響いた。慎重に一段一段梯子を上る。下は見れない。この高さを実感したら、もう動けない。それが分かっているから、上を見ながら上っていた。アンノーンは出てこない。シロナさんが一度追い払ったおかげだろうか。

シロナさんは強い。圧倒的だ。底が見えない。最強だ。サカキさんが以前数は力だと言っていたのを思い出す。サカキさんが何故そう考えたのか、シロナさんのような人を見ると思うのだ。一対一では絶対勝てない。ならどうすればいい。一対二なら、一対三なら、勝

てるかもしれない。一対十、一対二十なら確率はもっと上がる。どうしようもないほど強大な力を見て、自分がいくら鍛えようと追いつけないことを知ってしまったのではないのだろうか。だから、数に頼った。

サカキさんが本当にそう考えたかは、分からない。でも俺はそう考えた。シロナさんを見て、俺一人の力じゃ対抗しようがないと。なら、数に頼ろうと。　ゴールドなら違うだろう。その力の差に逆に燃え上がるだろう。

俺は、違う

俺はあきらめてしまう。その力の差に絶望し、自分の力以外で何とかしようとしてしまう。これは俺の弱さなのだろうか。ゴールドに勝つほどの強さを手に入れたら、この弱さはなくなるのだろうか。なら、強くなりたい。揺るがないほどの強さを手に入れたい。

そんなことを考えながら、上っていたら、いつの間にか天井が大分近くなった。考えるのに集中しすぎて、まったく周りが目に入ってなかった。恐怖を感じなかったのは良かったが、その反面危険だ。今後気をつけようと心に決めて、さぁ、もうひとふんばりだ、と梯子を掴む手に力を込めた。

梯子を上り終え、着いたのは、俺が以前パズルを解いた遺跡に似た内装の場所だった。違いと言えば、パズルがないこと位だろうか。パズルがなく、その場所にはぽっかりと穴が開き、梯子の上部が顔を出している。

こっちが正式な入り口なのだろう。わざわざ梯子がかかっているのが、いい証拠だ。

「痛っ」

不意に頭痛に襲われる。頭をきりきりと締め付ける痛みと共に、おかしな映像が頭に浮かぶ。それは、ゲーム機を通した映像だ。押しつぶしたような姿の少年を俺が操作している。映像はあまり綺麗ではない。旧式のゲーム機だからだろう。ゲーム機からは怪しげなBGMが流れていた。恐怖心を感じさせる、その音楽が、何故か懐かしい。そして、その映像はどこか見覚えがあった。改めて、その映像を見る。そして分かった。分かってしまったから怖気が走った。そこは確かにアルフの遺跡だった。ゲーム機の映像は多少簡略化されているが、

今俺がいる場所に間違いなかった。

気持ち悪い。気味が悪い。なんだこれは。俺は何を見ているんだ。俺は知らない。こんなもの知らない。頭痛と共に浮かんできた映像は、俺の理解の範疇を超えていた。

「大丈夫？上る前より顔が青くなってない？」

シロナさんが梯子を上り終え、開口一番に言った言葉がそれだ。自分でも分かっている。あんな薄気味悪いものを見せられて、動揺しないほうがおかしい。

「はは、色々ありまして　」

俺は誤魔化した。真実を語ったところで、それを信じてくれるとは思わない。俺でさえ、あれが何か良く分かっていないのだ。他の人

なら尚更だ。俺がそう言うと、シロナさんはじっと俺を見てきた。俺が何か隠していると思ったのだろう。正解だ。でも言わない。俺は頑として口を開かなかった。何も言わない俺を見て、シロナさんは、「はぁ」と呆れた様にため息を吐いた。

「あなたが言いたくないなら、いいわ。じゃあ、外に出ましょうか」そう言って、シロナさんは遺跡の出口に歩いていった。俺も遅れて歩き始めた。

遺跡から出た俺を襲ったのは、太陽の光だ。今日もからっと晴れており、空には青が広がっている。目を刺す日差しに耐えながら、なんとか目を開く。すると、遠くには小さな建物があった。こんなところに立てるなんて物好きもいるものだ、と思っていたら、前にいたシロナさんがくるりと振り返った。

「私はこのまま、つながりのどうくつに行くけど、あなたはどうする？」
どうやらシロナさんは、つながりのどうくつから、俺がたどり着いた遺跡に行くようだ。

「一度、キキョウシティに戻ります。もう、今日は疲れました」
本音だった。今思えば、俺は寝ていないのだ。その状態でどれだけ体を酷使したことか。それに今までは、ずっと緊張感のためか眠気が飛んでいたが、　遺跡から出て安心からか緊張の糸が切れてしまった。今になって、睡魔が襲ってきた。

「そう。それならいいわ。あなた、具合悪そうだし、今日はもう何もしないほうがいいわ」
シロナさんの言うとおり、俺は具合が悪い。妙なものを見てしまっ

たからだろう。それを見てから、どうにも気持ち悪さが抜けない。シロナさんに隠していたのだが、ばれていたのか。

「ええ、そうします。色々ありがとうございました」

「ふふっ、どういたしまして。次会ったら、今度は勝負しましょうね。」そう言って、シロナさんは、にっこりと笑い、一度手を振って、歩き出した。

二十八話

ふらり、ふらりと眠気と疲労にふらつく足で、俺はキキョウシティに向かった。足は鉛でも付いているかのように重く、頭は脳をどこかに置いてきたのでは、と思えるほど思考能力が低下していた。端から見たら、ゾンビにでも見えたのではないのだろうか。目があったら即勝負を信条とするトレーナーだって、そんな人には声を掛けたくないだろう。もし声を掛ける勇者がいたとしても、その時の俺は気づかなかっただろうが。

意識を取り戻した時には視界に映る景色は、いつの間にか変わっていた。空を仰ぐと、さっきまで空で輝いていた太陽はすでになく、月が昇りだしていた。そう言えば、肌を撫でる風も幾分か優しくなった気がした。一体、いつの間に夜が来たんだろう。夜が来たことすら気づかなかった。

そう言えば、とふと思い出す。アテナさんは、ラプラスを捕まえた場合電話をしろ、　と言っていたな。そしたら、ラプラスを回収させる人を行かせる、と。今すぐ電話をしようか、と思ったけれどやめた。今日は疲れているし、すぐに眠りたい。電話一つするだけだが、今の俺にはそれさえ億劫だった。

それからしばらくして、暗闇の中に輝く灯籠を見つけた。キキョウシティの街灯は古風で凝った、特徴的な形をしている。あれがあると言うことは、もうキキョウシティの近くにまで来ていると言うことだ。希望が見え始めた俺は、残った力を込め、力強く歩き始めた。

やはり、歴史の町だな。

夜のキキョウシティを見ると、一層そう思う。町中にある灯籠や、それに照らし出される古風な建物の一つ一つがそう思わせるのだろう。俺に歴史を愛する心はないが、それでも心を揺さぶるものがある。などと、町並みを観察しながらポケモンセンターに向かう。疲労が一周回って、感覚が麻痺してしまったのか、そんな余裕さえ出てしまった。尤も足は軽い、と言うよりは重さすら感じなくなるほど酷使しただけなので、自分の足であって、自分の足じゃない。そんな感覚が抜けないが。辺りを見回しながら歩いていると、マダツボミの塔が目に入った。マダツボミの塔を見ると、先日の塔での戦いが思い出される。お坊さんとの戦い。長老様との戦い。

俺は、あの時の俺から一歩でも前に進んでいるのだろうか。

もう一度塔を登り、長老様と戦えば、それが分かるかもしれない。だが、やめた。また小難しい話をされて、惑わされたくない。俺は馬鹿だ。考えて、考えて、考え抜いても、答えは出ず、迷うだけだ。強くなれば、全てが変わる。それだけ分かればいいんだ。寧ろ、それ以外を知りたくない。強くなればいいと言う単純な答えが俺には調度いい。

塔から視線を戻し、灯籠が照らす薄ぼんやりとした暗闇の中を歩き出した。

無事何事もなくポケモンセンターに着き、俺は一泊することができた。朝が来て目を覚ました俺は、なごり惜しげにベッドから離れ、身支度を整える。そして、ポケモンセンターを出た。

太陽はまだ昇ったばかりのため、日射しは弱く、ひんやりとした空気が流れている。その空気を一度深く吸い込み、吐き出す。清々しい空気が体に満ち、心が引き締まる気がした。そしてポケギアの画面に視線をやり、アテナさんに電話を掛ける。早朝のために迷惑かと思ったが、できるだけ早く伝えておきたい、という気持ちを抑えられなかった。電子音がしばらく鳴り響く。

「もしもし、何かあったのかしら？」アテナさんの気怠げな声がポケギアから響く。

「あの、今迷惑でしたか？」「ああ、大丈夫よ。ちょっと徹夜明けでね。で、用件は？」

「ラプラスを捕まえたんですけど…」

俺がそう言うと、しばらくの沈黙があり、「ああ！」と言うアテナさんの声がした。忘れていたのだろうか。

「ラプラスの件ね。早いじゃない、よくやったわ」

「あ、ありがとうございます！で、誰か団員を来させて欲しいんですけど…」

「ああ、確かそうなってたわね。分かったわ。一人団員を行かせるから待ってなさい。あなた今どこにいるの？」

「キキョウシティのポケモンセンター前にいます」

「分かったわ。じゃあ一、二時間位で行くと思うからポケモンセンターで待ってなさい」

「あ、はい。分かりました」

俺がそう言うと、じゃあよろしくね、と言って電話は切れた。声だけだが、アテナさんが大分疲弊していることが伝わってきた。ラジオ塔占拠はもうすぐだ。そのため昼夜を問わずに働いているのだろう。俺にとってもラジオ塔占拠は重要だ。サカキさんは、ラジオから流れるロケット団復活宣言を聞き、コガネシティを目指したのだ。もし俺がラジオ塔占拠までに、サカキさんを見つけられなければ、それを頼りにしなければならない。だから、頑張ってくださいアテ

ナさん。そう祈らずにはいられない。届くかどうかも分からないが。

一、二時間待てと言われても、何をすればいいのだろうか。近くにあるくらやみのほらあなに行くにしては短い時間で、何もせずうろうろするにしては、長い時間だ。こんな微妙な時間で何ができるだろう。道ばたで立っているのも何だろうとポケモンセンターに戻り、置かれたソファに座る。ソファは、多人数が座れるように、大型でL字になっていて、俺の他にのおじいさんが一人座っていたので、あまり社交的ではない俺は距離を取って座った。

おじいさんは、清々しいほどに頭に髪がなく、顔には年相応に刻まれた皺がいる。それでも、痴呆はまだ来ていないらしく、細い目をさらに細めて新聞を読んでいた。俺がソファに座ると、ちらりと俺に視線を向けるもすぐに手元にある新聞に視線を戻した。俺も自分から話し掛けるほど、社交的ではないので、何をするでもなく、ぼうっとしていた。一、二時間位なら、これで時間を潰せると考えたからだ。俺もおじいさんも喋らないので、おじいさんのめくる新聞の音だけが、嫌に響く。そんな居心地の悪い空間にしばらくいた時だ。ポケモンセンターのドアが開き、人が入ってきた。まさかもう来たのか、とその人物に注目するも、それは杖を持った腰の曲がったおじいさんだった。そのおじいさんは近づいてきて、ソファに座っていたおじいさんに「よぉ」と親しく声を掛けて、そのおじいさんの隣に座る。

今来たばかりの、杖を持ったおじいさんは、俺の方をちらりと見て、「おはよう」と優しく声を掛けてきた。俺も「おはようございます」と一応挨拶を返す。その反応に満足したのか、おじいさんは、別のおじいさんと話し出した。どうやら、アテナさんが来させたロケッ

ト団員ではないようだ。まぁ、なんとなく分かっていたが。

おじいさんは二人で話込んでいたが、その話が自然と耳に入る。盗み聞きみたいで気分が悪いが、やることもない俺は、それに耳を傾けてしまった。

だが、おじいさん達が話しているのは、孫自慢やポケモンの自慢、はたまた婆さんが最近ボケかかってる。などで俺の興味を引く話は、まったくない。どのくらい時間は進んだろうか、とポケギアを見るも、時間は思ったほど進んではいない。えてして、時間は退屈な時ほど長く感じてしまうものだ。それは、分かっているのだが、何度も時間を確認してしまう。俺が時間を確認している内におじいさん達の話題は、最近の若者への嘆きから変わったらしい。

「のぉ、三年前のあれ、覚えてるか？」

「あれって、あれかい。トメさんが逝っちゃったことかい？」

「違う、違う。あれじゃよ、あれ」

「何じゃ？」

「レッド君がロケット団を壊滅させた話じゃよ」

二十九話

ロケット団を壊滅させた、たった一人の少年。一人の少年が悪の組織を壊滅させる、そんな漫画のような現実味のない話をされて、誰がその話を信じようか。現実にそんなことは起こらない。大人は子供より上で、多数は一人より強い。現実は残酷だ。そしてそんな変えようもない現実が確かにそこにあるのだ。

だが、少年はそんな現実をねじ伏せた。少年は大人を倒し、一人ですべてを乗り越えた。残酷な現実を塗り替えた。正義の味方とかヒーローとか、そう言ったのは空想だと思っていた。だが、その少年は確かな現実にいるヒーローだ。皆の話題にならないほうがおかしいのだろう。だから、このおじいさん達の話題になるのも当然なのかもしれない。

「おお、そんなこともあったのお。そうかもう三年になるのか」その反応に呆れたように口を開いた。

「忘れとったんかい。わしが何度レッド君の凄さを説明したことか」

「すまん、すまん。確かあんたはレッド君の知り合いじゃったんじゃよな」

「おう。子供の時から見てきたわい。孫みたいなもんじゃ」

「あの、俺にもその話を訊かせてくれません？」

訊いてみたいと思った。ロケット団をたった一人で滅ぼした少年の、レッドの話を。俺からすれば、憎い敵だ。サカキさんの野望を打ち砕いた、何があろうと許せない敵だ。頭を地に擦り付け、許しを請うてきても、許す気はない。尤も、レッドも謝る気はないだろうが。だが、レッドが強いという事実は揺るぎない。それなら、レッドの話を聞いてみたかった。ゴールドに追いつくためなら、強くなるた

めなら、相手が憎き敵だろうが、学べるところは学びたかった。

俺がそう言うと、おじいさん達は、顔を見合わせた。そして俺に向き直り、笑顔で、「いいぞ、何でも話してやろう」と言った。

「わしはの、昔マサラタウンに住んでいたんじゃよ。マサラタウンは、何もない町での。毎日穏やかな空気が流れておった」おじいさんの昔話が始まった。どうやら、おじいさん目線の話らしい。しみじみと懐かしそうに語るおじいさんを見ると、本当にいいところなのだと分かる。

「マサラタウンで唯一、その空気と違う物がある。それがオーキドの研究所じゃ」わしもそこで働いておったんじゃが、あの頑固ジジイとは、よく喧嘩しとった」頑固ジジイとは言うが、仲がいいからこそ言える悪口なのだろう。このおじいさんとオーキドさんの仲の良さが窺える。

「じゃが、やつの孫のグリーン君は可愛くてのお。子供ながらに研究の手伝いをしようと、背伸びをして頑張る姿には、皆癒されたわい」ホントにオーキドの孫とは思えんわい、と付け加える。確かに幼い子供が背伸びして頑張る姿は可愛いかもしれない。

「そしてある日、友達だと言って、グリーン君が連れてきたのがレッド君じゃ」ついにレッドが出てきた。一体どういう子供だったのだろうか。

「引きずられるようにしてやってきたレッド君は、最初は興味深げ

に研究所を観察していたが、すぐに興味を失って、つまらなそうにしておった。」
普通の子供なら、そうだろう。研究所が楽しい子供の方が、少ないと思う。

「それに機嫌を損ねたのが、グリーンじゃ。」
だろうな、と思う。

「自分の大好きなおじいちゃんの研究所に、特別に連れてきたのに、レッドは退屈そうな顔をしてるんじゃ、まあグリーンが期待していた顔じゃ、なかったんじゃろうな」グリーンは、自分と同じようにレッドが喜ぶと思っていたんだろう。気持ちは分からないでもない。

「そこからは、取っ組み合いの喧嘩じゃな。研究員総出で止めに入ったのは、懐かしいのお」このあたりで俺は、もしかしたら強さの秘密なんて聞けないのではないか、と思い始めた。
「それからは、グリーン君とレッド君は合う度に喧嘩しとった。」

「あ、あの！」
「何じゃ？」
「レッドさんの凄いエピソードとかないんですか？」
その後もつらつらとグリーンとレッドの話は続き、しびれを切らした俺がそう言うと、おじいさんは、う～むと頭を捻らせ考え出した。
そして、「ああ、そうじゃ」と声を出した。
「ある日研究のために一匹のポッポを研究所に持って行ったんじゃ」

「ポッポですか？」ポッポとは、さほど珍しくなく、捕まえやすい鳥ポケモンだ。そんなポッポの何を研究しているのだろうか。
「ポッポの研究というよりは、色違いのポケモンの研究じゃ」「色違い？」
「たまにいるんじゃよ。普通の個体と色の違ったポケモンが。だが、原因はまったく分かっとらん。じゃから、わしが運良く捕まえたそれを調べようと思って持って行ったんじゃ」色違いのポケモンがいるなんて初めて聞いた。しかも原因不明と来た。それなら調べる価値があるのかもしれない。

「じゃが、わしの言うことをまったく聞かなくての。挙げ句の果てにはちょいと目を離した隙に逃げ出してのお。貴重な色違いのポケモンじゃったから、オーキドと一緒にマサラ中を探したわい」
「見つかったんですか？」
「おお、見つかったわい。だが、見つかった場所がわしもオーキドも予想外の場所での」
予想外とは、一体どこで見つかったんだろう。俺は続きを促した。
「どこなんですか？」

「なんとレッド君の家にいたんじゃよ。レッド君にも協力を頼もうと、家を訪ねたんじゃが、ドアを開けたら、ポッポの羽を丁寧に撫でているレッド君がいたんじゃ」
「それ…大丈夫なんですか？」
ポッポは、あくまでおじいさんのポケモンであって、レッドのポケモンではない。レッドを攻撃しない保証なんてない。

「普通は危険じゃろうな。じゃが、レッド君は驚くことに、完全に手懐けておった。わしは我が目を疑ったよ。わしの言うことも聞かないポッポが、初めて会うレッド君には懐いているんじゃ。ポッポのトレーナーでもないのにじゃぞ。」

「それは、また、凄いですね」そんな返事しかできない。
「わしが思うに、レッド君はポケモンとの接し方が異様に上手いんじゃ。」
「接し方、ですか」
「そうじゃ。ポケモンが警戒していたら引き、心を許していたら近づく。レッド君は、ポケモンの考えていることが分かっているのではないかと思うほど、それが上手かったんじゃ」
ポケモントレーナーにとって、ポケモンとの信頼関係は重要だ。ポケモンがトレーナーを信じていない場合、トレーナーの指示に一瞬迷う。俺はそんなトレーナーを旅の途中何人か見てきた。そういうトレーナーは総じて弱い。逆に、信頼関係のできたトレーナーは強い。何の疑いもなく、指示に従うから、タイムラグがない。レッドは、その信頼関係を一瞬で構築できるのだろう。

「わしはそれを見て思ったよ。レッド君ならトレーナーとして大成するんじゃないかと」
それにポケモンの考えていることが分かる、というのは、ちょっとした仕草から、考えていることが分かるほど洞察力が高いということなのだろう。幼いながらにずば抜けた洞察力を持つレッドを見たら、俺もそう思うかもしれない。

「と、まあ、こんなところじゃな。どうじゃ、凄かろう」
「…はい」
認めたくはないが、凄い。俺では、真似できない。才能というやつなのだろう。

「あの、今、レッドさんはどこにいるんですか?」
再びロケット団の邪魔をされては、たまらない。俺がそう言うと、おじいさんは、口ごもった。

「どうしたんですか？」
「分からん」
「え？」
「分からんのじゃよ。恐らく今も旅を続けているんじゃと思うが、詳しいことは何も分かっとらん」

三十話

おじいさんの話は終わった。「ありがとうございます」と言い、軽く頭を下げる。そして頭を上げる。おや、と思った。ソファの後ろでは、茶色の短い髪に赤いピンで前髪を留めた少女が立っていた。苛立たしげに右足をパタパタとさせて、眉間には皺を寄せている。その少女は、俺と目が合うと、一度手招きしてから、ポケモンセンターの外に出た。「それじゃあ、失礼します」とおじいさん達に言い、俺もソファから立ち上がり、ポケモンセンターの外に出た。

ポケモンセンターから出て、先程の少女はどこかと視線を巡らす。日も昇り、人通りが多くなって来た。その中に、少女は見つけられなった。見失ってしまったのだろうか、と思ったが見つけた。その少女は、何の違和感もなく雑踏に紛れ込んでいた。だが、その少女に間違いなかった。その少女の後ろを追う。

その少女の歩きは淀みない。恐らくアテナさんの送ってくれた団員で、このまま人気がない場所まで行き、ラプラスを渡すのだろう。近すぎず、遠すぎずの距離を保ち、少女の後を歩く。俺が後を着けやすいように歩いてくれているのだろうが、その歩みは違和感がない。普通何かを意識したら、視線であったり、足の速さであったり不自然さが出てしまいそうなものだ。それがないということは優秀なのだろう。

そして、少女はある民家に入った。俺も遅れて民家にたどり着いた。民家の前に立つ。何の変哲もない家だった。周囲にある民家と何が違うというわけでもなく。キキョウシティに溶け込んでいた。本当に彼女はロケット団員なのだろうか、と家の前で悩んでいたところ、ドアが開いた。

「早く入りなさい」ドアから顔だけ覗かせて、先程の少女が言った。ロケット団員で合ってるらしい。「あ、はい」と気の抜けた返事をして、俺はその家に入った。

「あの時はよくもやってくれたわね！」テーブルを挟んで、俺と少女は向かい合って座っていた。そして、少女は、勢い良くテーブルを叩きそう言い放った。少女の突然の怒りに「はい？」としか返事を出来なかった。俺は目の前にいる少女に何かしただろうか。

「忘れたとは言わせないわよ！コガネでのことよ！」そう言われコガネというキーワードを頼りに、少女を思いだそうとするも、まるで覚えがない。

「えっと誰？」

「誰ですか？でしょう！先輩には敬語を使いなさい！」

「…誰ですか？」

同い歳位に見える少女に敬語を使うのは躊躇いがあるが、ロケット団としては、彼女が先輩だ。俺は、渋々敬語を使った。

「って、覚えてないの！？信じられない！」少女は一々反応が大きい。それに喧しさを感じるも、口にはしない。

「コガネのポケモンセンターでのことよ！」コガネのポケモンセンター？そう言われて思いだした。コガネのポケモンセンターで、アカネの後ろにいた少女だ。

「あなたはロケット団だったんですか！？」

「そうよ。だからあんたを助けようとしたのに、あんたはそれを無視したのよ！」

「そんなことありましたっけ？」
「アカネがロケット団を馬鹿にした直後に勝負に行くなんて、自分がロケット団です。って言ってるようなもんでしょ！あたしが必死に止めたのに、それを無視しやがって！」確かに考えてみればそうかもしれない。あの時は頭に血が上っていた。それでもサカキさんを馬鹿にされて黙ってはいられなかった。
「でも」
「でも、じゃない！確かにあの時は、あたしもムカついたわ。けどね、あたしも必死に耐えたのよ。もしあそこで、ロケット団だとばれてたら、あんた捕まってたわよ！」
「…すいません」
確かに、あの場でロケット団だとばれたら捕まっていた。あの場には、アカネがいたのだ。逃げることなど出来なかっただろう。俺が謝ると、少しは怒気が収まったのか、一度鼻を鳴らし、「まぁ、いいわ」と言った。

「ラプラスは？」
「あ、はい。持ってきました」俺はそう言って、ボールを一つ出し、テーブルに置いた。テーブルに当たり、コトンと音がする。ボールはゆらゆらと揺れ、やがて収まる。少女はそれを掴み、じろじろと見る。そして、椅子から立ち上がり、俺に「出すわよ」と言ってから、ラプラスをボールから出した。ボールから出てきたのは、紛れもなくラプラスだった。少女もそれを確認してボールにしまう。
「確かに、ラプラスを受け取ったわ」　そう言って、再び椅子に座る。テーブルに肘をつき、掌に顎をのせる。そして「それにしても…」と言って、俺を見る。
「はい？」
「あんた、今何やっているの？ラプラスを捕まえることだけが、仕事なわけじゃないんでしょう？」

「当たり前じゃないですか。今はサカキさん、あ、いや、サカキ様を探しているんです」俺がそう言うと、「あー」と納得した様な声を出した。

「なるほどね。ラジオ塔から呼び掛けるだけじゃないんだ。で、結果は…訊くまでもないか」

「…はい」サカキさんがまだ見つかってないから、ラジオ塔占拠の計画は進んでいるんだ。それにもし、サカキさんがロケット団に戻ってきたら、ロケット団員に知れ渡っているだろう。

「まぁ、そう気落ちするな。もし見つからなくても、ラジオ塔から呼び掛ければいいでしょう」励ましてくれているのだろうが、手に顎をのせた、だらしない姿勢で言われても、嬉しくない。

「そう言えば、えっと、…」

「アヤよ」

「アヤ先輩は、アカネのところで何やってるんですか？」俺が言うと、顎をのせた手を入れ替えて、一度ため息をしてから声を発した。

「調査よ、調査。アカネがどんな人間か。どんなポケモンを使うか。他の門下生のこと、とか。そういうことを調べてんの」気怠げにアヤ先輩は言った。よほど面倒なのだろう。

「何でそんなことを？」

「あんたは、馬鹿か！」

「え？」

「コガネのラジオ塔を占拠した時に、一番早く邪魔しに来るのは、ジムの人間でしょうが！」

「あぁ、そっか…」

「だからジムの人間を調べて、いざとなったら対応できるように、

あたしがジムの潜入調査をしてんのよ！」
「なるほど…　」確かに、必要な仕事だろう。

「え、じゃあ、あの、おどおどしていたのは演技だったんですか？」アカネの後ろに、おどおどしながら隠れていたのを覚えている。

「当たり前じゃない。あんなの、演技よ、演技。ジムの皆に取り入るためには、あの性格のほうがいいのよ」でも、疲れるんだけどね、とこぼす。そして、アヤ先輩は、ちらりと部屋に置かれた時計を見て「ああ、もう時間だわ」と言って立ち上がった。

「時間？」
「そ。無理言ってジムを抜け出してきてるのよ。もう行かないと」
「そうなんですか」
「だから、あたしもう行くわ」そう言って、ドアの前まで進み、「あ、そうだ」と言って立ち止まり、振り向く。

「この家は、ロケット団が買い取った家だから、自由に出入りしていいわ。あ、でも。色んな人が使うから汚したら、掃除してね。それじゃ」と言って今度こそ、出て行った。慌ただしい人だ。椅子に座ったまま、アヤ先輩が出て行ったドアをぼんやりと見つめる。自分だけじゃない。皆、サカキさんを探すために頑張っている。そう思うとやる気が出てきた。「よしっ」俺も立ち上がり、家から外に出た。

三十一話

家から出た俺が向かっているのは、ゲートだ。と言っても、くらやみのほらあなに行くわけではない。もし今から行くとしたら、着くのは夜だろう。野宿はできるだけ避けたい。

視線を上に向ければ、視界には、すでにゲートが入っている。直、着くだろう。ゲートを視界に入れつつ、歩く。ゲートに向かうのは、ポケモンをキキョウシティの外で鍛えるためだ。街中では、基本的にポケモン勝負は行われない。それは、物を破壊したり、人の邪魔になるからだろう。だからトレーナーも街では勝負を滅多に行わない。そのため、俺もキキョウシティの外で、ポケモンを鍛えるために、キキョウと外とを区切るゲートに向かっているのだ。

程なくして、ゲートにたどり着いた。ゲートのドアをくぐり、中に入る。そして反対側のゲートを通り、キキョウの外に出た。

そこには、やはりトレーナー達がいた。麦わら帽子を被ったトレーナーが、草むらで虫ポケモンを追いかけていたり、短パンのトレーナー同士が、激しく戦っている光景が、目に映る。草むらからは、マダツボミの塔で散々聞いたマダツボミの声が、聞こえてくる。

俺は、草むらに入り、虫ポケモンを追いかけていた少年に話しかけた。

「ねぇ、君、ちょっといいかい？」

「ん、なんだい？」

少年は追いかけるのをやめて、俺に向き直る。あまり真剣に追いかけていたわけではないらしい。

「ポケモン勝負しない？」と俺が言うと、少年はぱっと顔を輝かせ

て、「いいよ！」と言った。

ポケモンを鍛えるため、と言ったが、俺自身を鍛えるためでもある。ポケモンが強ければ、トレーナーが弱くても、大抵のトレーナーに勝てるだろう。しかしポケモン同士の実力が拮抗した勝負では、トレーナーの実力が如実に現れる。そのため少しでも経験を積み、トレーナーの俺自身が、強くならなくてはならない。

少年と戦った後は、その少年の友達がわらわらと現れ、戦うことになった。結局全員と戦い終わったころには、日も暮れていて、俺はキキョウシティに戻った。次の日の朝、再びキキョウシティから出て、くらやみのほらあなを目指して歩き出した。

昨日とは異なり、道には、早朝のためかトレーナーが少ない。いれば、うっとうしい気もするが、いなければ、少し寂しい気もする。人通りの少ない道を歩く。くらやみのほらあなへの道は、基本的に一本道で、余程の事がない限り迷うことはない。いざとなったら、人に訊けばいいと思っていたが、この人の少なさではそれはできないだろう。

しばらくは、変わる景色を楽しんでいたが、次第にそれも飽きてきた。野生のポケモンが現れるということもなく平穏そのものだ。昼までに着けばいいと思っていたが、この調子なら、楽に間に合うだろう。この旅でいくらか鍛えられた足で、数時間歩いた頃だろうか。洞窟の入り口が見えてきた。

ぽっかりと開いた入り口から中に入る。

「暗っ」

視界は真っ暗だった。洞窟の中は夜でもないのに、闇に満ちていて、

何も見えない。慌ててバッグから懐中電灯を取り出す。昨日トレーナーから、くらやみのほらあなの情報を聞いて、買いに行った物だ。ボタンを押す。懐中電灯から、ぱっと人工的な光が出た。片手に持った懐中電灯を大きく左右に振り、あたりを確かめる。光に照らし出された範囲ではおかしい所はない。普通の洞窟のように、岩があったり、埃っぽい。

なんか、違う

サカキさんといた洞窟ではない気がした。第一、こんな真っ暗なところではない。もしかしたら、暗いのはここだけで、奥に行ったら、明るくなっていて見知った景色があるかもしれないが、なんとなく違う気がするのだ。一応、探すか。もしかしたら、いるかもしれない。そう思い、洞窟の探索を始めた。

懐中電灯で、前方を照らしつつ、壁沿いを歩く。視線の先には、ゴルバットが飛んでいる。時折現れる野生のポケモンに対応してもらっているのだ。この悪い視界では、暗闇に潜むポケモンを見つけるのは、ゴルバットの方がずっと早い。それでも、一応俺も注意して進む。しばらく、壁沿いを進み、二回ほど曲がり角を曲がったころだろうか、もしかしたら、と思った。いや、まだそう決まったわけではない、と自分に言い聞かせて、進む。

そして三つ目の角を曲がり、四つ目の角を曲がり、着いたのは、この洞窟の入り口だった。

「マジか…」

俺がしたことは、この洞窟の外周を一周しただけだったようだ。どうやら、ここは、箱のように閉じられた空間で、これ以上は進めな

いらしい。記憶によれば、くらやみのほらあなは、入り口が三つある。どうやら、この入り口からは、洞窟の奥までは、進めないようだ。

ため息と共に、がっくりと肩を落とす。

当たった…

だが、落ち込むよりも、自分の勘の良さが奇妙だった。つながりのどうくつでもそうだが、俺はここまで鋭い勘を持った覚えはない。偶然勘が当たっただけ、という場合もあるが、妙にその勘が信じられるのだ。なら、その勘でサカキさんの居場所が分かるのではないか、と思ったのだが、まったく勘が働かない。俺の勘は気まぐれにしか働かないようだ。奇妙に思うも、有ったら有ったで便利か、無理矢理に自分を納得させる。どうせ考えても分からないのだ。考えるだけ損だ。

ともあれ、もうここには用はない。ここにいないなら、次を探せばいいだけだ、と心を切り替え、俺はくらやみのほらあなから出た。

外はすっかり夕暮れだった。懐中電灯を切る。中が狭いこともあって、時間はあまり掛かっていないようだ。暗闇の中を歩いてせいだろうか。どこか時間感覚がおかしい。沈みかけの夕日を背景に俺は歩き出した。

三十二話

キキョウシティで、再び俺は朝を迎えた。ここで迎える朝は何度目か。何故かこの町には長いことといた気がする。ポケモンセンターの前で、一度大きく伸びをする。ここの空気は旨い。しばらく、この空気を味わえなくなるのだ。体いっぱいで、感じたかった。一度大きく息を吸い、勢いよく吐き出す。そして俺は歩き始めた。

目指しているのは、エンジュシティ。チョウジタウンに行くにしても、スリバチ山に行くにしても、必ず通らなくてはならない町だ。キキョウとエンジュの距離は近い。少しでも多くのトレーナーと戦いたいが、それはあまり望めないだろう。だが、そのおかげで、早く進むことが出来る。サカキさんを出来るだけ早く見つけるのが、この旅の目的だ。それなら、可能な限り戦わずに進んだ方が本当はいいのだろう。

だが、多くのトレーナーと戦いたいという気持ちも共にある。トレーナーと戦うほどサカキさんを探す時間が減り、サカキさんを早く探そうと、トレーナーと戦わなければ、俺は弱いままだ。これがジレンマなのだろう。

最初は、旅の途中で少しでも強くなれれば、と軽く考えていた。旅では、強さが必要になるかもしれないから。だが、最近は変わってきた。強さに貪欲になってきた、とでも言えばいいのだろうか。一人でも多くのトレーナーと戦い、ポケモンと共に俺も強くなりたいと思ってきた。ゴールドの影響かもしれないし、シロナさんの影響かもしれない。その変化が良い方向に向かうことを祈りたい。

エンジュ、コガネ方面のゲートにたどり着く。後ろを振り向く。そこには、キキョウ独特の家々が立ち並び、夜には光を灯す灯籠が、ぽつりぽつりと立っている。視界の端には、マダツボミの塔がある。初めにキキョウシティを訪れた時と、同じ景色が広がっていた。だが、初めと違い、キキョウシティの様々に思い出が出来てしまった。そんな思いを打ち払うかのように、頭をぶんぶんと左右に振る。一々訪れる町に感傷を持ったら切りがない。前を向き直り、俺はゲートに進んだ。

ゲートから出て、エンジュに向かう。野生のポケモンが現れるような気配はない。そのためか、人通りが多い。エンジュとコガネとキキョウを繋ぐ道が近くにあるのだ。利用者が多くて、当然なのだろう。前通った時は、そんな印象は受けなかったのだが、以前は木が道を塞いでいたので、人通りが少なかったのだろう。人の流れに、合わせるように身を任す。

やがて、以前は木が立っていた場所までたどり着いた。自然とため息をつきそうになるが、寸でで抑える。ため息をつけば、鬱々とした、後ろ向きな感情を、また抱きそうだ。もう後ろを向きたくない。

強くなれば、劣等感とか嫉妬とか感じないほど強くなれば、そんな後ろ向きな感情を抱かない。そう思っていた。だが、強くなくても前を向く努力は出来る。俺はそれをこの旅で学んだ。俺は旅の中で、多くのトレーナーを見てきた。強いトレーナー、弱いトレーナー、色んなトレーナーがいた。そして俺に負けても、腐らずに、もっと頑張って次は勝とう、と前を向き続けるトレーナーを俺は何人も見てきた。きっと、弱いから前を向けないとか、強いから前を向けるとか、そういうことではないのだろう。だから俺も前を向く努力をしよう。そう思った。

木があった場所を通り過ぎ、さあ、エンジュシティに向かおうと思ったら、コガネ側にトレーナーらしき少年がいるのに気づいた。どうしよう。先にエンジュに向かうべきだろうか、と悩んだが、コガネ方面に進んでしまった。やはり、戦いたい。戦えるなら、戦えるだけ。

そして、俺は少年に声を掛けて勝負を挑んだ。

「いけっ、イーブイ！」ボールからは、イーブイが現れる。イーブイは毛を逆立たせ、相手がこれから出すポケモンを警戒する。

「出ろっ、ラッタ！」

少年はラッタを出してきた。ラッタは少年の前に立ち、指示を待っている。だが、視線は決してイーブイから離れない。イーブイも負けじとラッタを睨み、俺の指示を待っている。一瞬の静寂が訪れる。少年に視線を向けると、目があった。

「イーブイ、とっ「あっー！」俺が指示を出そうとした瞬間、少年の後ろから誰かの声が聞こえてきた。なんだ、と少年の背後を見る。少年も、何事か、と後ろを振り向く。そこには、一人の青年がいた。茶色の少し癖のある髪が特徴的だ。

お兄さんは、ずかずかと歩き、少年を押しのけ、俺に向かってきた。「あっ、おい！」と少年が声を掛けるも、それを無視して近づいてくる。その歩みには、どこか鬼気迫るものがある。お兄さんはイーブイの前で立ち止まる。そして、イーブイをじっと見下ろした。

「何する「ううっ…」俺は何するんですか、と声を掛けようとしたが、お兄さんが突如泣き始めたので、躊躇った。少年も突如泣き始めたお兄さんに困惑しているようだ。俺もわけが分からなく、少年と顔を見合わせた。

そしてお兄さんは、そっと大事そうにイーブイを抱きしめた。イーブイも嫌がることなく、寧ろ嬉しそうにお兄さんの胸に顔を擦り付けている。なんだか、俺以上に懐いている気がして、それに少しムッとする。しばらくしておにいさんは満足したのか、イーブイを地面に下ろした。そして周囲の状況に気づいたのか、慌てて潤んだ目をぐしぐしと腕で擦り、改めて俺を見てきた。お兄さんは口を開く。

「恥ずかしいとこ、見せてしもたなあ」とお兄さんは言って、恥ずかしそうに頭をがしがしと掻く。

「はあ…」と気の抜けた返事をする。お兄さんは、はあって何やねん、と一度ツッコミ、真剣な顔して訊いてきた。

「なあ、君、訊きたいことがあるんやけど、ええか？」

「いいですけど…」

「なら質問や、なんで君が家のイーブイ持ってんねん。わいはずっと探しとったんやで」とお兄さんは、コガネ独特の方言で訊いてきた。本当のことを言うべきだろうか。イーブイはコガネで拾ったポケモンだ。野良イーブイかと思って捕まえたのだが、お兄さんのポケモンなら返さなくてはいけないかもしれない。

それは、嫌だ

イーブイは、今や、重要な戦力だ。イーブイが抜けるのは正直痛い。俺が口を濁していると、お兄さんは、そんな俺の反応を見て、「まあ、ええわ」と苦笑しながら言った。そして、しゃがみ込み、イー

ブイの頭を撫でながら言う。

「イーブイは元気そうやし、そんな酷いことされてへんのやろ」
「し、してませんよ」
「分かっとる、分かっとる。君は、イーブイを大事にしてくれてたんやろ」
「はい」その通りだ。戦闘中、無茶な指示を出してしまったことはあるが、決して大事にしていないわけではない。と言うより、こんな俺に従ってくれるイーブイを大事にしないわけがない。

「でもな」お兄さんは言う。「そのイーブイはわいにとっても大事な家族なんや。そいつがいなくなって、どれだけ心配したことかさ」
「…すいません」
「まあ、ええわい。でも少し話聞かせてくれへんか。わいの実家がコガネにあんねん。そこで話そうや」どうしようか。今からコガネに行くとなると、今日一日はコガネから出られない。そんな道草を食っていいのだろうか。コガネに行く暇があるなら、サカキさんを探す行動、つまり、スリバチ山を目指すべきではないだろうか。

「分かりました、行きます。コガネに」
だが、このままでは、イーブイと引き離されるかもしれない。それなら、行って話すべきだろう。説得して、正式にイーブイを貰う。

三十三話

「おお、よう言った兄ちゃん！」とお兄さんは威勢良く言った。よっ、大統領！とでも言いかねない勢いだ。「あ、でも」と俺は言う。お兄さんはそんな俺を不思議そうに見つめた。

「でも、なんや？」

「俺、お兄さんの家知りませんよ」

コガネは大都会だ。ラジオ塔などの目立つ建物なら見つけられるかもしれないが（俺は見つけられなかったが）、普通の民家なんて見つける自信がない。

「なんや自分、そんなこと心配しとんのかい、安心せい。わいがちゃんと案内するわ」と言われたので一安心だ。元々俺は方向音痴のきらいがある。ウバメの森で迷い、コガネで迷い、つながりの洞窟では、おかしな遺跡に迷い込んでしまった。改めて考えてみると、きらいがある、ではなく、正真正銘の方向音痴だ。そんな俺だ。どうしても心配してしまう。

「そうですか、ありがとうございます。」だから素直に感謝した。これで迷うこともない。すると、お兄さんは照れくさそうに「ええよ、ええよ」と手を前でぶんぶんと振り言った。

「おい！」と不意に第三者から声が入る。今まで蚊帳の外だった少年だ。「あ…」正直言ってすっかり忘れていた。そう言えば勝負の最中だったのだ。尤も、途中でお兄さんが乱入してきて、勝負はうやむやになってしまったが。辺りを見回してみても、ラッタはいない。もう勝負にならないと察して、閉まったのだろう。少年は腕を組み、怒っている、と一目で分かる顔で俺を睨んでいた。

「あの、えっと、ごめん」と俺は言って頭を下げた。色々言い訳を考えたが、それで更に怒らせそうで怖いので、素直に謝った。僅かに頭を上げて、ちらりと少年の反応を見る。少年は、未だにむっつりとした顔をしていた。そして「もういい」と一言言って、すたすたと歩いていった。

少年が見えなくなった所で、
「なんや、悪いことしてしもたなあ」と申し訳なさそうな顔で、お兄さんが口を開いた。
「や、別に気にしないでください」
「そんなら、ええのやけど…、そや！自己紹介がまだやったな。自分、名前なんていうん？」
さて、なんと言おうか。俺に名前なんてない。と言うより、あるだろうけど、思い出せない。だからと言って、馬鹿正直に「名前なんてない」とも言えないだろう。なら誤魔化そうか、とも考える。以前ゴールドに名前を訊かれてた時は、「言えない」と答えを濁した。だが、今思うと怪しすぎる。ゴールドのような人間には通用しても、このお兄さんには通用しないだろう。俺なら絶対怪しむ。

ならどう言おうか、と考え込む俺を見て、
「なんや、どないしたん。自分の名前でも忘れたんか？」とお兄さんは訝しげに俺を見て言ってきた。
「えっと、そう！あなたの名前を先に知りたいなあ、と思って」と咄嗟に話の矛先を変えた。少しでも時間を稼ごうとした悪足掻きだ。

「ん、ああ。わいの名前はマサキや。ポケモンセンターにあるパソコンのポケモン預かりシステムもわいが作ったんやで」
「へぇー」と言いつつも、頭の中は？だらけだ。そもそもパソコンなんてあったっけ。そんなの知らないし、使ったこともない。その

システムを作ることはそれほどすごいことなのだろうか。そう考えるが、一方で、自分の名前についても考える。この状況を上手く、くぐり抜けるには、どうしたらいいだろうか。

「それにタイムカプセルを作ったのも、わいやで」
「タイムカプセル？」
「そや。過去の人間と時間を越えて、ポケモンを交換できるんや」
「え、あ、えぇぇ！！時間を越えちゃうんですか！？」自分の名前をどう言おうか、と考えていたが、そんなもの吹き飛んでどこかに行ってしまった。すると、マサキさんは頬を掻きながら、少し困った顔をした。

「まあ、一応時間は越えられるんやけど、ポケモンだけっちゅう、不完全なもんや。将来的には人間もタイムスリップさせたいなあ」

「や、それでも、十分すごいですよ」一度時間を渡っている俺が言うのも何だが、時間なんて、それほど簡単に扱えるものではないだろう。俺の中の常識では確かにそうだ。数百年後の未来で、やっと扱えるような代物だ、と俺は考えていた。それとも俺の常識がおかしいのだろうか。

ふと、サカキさんに言われたことを思い出す。

「お前の常識はおかしい」
「え？」
サカキさんに様々な常識を学んでいる時だった。手頃な岩に座っていたサカキさんが唐突にそう言った。
「どういう意味ですか？」
「そのままの意味だ。例えば、だ。お前はピカチュウというポケモ

ンを知っていたか？」
「知りませんけど…」
「なら、モンスターボールは？」
「知りません…、けど、記憶喪失なんだし、当たり前じゃないんですか？」と俺が言うと、サカキさんは黙って首を横に振った。
「違う。ならお前は時計は何をするものか、知っているか？」と自分の腕にはめられた時計を指さしながら言った。
「それは、勿論。時間を計るものでしょう？」何を当たり前なことを言っているのか。何故こんなことを訊くのか、と疑問の眼差しを向けるも、サカキさんはそれを無視して続ける。
「なら、私がお前に初めて会った時にあげた食べ物は？」
「カロリーメイトですけど…、それが何だっていうんですか？」と俺が言うと、サカキさんは深くため息を吐き、また首を横に振った。明らかに呆れが入っているのが分かる。
「お前は馬鹿だな。本物だ」
「えーと、すいません」
「まあ、いい。お前でも分かるように言うと、お前は基本的にある程度の常識は持っている。だが、ポケモン関連の常識だけが、まるっきり抜けているんだ」と言われて考えてみると、確かにそうだ。俺の記憶の中にはポケモンに関わる知識がまったくない。だが、ポケモンの関わらない常識は、ある程度持っている。
「なんでですか？」
「俺が知るか。だが、そこにお前の記憶を取り戻す鍵があるかもしらないな」

と、このように、俺の常識は不完全だ。それでも、ポケモンの関わらない常識は自信があったのだが、それも揺らいできた。まるで似ているけど、違う世界に来たような気分だ。
「ま、わいのことはこれで分かったやろ。で、君は？」と言われて、どう言おうか考えていたのを思いだした。マサキさんのタイムカプ

セル発言に、すっかり忘れていた。どう言おう。どう言おう。どう言おう。心中で慌てながら考える。そして閃いた。偽名だ。マサキさんとは、イーブイを貰ったら、もう会うこともないだろう。それなら、偽名でも十分通用する。咄嗟に閃いたことだが、それほど悪くない気がした。さて、どんな名前にしようか、と考えて、一つ思いついた名前があった。

「ミズキと。水木卓と言います」この名前の半分は、シロナさんが俺と間違えた人の名前だ。どうせこの名前を使うのは今回限りだ。申し訳ないが使わせてもらおう。

「ほ〜、ミズキ君か。よろしゅうな」とマサキさんは言い、手を差し出してきた。一瞬何だ、と思うも、意図を理解して慌てて、俺はその手を掴んだ。

「なあ、ミズキ君。わい先にコガネに行ってて、ええかな。おかんがめっちゃ心配しとったんや。はよ、見せに行かんと」とイーブイの頭をわしわしと撫でながら言った。

「え、案内はどうなるんですか？」案内なしでは、マサキさん家なんて見つけられる気がしない。

「あー、そやなあ。おかんにイーブイを見せたら、コガネの入り口に行くから、そこで合流や。コガネに来たことあるか？」

「ああ、はい。あります」

「そんなら大丈夫やな」と言って、マサキさんは一つのボールを出し、ポケモンを出した。出てきたのは見たこともないポケモンだった。おそらくジョウトには生息していないポケモンなのだろう。マサキさんはそのポケモンの背に乗った。片腕にはイーブイを抱えている。

「ほな、先行っとるわ」と言いマサキさんは行ってしまった。そして俺も歩き出した。

三十四話

コガネに向けて、足を進める。足取りは軽い。一歩一歩が滑らかに出る。旅をする前と、最も変わったのは、歩き方だ。足場の悪い洞窟や、炎天下の道で体力を意識しながら歩く毎日。少しでも疲れない歩き方を覚えるのは、至極当然なのかもしれない。

道なりに、同間隔で生えている木を流し見ながら歩く。

そう言えば、と思った。最近は頭痛が少なくなった。それは良いことだと思うのだが、　それが嵐の前の静けさに思えてならない。しばらくして、今までの分を取り戻すように、耐えきれないような頭痛が来るのでは、と想像してしまう。それが、杞憂であれ、と願わずにはいられない。

視界には、ゲートが映るようになってきた。少し足を速める。

頭痛と言えば、頭痛と共に奇妙なものを見るのだが、あれは一体何なのだろう。少し考えて、思考を止めた。それを知ろうとすると、心のどこかから声がするのだ。もし知れば、崩れるぞ。全て終わってしまうぞ、と。何が崩れるのか、終わるのか、それは全く分からない。だけど、それは、簡単に無視していいものじゃない気がした。

ゲートに入り、受付にいる人に一礼して、またゲートを出る。眼下には、緑が広がり、所々にはベンチが置かれている。自然公園だ。ポケモンに遭遇しないように草むらを避けて、歩く。空を仰げば、日はまだ高い。だが、できるだけ早く着いた方がいいだろう、と俺は道を急いだ。

コガネシティ、一歩手前にあるゲートで、俺は一息ついていた。片手には缶ジュースを握り、邪魔にならないように、隅に置かれたソファに座っている。缶ジュースは、ゲート内に置かれた自動販売機で買ったものだ。缶を傾け、ジュースを口に流し、飲み込む。そして「はあっ」と息を吐いた。もう一口飲もうか、というところで、受付にいたおじさんに話しかけられた。

「君、道中、大丈夫だったかい？」と言われたので、道中を思い返してみても、取り立てて危険な事はなかったように思われる。
「大丈夫でしたけど…」と俺が言うと、おじさんは安心したかのように顔を緩ませ、「それは、良かった」と嬉しそうに頷いた。
「なんか事件でもあったんですか？」
「ん？ああ、そうだね。最近、ポケモンを奪われる事件が多くてね。少し警戒しているんだ」

ロケット団だ。まず、間違いなく。少しでも、戦力を高めるために皆頑張っているのだろう。ほんとにもうすぐなんだ。ラジオ塔占拠まで。あまり実感がない。

「へー、大変ですね」と相槌を打つ。俺の気のない返事に、おじさんは呆れたようにため息をついた。
「いや、君も他人事じゃないんだから。十分注意しないと」
「あ、はい。気をつけます」
「よろしい」とおじさんは、満足げに頷いた。すると、その時。コガネ側の入り口から誰か入ってきた。マサキさんだ。マサキさんはきょろきょろと辺りを見回して、俺に気づいたのか、近づいてきた。

「なんや、ここにいたのか。探したで」
「あ、すいません」やはり、ゲートの外で待っているべきだったろうか。
「ま、ええわ。はよ、行こうや」
「はい。あ、ちょっと待ってください」と俺は言って、片手に持った缶を口に持って行き、勢いよく傾けた。口の中に溢れる甘ったるい液体を飲み続け、やがて缶から何も出なくなった所で、口を離す。そして、近くにあるゴミ箱に捨てる。

「よし、行きましょう」
「おう。ほな、着いてきてな」と言ってマサキさんはゲートを出た。俺も遅れてその後を着いていった。

コガネは、やはり人が多い。それが、コガネに来て二度目の俺の感想だ。向こう側から歩いてくる、サラリーマン風の男とぶつかりそうになり、慌てて避ける。これで、何度目か。ため息をつきたくなる。少し前を歩くマサキさんはそれに慣れているのか、人にぶつかりそうになる、と言うことはなく、するりと避けて進んでいる。歩いて十分ほど経ったと思うのだが、もう俺は自分がどこにいるのか分からない。一体俺は今、コガネのどの位置にいるのだろう。前を歩くマサキさんの背中だけが頼りである。見失わないように気をつける。

それからしばらく歩き、マサキさんが、今まで歩いていた大通りか

ら脇道に逸れた。俺も遅れてついていく。大通りから出た瞬間、ぐっと人通りが少なくなった。がらん、という言葉が良く似合っている。マサキさんの隣まで小走りで駆ける。

「やっぱり、コガネって人多いですね」心底そう思った。

「せやなあ。わいもここ出て気づいたんやけど、コガネは少し息苦しいなあ」

「あの、まだ着きませんか？」距離を歩いたから、というより、人の多さに疲れてしまった。

「ん、そやなあ。もうすぐや。もうすぐ」

「そう、ですか」確たる証拠はないのだが、なんとなく、このもうすぐは信用できない気がした。

それから五分と掛からずに、ある民家の家までたどり着いた。どうやらここがマサキさんの家らしい。信用しなくて、すいません。マサキさんはその家のドアの前で立ち止まる。そして、ドアを開け、「ただいまー」と言い中に入った。ドアが閉まる前に、俺も中に入る。

「あら、いらっしゃい」と玄関では、マサキさんのお母さんらしい人が出迎えてくれた。手にはイーブイが抱えられている。

「この人がミズキ君やで。今までイーブイを預かってくれたんや」とマサキさんが俺を紹介してくれた。正確には、俺がイーブイを拉致したようなものだが、「預かっていた」の方が聞こえがいいので訂正しない。

「本当にありがとうね。最近、ポケモン攫いが多いから心配してたのよ」とお母さんは、手に抱えたイーブイを撫でながら言う。「ま、こんなところじゃなんだから」と俺は玄関からリビングまで案内された。

「どうぞ」と一杯のお茶をお母さんが運んできてくれた。ことり、と音を立ててテーブルに器が置かれる。
「あ、どうも」と礼を言う。「いえいえ」と言い、お母さんは再び奥に行き、しばらくして戻ってきた。テーブルを挟んで向かい側の席に座る。その隣には、マサキさんの妹だろうか。小さな女の子が座っている。だが、きょろきょろとしていて、どこか落ち着きがない。そして少女は隣に座るお母さんに言う。
「ねえねえ、お母さん」
「ん、何？」
「この人、だあれ？」と俺を指さして女の子は言った。落ち着きがなかったのは、俺への興味からなのだろう。
「このお兄ちゃんはね。いなくなったイーブイを見つけて、今まで預かっててくれたんだよ」

「今まで」という言葉に少し胸が重くなる。俺はこれからも、ずっと、イーブイに俺の下に居て欲しいと思っている。そのために、ここに来たんだ。だけど、マサキさんやお母さん、そしてこの女の子は、これからはイーブイと、また一緒に暮らすものだと考えているのだろう。俺は、そんな人達からイーブイを引き離そうとしているのだ。考えると、少し胸が重くなってしまう。

俺は客観的に見て、悪人に分類される。ロケット団という悪の組織に所属しているのだ。自分が悪人だという自覚はある。だから、サカキさんやアテナさんに命令されれば、どんなことでもする。それが、トレーナーを襲い、ポケモンを奪え、という命令だとしても、ためらわない。それが、ロケット団のためになるならば。

俺にとってロケット団とは、何よりも大きく、重い。全てに優先されるものだ。

だが、その反面。ロケット団の関わらない、至極個人的なことになると、どうしても悪人になりきれない。本来ロケット団としては、ここは問答無用でイーブイを奪い取るべきだ。だが、俺はどうしても想像してしまう。イーブイを奪い取られ、泣く女の子の姿を。それを思うと、胸がぎゅっと苦しくなる。それがロケット団のためならば、俺は顔色一つ変えず実行する自信がある。だが、ロケット団のためという大義名分がないと、俺はここまで脆い。

「へえー！このお兄ちゃんがそうなんだ。お兄ちゃん、ありがとね！」　と笑顔で言ってくるので、「どういたしまして」と目を合わせずに小さくお辞儀した。この笑顔が、俺には痛かった。俺は今からこの笑顔を壊そうとしているのだ。この家に来るまで、いや、この少女に会うまでは、どうにか説得しようと思っていたのだが、その気持ちが少し揺らぐ。

「そんな謙遜することないで。皆、本当に感謝してるんやから」と俺の隣にいたマサキさんが言った。だから、その感謝が痛いんだって。マサキさんには、苦笑いしか返せなかった。

三十五話

和やかな雰囲気で話は続いた。マサキさんも女の子も笑顔だ。時には「あなたの所にいる時、イーブイはどうだった？」などの質問がされるので、悪印象を持たれないように馬鹿な頭を回して、注意して答えたのでそれほど悪くは思っていないだろう。さあ、いつになったらイーブイを引き取りたいことを話そうか、とタイミングを窺っているときだ。

木の軋むような音がしたので、俺は身体を捻らせ、その音の方向を向いた。つられてか、マサキさんも「なんや？」とそっちを向いた。どうやらその音は、部屋のドアが開けられた音のようで、少し視線を下げれば、ドアを頭で押し開けているイーブイがいた。そして部屋に入り込んできたイーブイはマサキさんの足下まで一直線に駆けていった。

今だ、と思った。

「お願いがあるんです」と俺は椅子から立ち上がり、話を切り出した。皆の視線が俺に集まる。それに少し緊張して、唾を飲む。そして少女に視線を向ける。ごめんなさい。心中で謝る。俺は今、イーブイをこの少女から奪おうとしているのだ。だが、この少女を傷つけたとしても、俺はイーブイと共にいたいという気持ちを抑えられなかった。

「俺にイーブイをください」と俺が言うと、皆一様にぽかん、とした顔を浮かべた。お母さんだけが、「あらまあ」と声を発した。余程予想外の事だったのか、それきり誰も動かない。しばし、沈黙が流れる。その沈黙が痛くて、俺は更に言葉を続けた。

「ここにいる皆がイーブイを大事に、ほんとに大事にしているのは分かっています」
例えば、マサキさん。ポケモン勝負の途中に割り込むなんて、どれだけ危険なことか。ポケモンの一撃は容赦なく人の身体を破壊することが出来る。マサキさんもポケモンを持っているのだ。それが分からないわけがない。

それでも、だ。

それでもマサキさんは勝負に割り込んできた。自分の身体など、どうでもいいと。イーブイ以外目に入らなかったのだろう。脇目も振らずにイーブイに駆けより、抱きしめ、涙を流した。その姿は忘れない。

「俺、短い間ですけどイーブイと旅してきたんです。時には馬鹿な指示を出してイーブイを傷つけたり、ろくに回復もさせずに戦わせてしまったりすることもありました」
と俺は言って一度話を止め、皆の反応を見る。マサキさん達は何も言わず、じっと俺を見ていた。真剣に聞いてくれているのが分かる。ありがたい。だが、ここからが本番だ。嫌にのどが渇くので、一度唾を飲み、のどを湿らせる。

「だけどそんな俺に、イーブイは首一つ振らずについてきてくれるんです。俺を信じてくれるんです。それが、どれほど嬉しかったか。その信頼に応えたくて…」
と言って俺は口を閉じた。次に続けようとした言葉が自分でも予想外だったからだ。だが言葉にしようとして、自分がどう思っているのか分かった。

「強くなりたいと思ったんです」

実際に言葉にして改めて実感する。強さを追い求める理由はこんな所にもあったのか。

最初はサカキさんに憧れて、サカキさんみたいになりたくて強くなりたいと思った。初対面のあの姿が忘れられなくて。次はアカネに負けたからだ。あの屈辱は忘れない。いつかリベンジする、と心に誓い、さらなる強さを求めた。最後にゴールド。ゴールドに勝ちたくて、勝ちたくて、勝ちたくて、どうしようもなく勝ちたくて。なくした自信を取り戻したくて、そのために強さを求めた。

だが探してみれば、強さを求める理由はこんな所にもあったのか。

「俺は強くなって、どこまでも強くなって、ポケモン達に一つの傷も負わせないで勝負に勝てるようになることが、その信頼に応える方法だと思っています。でも、そこまで俺が強くなった時にイーブイがいないんじゃ、意味がないんです」

ただ思いつくままに俺は言った。特に深く考えて言ったわけではない。心の奥底から、自然と言葉が出てくるのだ。そして口に出した言葉は、すっと心に染み渡っていった。

「信じてくれたイーブイに俺が恩返しをするために、俺のために、どうか、イーブイください！」

俺は頭を下げた。言いたいことは全て言った。言い切った。もう言葉は出てこない。だから、これで断られたって後悔はない。と言ったら嘘になる。もし断られたら、後悔だらけだ。自分の隠れた気持

ちに気づけた今、イーブイと離れたくないという気持ちは、大きく膨れ上がった。だから断られたら、しつこく食い下がる気もあった。

ぽん、と肩を叩かれる。俺は頭を上げた。俺の肩を叩いたのは、マサキさんだった。

「ええよ」

マサキさんは嬉しそうに顔を緩ませ言った。

「え、いいんですか？」

嬉しいのだが聞き返してしまう。少し声がうわずった。

「うん、ええよ」変わらずにマサキさんは言う。

「な、なんでですか？だってマサキさん達はイーブイを大事にしてたんじゃ」

だから俺も言うのを躊躇ったのだ。なのに、何故こうも簡単に許可するのか。

「実はやな、このイーブイはタイムカプセルの実験で誤ってわいの所に来てしもたんや」

「そう、なんですか」少し俺に似ていると思った。

「せや。だから誰か信頼できるトレーナーに引き取ってもらおうと思ったんや。うちのおかんも妹もトレーナーとしては素人やし。わいも研究で忙しいんや」

「でもそんなトレーナー中々いないねん。せやから、それまで家で

預かってたんやけど、急にいなくなってな。そいで、コガネ周辺を探したんやけど見つからんから、さらに遠くに足を延ばしたら、君と一緒にいるイーブイを見つけたんや」
マサキさんは俺から視線を外し、足下にいるイーブイに視線を向けた。

「そん時は、嬉しかったで。イーブイを見つけたっちゅうのもあるけど、ミズキ君っちゅう、いいトレーナーを見つけられたんやから」
「いいトレーナー…ですか」
俺なんかが、そう呼ばれていいのだろうか。俺には相応しくない気がした。後ろ向きにはならないと誓ったものの、どうしても自分を信じられない。

「そや、ミズキ君はいいトレーナーやで。いいトレーナーっちゅうのは、ポケモンに好かれるもんや。イーブイは十分君に懐いとる」
いいトレーナーは、ポケモンに好かれる。それは少し分かる気がした。だからこそ、そう呼ばれるのは俺ではなく、ゴールドのような人間の方がずっと相応しい。そう考えてしまう。

「で、そんな君の話をもっと聞きたくて、家に招いたんやけど、やっぱり思った通りや。ミズキ君は信頼できるいいトレーナーやで。だからイーブイをあげてもいいと思ったんや」

「ちょっと待ってください」言い切って満足したような顔をしているマサキさんに声をかけた。「ん？」とマサキさんは疑問そうに俺

を見た。

「じゃあ俺が、イーブイを欲しいと言わなくてもくれたんですか？」と俺が言うと、マサキさんはニコッと笑った。

「せやで。わいから言おうと思ってたんやけど、ミズキ君が言ってくれて良かったわ。ミズキ君の気持ちも聞けたしなあ」

俺が熱弁を振るった意味はなんだったのか。そう考えると、途端に恥ずかしくなった。

三十六話

イーブイも貰えたし、そろそろ行こうかな、と思い、俺はマサキさんにそのことを伝えた。しかしすぐさま拒否された。なんでだ、と疑問に思いマサキさんに訊く。やっぱりイーブイはあげないとかは、なしにして欲しい。マサキさんは、窓の側まで歩いていき、カーテンを開けた。そして窓からは夕方を示すオレンジ色の光が入ってきた。

「ほら、もう夜やで。今日は泊まっていったらどうや。そんで、もっと話を聞かせてや」

なあ、オカンええやろ、とマサキさんはお母さんに訊いた。お母さんも勿論いいわよ、と了承する。そしてマサキさんは俺にどや、と訊いてきた。

確かにありがたいのだが、少し不安がある。今まで俺は、俺がロケット団だとばれないように、俺が偽名を使っているのだとばれないように、慎重に言葉を選んで話していた。今までは、それがなんとか上手くいっていたが、このまま話していると、ふとした拍子にボロを出してしまいそうで怖いのだ。

「じゃあ、よろしくお願いします」

だが、偽名のことはばれない気がした。と言うのもこの名前、妙にしっくりくるのだ。例え、背後からこの名前で呼びかけられても、普通に反応できる自信があった。それでもロケット団関係のことを口にしない保証はないが、ただで寝床と食事を確保できるなら、そっちの方がずっといい。

「なら、決定やな」
と言うことで俺は一晩マサキさんの家に泊めてもらえることになった。

「なあ、ミズキ君。君はウバメの森に行ったことあるか？」
夕食の時だった。テーブルには、マサキさんのお母さんの作った料理が湯気を立てて並んでいる。俺は手に持った茶碗を置き、マサキさんの方を向いた。

「え？」
「せやから、ウバメの森や。コガネの下にあるやろ？」
「あぁ、あります。一度だけですけど」
「なら、その森に祠があるのを知っとるか？」
と言われて、はて、そんなものあったろうか、と記憶を探る。あの濃い酸素の匂いが充満する、深い深い、光さえも遮る森の中。俺は祠を見たろうかと思い返してみれば、俺は確かにそこで古ぼけた祠を見ていた。

「はい、一応見たことあります」
「おお、ほんなら話が早い。その祠は何を祀っとると思う？」とマサキさんが言うと、「森の神様！」と俺ではなく、マサキさんの妹

が答えた。

「森の…神様？」

何だそれ、と俺は答えを求めるようにマサキさんを見た。

「そや、森の神様や。昔からあの森には神様がおるって言い伝えられてんねん。悪さをしたら、神様に連れてかれてまうぞ、とかよう言われたわ」とマサキさんは懐かしむように言った。「あ、あの」俺はマサキさんに声をかける。

「神様って、あれですか。本物の神様ですか？」

「ま、ほんまもんの神様ではないな。正体はポケモンやし」

なんだ、そうなのか。別に神を信じてるわけではないが、少し夢を壊された気分だ。マサキさんは、そんな俺の落胆した様子を見て言う。

「神様ではないんやけど、そのポケモン、そんぐらい馬鹿げた能力持っとるで。ほんま神様も真っ青や」

「どういうことですか？」と俺が言うと、マサキさんはニヤリと笑い、自慢げに言った。

「なんと、そのポケモンは自由自在に時間を移動できるんや。」

どや、凄いやろ、とマサキさんは訊いてくる。しかし俺は動けなかった。俺はそのポケモンに心当たりがあった。そしてそのポケモンを従えているトレーナーにも。「マ、マサキさん、そのポケモンの名前は？」

舌が震えていた。

「セレビィや」

セレビィというポケモンを俺は知っている。なんと言っても、俺を過去に送ったポケモンなのだから、忘れるはずもない。だが、俺はそれ以上に考えていなかった。そんな能力を持ったポケモンが、ただのポケモンである筈ないのに。そして同時に思い至る。そのポケモンをゴールドが持っていたという意味に。

改めて、その意味を考えるとよく分かる。ゴールドの異常性が。セレビィは時を越え、神とさえ崇められる存在だ。だが、未来のゴールドは確かにそれを従えていた。

未来のゴールドはそんな境地にいるのか

神の如き存在さえ従える。それがどれほど凄いのか、俺には計り知れない。

「マサキさん、この後、時間取れますか？」

「別に、大丈夫やけど…」

「それなら俺に、ポケモンについて教えてください。俺もっと、ポケモンについて知りたいんです」

だけど、それほど強いなら尚更俺が止まっている時間はない。あきらめるという選択肢は、そもそも俺の中に存在しなかった。

その後マサキさんに、数時間に渡り講義を受けて、へとへとになった俺は、別室に敷かれた布団に飛び込んだ。

「…疲れた」

ここ最近で最も疲れたかもしれない。やはり頭を使うのは、苦手だ。早く寝てしまおうと、俺は電気を消し、布団に潜り、睡魔が襲ってくるのを待つ。だが、感じる疲労感とは逆に睡魔は中々襲ってこない。そのうち、眠くなるだろう、とそのままじっとしていたのだが、やはり眠気は感じない。しょうがなく、目を開け、ぼうっと天井を眺める。

「俺、こんなところで何やってんだか…」俺は、ぽつりと小さく呟いた。

ロケット団のコガネ占拠までもう少し。そのために、アテナさんは昼夜を問わずに働いている。先輩のアヤさんだって、コガネのジムに潜入して、情報収集に勤しんでいる。その他のロケット団員も、少しでも戦力を高めようと、ポケモンを集めている。

なのに、俺は民家の一室で暢気に眠りにつこうとしている。なんだか俺だけ意識が低い気がした。実を言うと、その原因は分かっていた。

俺は少し先の未来から、過去にやってきた。つまり、ほんの少しだが、未来を知っているのだ。俺の知っている未来では、サカキさんはラジオから聞こえてくる、ロケット団復活宣言を聞き、コガネに向かおうとした。なら、その未来は崩せないのではないか。俺がどれだけじたばたしようと、その未来はもう決定事項ではないかと考えてしまう。

つまり、俺がどれだけサカキさんを探し、ロケット団に連れてこようとしても必ずサカキさんは見つからず、サカキさんがロケット団復活に気づくのは、その時、その瞬間のラジオだけではないか、と考えてしまうのだ。

そう考えると、どうしてもやる気が落ちる。同じように、ラジオ塔占拠が成功することも知っているので、俺が何もしなくてもいいだろ、と考えてしまう。

そのことを考え始めたのは最近だが、過去の行動にもなんとなくそれが表れている。

こんなんじゃ、ダメだな。

そもそも、だ。未来は変わらない、という前提で話ているが、未来は簡単に変わるものなのかもしれない。

もっと頑張れ、俺。そう自分に言い聞かせる。そして再び瞼を閉じた。

「色々、ありがとうございます。ほんとお世話になりました」俺はそう言って頭を下げた。時刻は朝。玄関を出てすぐの場所で、俺とマサキさんとそのお母さんと妹さんが、集まっている。妹さんは、どこかまだ寝ぼけ眼である。

「いいのよ、また気が向いたら遊びに来なさい。歓迎するわ」とお母さんは言う。

「えっと、はい、たぶん」はは、と誤魔化すように笑いながら答える。するとマサキさんは、なんやそれ、と笑い質問してきた。

「なあ、ミズキ君。次はどの街に行くつもりや？」
「エンジュシティです。今日中には着けばいいんですけど…」
「ま、大丈夫やろ。道を邪魔しとった木もなくなったし。今はまだ朝や。今日中なら楽勝やろ」
「そうですか。じゃ、俺そろそろ…」
「おお、そか。そんじゃ、気をつけてな。あと、イーブイをよろしくな。大事にしてや」
「はい、じゃ、ありがとうございました。」

もう一度頭を下げてから、俺はマサキさん達を背後に歩き出した。

三十七話

時間のためなのか、昨日のような人の多さは見受けられない。とは言ってもキキョウシティとは比べようもないのだが。

俺の少し前には、眼鏡に、きっちりと分けられた髪が特徴の少年が、難しそうな顔で本を読みながら歩いている。その少年の後を歩く。規則正しく足を出しながら、ビルの隙間に少しだけ顔を出す、ラジオ塔を見る。黒い鉄塔の先端部分が、見え隠れする。ゲートはあの方向で間違いないだろう。

不意に誰かが俺を抜かし、俺の前にに出た。短パンの活発そうな少年だ。どうやらその人は、前を歩く少年と友人のようで、あいさつをして話し始めた。

「なあ、なあ、なあ。知ってるか？最近、スゲェ強いトレーナーがいるんだってよ？」と短パンの少年が言う。すると眼鏡の少年は、本を閉じ、口を開いた。

「何それ。そんなに有名な話？」

「まあ、噂があがるようになったのは、最近だな。でも、むちゃくちゃ強いんだってよ。ほら、この街のジムリーダーのアカネ。あいつも負けたらしいよ」すると、眼鏡の少年は目を丸くした。

「あのアカネが負けたのか。僕らじゃまったく歯が立たないのに。ほんとに強いんだね」

その会話を少し後ろで聞いていた俺は、真っ先にある少年の顔を思い浮かべていた。

「あ、そうだ。最近ロケット団が復活したって噂があるじゃん」
「確かに、そういう噂はあるけど。所詮噂だろ」と眼鏡の少年が言うと、短パンの少年はニヤリと笑い、「どうもそうではないんだな」と言った。

「最近、ポケモンを奪われる事件が多発しているだろ」
「ああ、確かに多いな」
「実はな。それ以外にもポケモン関連の犯罪が増えてるんだぜ。それも、ロケット団復活の噂が流れ始めた頃だ。どうだ、ロケット団復活の信憑性が増さないか？」
「ははっ、ないない。考えすぎだよ。どうせ偶然だって」と眼鏡の少年は笑い飛ばした。

そういうものなんだな、と俺は理解した。どれだけ周りが騒ごうとも、自分の目で見なければ、信じないのだ。そして、そんな人間が大多数なのだろう。

「や、でも、ロケット団は居るんだって。さっきスゴい強いトレーナーの話したじゃん。そのトレーナーがロケット団を手当たり次第に、叩きのめしてるって話だし」
「お前、それどこ情報だよ……」いい加減に信じられなくなったのか、眼鏡の少年は呆れたように言った。

「お前、それ本当か」
俺は、些か険の入った声で問いつめるように声を掛けた。

俺の予想など外れて欲しかった。だが、ある一人の少年の顔が、頭から離れなかった。

短パンの少年は、なにこの人、と眼鏡の少年に視線を送る。眼鏡の

少年は、知らない、と首を横に振る。そして、短パンの少年は再び俺に視線を向けた。

「お前、誰だよ」と短パンの少年は、俺を訝しげに見て言う。警戒しているのか、視線には厳しいものがある。

「いいから、その話は本当なのか」と俺は苛立たしげに繰り返した。すると、短パンの少年は、さらに視線を厳しくした。

「なんだよ、お前。なんで俺がお前に話さなくちゃならないんだよ。」俺は、顔をしかめ、舌打ちを一つした。すると眼鏡の少年は、そんな俺を見て、短パンの少年に言った。

「まあ、なんか事情があるみたいだし、話してやろうよ。そんな意地悪言わないでさ」と短パンの少年をなだめる。短パンの少年は、眼鏡の少年を恨めしげに見て、しょうがないとでも言うように、一つため息をついた。

「分かったよ。で、この話が本当か知りたいんだっけ。俺も友達から聞いただけなんだよね。だから、絶対本当とは言えないなあ」

「じゃ、じゃあ名前は。そのトレーナーの名前は知らないか？噂で聞いただけでもいいからさ」と俺が言うと、少年は首を捻り考え出した。

「忘れたのか？」

「イヤ、もうここまで出てるんだけど……、何だっけな？」

「もしかして」ゴールドではないか、と言おうとしたが、先に少年が思いだしたようで、「あっ」と手を叩き口を開く。

「シルバーだ」

「……誰？」

二人の少年に礼を言って、俺は道の端により、立ち止まり考え出した。シルバーという少年。一体何者だろう。どこまで信じればいいのか分からないが、ロケット団を見つけ次第潰している、という話だ。だが、正義感からの行動ではないだろう。と言うのも、少年に聞いた話から推測したのだ。その話を思い出す。

「なあ、シルバーってどんな奴か分かるか？」俺が言うと、短パンの少年は「ちょっと、待って」と言い、ポケギアを取り出し、誰かに電話をし始めた。そして何事か話し電話を切った。

「アサギにいる友達が、そのシルバーってトレーナーの事を教えてくれたんだけどさ。なんか戦ったことがあるんだって。で、そいつが言うには、目つきが悪く、赤い髪をしてるんだとさ」

「目つきが悪く、赤い髪」鸚鵡のように繰り返す。

「あと、肝心の性格は一言で言うなら、最悪」

「最悪？」

「ああ、戦闘不能状態になったポケモンに、さらに攻撃をしようとしたんだ。そいつは、攻撃が当たる前に、なんとかボールに戻した

んだけど、注意したら、不敵に笑ってこう言ったんだ」

「弱いポケモンに、なんの価値がある」

こんな人間が、正義感から行動しているとは思えない。恐らく、個人的な恨みでもあるのだろう。

「よしっ、決めた」再び俺は歩き出した。一つの決心と共に。

目的地まで歩いていると、不意に声が聞こえた。

「お前は、どこに行こうとしている」暖かみの感じられない、冷たい声だった。あたりを見回してみても、誰も聞こえていないらしく何食わぬ顔で歩いている。

「お前は、どこに行こうとしている」淡々と抑揚のない声が再び聞こえてきた。どうやら空耳ではないらしい。しかも俺にしか聞こえていないようだ。その声に答える。

「ジムに行く。そしてアカネを倒すんだ」

「必要ないだろう。お前の目的はサカキさんを探すこと。本来ならコガネに来ることも、想定外だった筈。これ以上時間を無駄にするな。期限はもう、すぐそこまで近づいている」

事実だった。反論の仕様もない。

「目的を見失うな。お前がすべきことはそれじゃない」

確かに俺は間違っているかもしれない。少なからずそういう自覚はあった。だが、俺はこれだけ正論を言われても、未だアカネと戦う意志が萎えていなかった。

「何故、そうまでして戦いたい」少し考えてから、答える。

「もし勝ったら、少しでも強くなったと思えるから」自分が強くなっているという証拠が欲しかった。シルバーの存在を知って、その思いはより強くなった。そして、その相手としてアカネは相応しかった。なぜならアカネは俺が一度負けた相手だから。もし勝ったら、俺はあの時の俺から成長していることになる。

「つまりはお前のわがまま。自己満足だろう。お前一人が強くなったからといって、ロケット団は変わらない」

「かもしれないな」

「分かっているなら、何故戦う」

「俺、馬鹿だから」それでも、強さの証拠が欲しかった。

そして、俺はジムの門を叩いた。

三十八話

「あれ？」

ドアを後ろに引いたのだが、開かなかった。それなら、と力を入れるも変わらない。もしかしたら、と横にスライドさせるも変わらない。

俺はドアから一歩下がり、頭をひねった。

なんでだろう。考えてみて、浮かんできたのは、時間が早すぎたということだ。さすがに、二十四時間営業じゃなかったか。なんとなく、朝からやっている気がしたのだが、間違いらしい。

どうしようか、とジムの前で佇んでいると、背後から、声がかかる。

「なにしてんねん、あんた」

些か警戒混じりの声に、俺も警戒しながら振り返った。

そこには、腕を組みながら、俺を睨んでいるアカネがいた。

「なにしてんねん、あんた」

アカネは俺を認めると、視線に含まれていた厳しさを緩め、今度は、

呆れ混じりに訊いてきた。

「ジム挑戦に来たんだけど、開いてなくって…」

「そら、そうやろ。今、何時や思ってんねん。んな、朝早くからはやってへんわ」

「そうなんだ…」

ジム初挑戦の俺は、それさえ知らなかった。尤も、これはそれ以前の常識的なことだろうが。

「ってか、なんで来なかったんや、あんた。リベンジ来いって言ったやん」

「言ったっけ？」

俺がそう言うと、アカネは首を傾げ、不思議そうな顔をした。

「あれ、ゴールドに言うように頼んだやけど、聞いてへん？」

「ああっ」そう言えば、いつかゴールドに言われた覚えがある。

「やっぱり、聞いとったんやないか！いつ来るか、思て待っとったのに。あんた全然来うへんやん」

「俺だって、忙しいんだよ」

事実忙しかった。なので俺がそう反論すると、アカネは腰に片手を当て、空いた手の人差し指を立てた。

「なに言ってんねん。ゴールドなんか、次の日来たで！次の日！」

知ってるよ。心中でそう呟く。少し心が重くなるが、それを表には出さない。

「ゴールドは関係ない。で、今から勝負受けてくれるのか？」無理矢理に話題を変える。

「そりゃ、まあ、ええけど」急な話題転換に戸惑いつつも、アカネは言った。

「よし、じゃあ勝負だ。ジムに入れてくれ」

俺がそう言うと、戸惑い気味だったアカネの目に、力が漲るのが分かった。そして、その目が俺を貫く。真っ直ぐに、俺も見返した。

「うん、ええよ！」とアカネは口を大きく開き、嬉しそうに返事をした。だが、目は笑っておらず、今から戦う敵に向けて、敵意を隠そうともしない。それを俺は、黙って見返した。

そして、アカネは鍵を取り出し、ジムのドアを開ける。アカネが中に入ったので、後に続き、俺もジムの中に入った。

アカネの後ろを着いて歩く。アカネがジムの電気をつけてくれたおかげで、あたりを見渡せるようになった。外からでも、分かったのだが、やはりここは天井が高い。飛行タイプにも、不平等がないようにしているのだろうか。

あたりを見ながら、奥に進んでいると、前を歩くアカネが、顔はこちらに向けず、話しかけてきた。

「なあ、あんた、前回より強くなってるか？」

「当たり前だろ」少し嘘をつく。それを知りたくて、ここに来たん

だ。

「そかそか。それは、良かった」声色が、嬉しそうだ。アカネに聞きたいことがあった俺は、訊ねる。

「なあ」

「ん？」

「ゴールドは、強かった？」

俺が訊くと、アカネはしばらく黙った。そして、「あんたは、戦ったことないん？」と前を向き、歩きながら訊いてきた。

「ないよ。でも、強いってことは分かる」

「まあ、強いやつは、なんとなく分かるもんやしな」

「そうそう」言いながらサカキさんやシロナさんを思い浮かべた。

「で、どうなんだ？強いのか」と尋ねてから、「いや、やっぱり今のなし」と取り消す。

「ゴールドは、どういうトレーナーなんだ？」と改めて質問する。ゴールドは強い。それは、間違いないだろう。なら、それ以外のことを訊いておきたかった。

「なんや、そんなことも知らんの。友達ちゃうんかい」アカネは、ため息混じりにそう言った。前を歩くアカネの顔は見えないが、きっと呆れているだろう。

「知らないんだ。教えてくれ」「まあ、ええよ」とアカネは返事してから、「ん～、そやなあ」と考え込むような声を出した。しばらくして、答える。

「案外、頭がええ」

「え」
「あれで、以外と器用に立ち回るんや。力で押してくるかと思たんやけど、相手の一歩先を読んでくるんやわ」
以外だった。俺も、ゴールドは力押しのイメージが強かった。
「特に、逆境には強いで。二回目は、ウチの大逆転負けや」
「へぇ」
「絶対に勝った思たんやけど、そっからひっくり返されたんや。よくあんな策思いつくで」
感心したように言うので、どんな策だったのか訊くと、アカネは言った。
「誰が言うか、アホ。今から戦う敵に、情報なんて与えへんわ」
そんなもんか、と納得して、しばらく歩く。すると、アカネが足を止めた。俺も、足を止める。そしてアカネは振り返った。
「ここが、バトルフィールドや」
アカネの前方には、ドッジボールのコートを、さらに広くしたような姿の、長方形のコートがあった。上を見上げると、ここは、とりわけ天井が高い。視線をコートに戻すと、床に黒い焦げ跡があるのに、気づいた。みんなここで戦っているのか。そう思うと、少し緊張してきた。
「さ、勝負や。位置についてや」
「ん、ああ」

そう返事をして、コートの片一方まで、歩く。歩きながら、深く呼吸をする。緊張を少しでも沈められるように。

「ふう」息を吸う。落ちつけ、俺。自分に言い聞かせる。心臓が伝える鼓動は僅かに速い。まだ、緊張は解けない。

「はあ」

息を吐き出す。負けるわけがない。俺なら勝てる。自分に言い聞かせる。手を一度開き、強く握りしめた。

「ふう」

息を吸う。覚悟を決めろ。そう自分に言い聞かせる。次第に、心が無色になるのが分かる。集中できてきた。コートの端まで近づいてきた。もっと集中したい。歩を遅くする。

「はあ」

息を吐く。コートの端まで来た。集中を切らすな。最後にそう言い聞かせ、歩みを止める。振り向く。

中心線を挟んだ、コートの対極にアカネはいた。コートに引かれた線の一歩手前だ。そこでアカネは、ただ俺を見て、立っていた。

「準備は、ええか？」

耳に届いたアカネの声は、いつもより、少し低く聞こえた。

「ああ」

短く答える。緊張は、もうない。そう思ったが、やはり勝負前の、この時は、緊張する。だが、これがいいのかもしれない。これが、

ポケモン勝負なのだから。

三十九話

ポケモンを出したのは、ほぼ同時だ。俺は相手のポケモンを見て眉をしかめた。

見たことがないポケモンだった。キリンを馬ほどの大きさに縮小したような身体をしていて、尾には二つの目と口がある。

前回と同じポケモンで来たなら、と作戦を立てていたのだが、俺の目論見はこの時点で崩れ去った。

だが、と思い直す。このような状況でこそ、トレーナーの実力が試されるのだ。相手のポケモンが分かっている状況で戦っても意味はない。

なんていい機会なんだ。そう考え直し、改めて前を向く。

宙を舞うゴルバットに動揺した様子は見られない。ゴルバットの奥にいる相手のポケモン。さらに、その奥にいるアカネを見る。

アカネは動かない。ただ、俺とゴルバットの動きを見ていた。視線は鋭い。指の動き一つすら見られている気がする。だが、どうやら自分から動く気はないようだ。待ちに徹している。

それなら、と俺は指示を出す。

「ゴルバット、まだ攻撃はいい。距離をとり続けろ」

指示通りに、ゴルバットは五、六メートルほどあった相手のポケモ

ンとの距離をさらに延ばす。十メートルほど距離を取ったゴルバットは、相手のポケモンの周りを旋回し始める。

まず相手のポケモンについて知りたかった。相手のタイプ、強さ。タイプは相手の技からおおよそ判断できる。

強さも技の射程距離、威力から判断できる。弱いポケモンの水鉄砲は板を割る程度だが、強いポケモンの水鉄砲は岩を割る。それほどの差だ。

風を切り飛ぶゴルバットを見ながら、アカネが言った。

「なんやなんもやってこないんかい。待って損したわ」

ため息でもつきそうな調子でアカネは言った。アカネが動く。そう感じた俺は神経を尖らせた。

「キリンリキ！」

指示を出すアカネの声に、キリンリキと呼ばれたポケモンの耳が僅かに動いた。

「サイコキネシス！」

エスパーか！相手のタイプを判断する。キリンリキは、遠く離れたゴルバットに視線を合わせた。

そして視線を一層強くする。すると、ゴルバットの身体が見えない何かに操作される。おい、おい、おい！。この距離で当たるのかよ。十分距離を取ったつもりが甘かった。だが、問題は威力だ。ここを抜けたらさらに距離を取ればいいだけのこと。そう考え、指示は出

さない。

次の瞬間、轟音が鳴る。

「は？」

口から声が漏れた。見れば上空にいたゴルバットはいない。下を見れば、いた。

ひびの入った床に、力無く倒れ伏しているゴルバットが。

「は？」

状況は理解できた。空を飛んでいるゴルバットが操れた。そして床に叩きつけられた。そういうことなのだろう。

だが、速すぎる。あの速さで叩きつけられたのなら威力はどれほどか。考えるだけで、怖気が走る。同時に理解した。

レベルが違う。

「やっぱ、強すぎたかもしれへんな。そのキリンリキはうちのベストメンバーの一角や。あんたなら大丈夫思たんやけどな。違うポケモンに交換したろか？」

ただただ立ち尽くしていた俺に、アカネが言った。

「舐めるなよ」

「何？」

「いいよ、全力で。俺も、俺のポケモンも負けないから」

強がりかもしれない。それは自分でも感じていた。少なくとも、俺のポケモンとは強さが段違いだ。それでも手加減なんかされたくない。

それが伝わったのかは分からない。だが、アカネはこう答えた。

「分かったわ。うちは絶対に手を抜かへん。全力であんたを倒す。せやから、早くそのゴルバットを交換しい」

そして、未だ俯いたまま倒れているゴルバットに、目を向けた。

「何言ってるんだ？」

俺の言葉を疑問に思ったのか、アカネが疑問の眼差しを向ける。その隙を利用する。

「ゴルバット！」

ゴルバットは動き出した。アカネは指示すら出していない。そして、ゴルバットはキリンリキに一撃加え、再び空に舞う。

「せっこー！死んだふりかいな」

「うるさい！そうでもしなきゃ、勝てないんだよ」

上空にいるゴルバットに指示を出す。

「全力で逃げ回れ、ゴルバット！」

途端に、ゴルバットが先ほどとは比べものにならない速度で飛び出す。馬鹿正直に攻撃しても返り討ちだ。

なら、逃げつつ隙を見つけたかった。

キリンリキの周囲を、ゴルバットがスピードに乗り飛ぶ。いくら強くても狙いが定められなければ当たらないはずだ。

「めっちゃ速いやん。あんた、手抜いてたんか？」

「そうだよ、様子を見てたんだよ」

嘘だ。まるっきり、嘘だ。今のゴルバットは、瀕死の一歩手前。一撃でも当たれば終わりだ。

先ほども死んだふりをしていたわけではない。ただ、立てなかった。それだけだ。

手を抜くわけがない。そんな余裕どこにもない。今も、後を考えずに力を出し尽くしているからこそ、あれほどの速度を出しているのだ。

「キリンリキ、サイコキネシス！」キリンリキは視界にゴルバットをおさめようと、首を振り、目で追う。だが飛び回るゴルバットを追えきれないようで技を発動しない。

アカネはそれに舌打ちをした。そして、次の指示を出した。

「めいそう！」

キリンリキの動きが止まる。目を瞑り、集中しているのが分かる。どうせ、攻撃する気はない。なら力を溜めよう。アカネはそう考えたのだろう。

どうしようか。頭を回す。このまま放っておけば強くなる一方だ。だが、近づいて一撃でも食らったら終わりだ。考えろ。考えろ。

「ゴルバット、エアカッター！」

なら、遠距離から。これなら近づかなくても、いい。だが、これは悪手だった。

ゴルバットが翼から、風の刃を作り出す。だが、それには速度を緩めなければならなかった。アカネはそれを見逃さない。

「キリンリキ！」

「ゴルバット、中止だ。全力で突っ込め！」

すでに、キリンリキはゴルバットに視線を合わせていた。距離から判断すると、すでに相手の射程範囲内だ。今からトップスピードに乗るのは、難しい。つまりは、逃げられない。

それなら突撃することで少しでも相手の動揺を誘いたかった。技が乱れれば、避けられる可能性が出てくる。

「もう一度地面に落としてやるんや、キリンリキ！」

ゴルバットは翼を広げ、つばさをうつの体勢をとり空気を貫き進む。

まだだ、今じゃない。俺は、キリンリキを睨む。相手の空気を感じ

取れ。目で、肌で、毛の一本一本で。

ゴルバットとキリンリキの距離が詰まる。ちょうど、五メートルほどの距離だ。そこでキリンリキの瞳が鋭くなる。今だ。

「あやしいひかり！」

相手が技を発動する一歩手前で目を眩ます。一瞬、ほんの僅かに、光を作る。本来の効果より、格段に効果は落ちるだろう。それでも、良かった。

しかし、予想に反してキリンリキはふらつきの素振りも見せない。思った以上に効果は薄い。

ダメか。思わず顔が歪む。もう指示は出せない。出す時間がない。俺は、ただゴルバットを見るしかできなかった。

だが、さらに予想に反し、キリンリキは攻撃をしなかった。効いていたのか？効果が疑問だった、あやしいひかりはしっかりと効果を発揮していたようだ。

「いけっ、つばさをうつ！」

これ幸いと指示を出す。ゴルバットはそのままキリンリキの背中にぶつかりに行く。だが、アカネも指示を出した。

「後ろ！」

アカネの指示むなしくキリンリキは動かない。そしてゴルバットは切り裂くように、隙だらけの背に翼を当てた。

そのまま、逃げるように離れるゴルバットは、鋭い牙に噛みつかれた。

「は？」

俺はこの日何度目かの疑問の声をあげた。

四十話

俺は力無く床に落ちるゴルバットを見ながら、罪悪感に胸を締め付けられていた。

知らなかった。そんなもの理由にならない。全てのポケモンを知っている人など、この世に存在しない。そして、ポケモン勝負は知らないことが普通なのだ。相手のポケモンが、どんな技を持ち、どんな特徴があり、どんな性格なのか。

知らないから、勝負のなかで、それを見極めなければならない。それをできなかった、俺がダメなのだ。

ゴルバットにとどめを刺した犯人に、恨みがましく視線を向けた。

キリンリキの尾。それは、ぎょろりとした目と鋭い歯を持っている。

そして、それは生きていた。意志を持っていた。

勝負のなかで、その尾の存在には気づいていた。だが、その顔はただのお飾りだろうとさして注目しなかった。

アカネの指示の意味も理解できた。「後ろ！」とは、尾のこいつに指示をしたのだ。俺はそれを見逃した。ヒントは出ていたのに。

「くそっ」

俺は毒づきながら、ボールにゴルバットをしまった。気づけたこと

だ。決して気づけないことではなかった。

「さあ、次は何を出すんや。待ってるから、はよしてや」

急かすアカネの声が耳に入った。切りかえろ。俺は自分に言った。ゴルバットは最低限の役割は果たした。これ以上引きずるな。

「ふう」

一つ息をはき、俺は次のポケモンをどうしようか考える。相手はエスパータイプ。あくタイプの技を使えるポケモンはいない。なら、むしタイプだ。むしタイプも相性の上では勝っている。

一つボールを取り出し、投げる。

「いけっ、ストライク！」

両手の鎌を煌めかせ、ストライクが現れる。威風堂々たるその姿は、俺に安心感を与えた。

「影分身！」

俺の指示に、ストライクが動く。そして、視界には何体ものストライクがうつる。

本体はあくまで一人。その他は分身。実体はない。むしタイプの、ストライクの攻撃は効果抜群だとしても、ストライクはエスパータイプの攻撃をくらわないわけではない。レベル差を考えると、攻撃に当たるわけにはいかなかった。

「ま―た、面倒なことを」

アカネが嫌そうな目で、言った。

ストライクは影分身とともに、キリンリキと少しの距離をおいて、ぐるぐるとキリンリキの周囲を回り始める。

本体をばれずらくする。そういう意味もあった。しかしそれ以上に、時間を稼ぐことが目的だった。

どくとくのキバ。そのキバは、猛毒を仕込んでおり相手の体力を削り取る。そして時間が経てば経つほど、その毒は少しずつ威力を増す。少しずつというのが、重要だった。

最初、相手は気づかない。その威力の低さ故に。攻撃を与えていると、尚いい。毒により減っていく体力を、相手の技の威力が高いのだと錯覚する。

そして、何かおかしいと思った時にはもう遅い。身体中に毒は回っていて、致命的なまでのダメージを与えている。

そして、キリンリキは猛毒状態にある。

ゴルバットは当てていた。その技を。不意打ちのような一撃で。床に倒れ伏したところからの一撃。その時だ。

そのために、逃げた。相手の技を避けつつ、毒によるダメージを与

えながら。途中、俺の判断ミスで落ちてしまったが、それまで逃げてくれていた。

並大抵の攻撃は、キリンリキに効かない。そのなかで期待できるのは、毒によるダメージだけだった。

回り続けるストライクたちを見て、アカネがいい加減煩わしく思ったのか指示を出す。

「後退するんや、キリンリキ！」

大きく後ろに跳び、キリンリキはその輪から、抜け出した。

一瞬だけ思考する。毒以外に僅かでもダメージをと考えたら、追撃すべきだ。ストライクは接近戦用の技しかないのだから。だが、欲を出さずに、逃げ回るなら追う必要もない。

「追撃だ、ストライク。電光石火！」

攻め気をなくしてどうする。逃げ続け、相手に違和感を持たしてもダメなのだ。俺は移動手段としても有能な、電光石火を指示する。

「キリンリキ、サイケ光線！」

キリンリキが出したビームを見て、俺はまたもや悪手を打ってしまったのだと理解した。

キリンリキは、めいそうを行っていた。そのため、技の威力が想像の上をいっているのだ。その上、電光石火はスピードはあるものの、

軌道は一直線。避ける術がない。

見事に直撃したそれに、ストライクは大きく吹き飛ばされた。カウンターで当たったのだ。効いていないわけがない。それでも、ストライクは素早く立て直し、移動する。

少し遅れて、その場にキリンリキの蹄の跡ができる。しとめに来たのだ。だが、すでにストライクはその場にいない。

大きく飛び跳ね、追ってきたキリンリキは、すでに大きく離れているストライクに目をやった。

ストライクも警戒するようにキリンリキを見ながら、俺の指示を待っている。

気づけば、影分身はとっくに消えていた。維持するだけの力がないのだろう。たった一撃で、追い込まれた。

ふと、アカネが言った。

「あんた、なんかやったやろ？」

息をのむ。動揺を顔に出さないよう押さえ込む。作戦がばれたのだろうか。そんな考えが頭を過ぎる。だとしても、教える必要はない。しらばっくれる。

「なんのことか、分かんないんだけど」

「まあ、そりゃ言わんわな」

アカネは、一人頷いた。言わなくても分かっている。そう言ってい

るようだった。

「本来のキリンリキなら、あそこでしとめられる筈なんや」

サイケ光線のあとの一撃。その蹄で、踏みつぶそうとした時のことだろう。

「やけど、それができなかった。僅かに、動きが遅かった。でもそこまで、ダメージ受けた覚えもない。そこで気づいたんや。なんらかの状態異常にかかっていることに」

「へ、へえ」

「ゴルバットのタイプを考えた時に浮かんできたんが、毒。あんた、毒を仕込んだやろ」

正解だ。だが、ポケモンに対する観察力が一定以上あれば気づけることでもあった。自分のポケモンの不自然な体力減少、動き。しかし防ぎようもあることだった。簡単に気づかせてしまったのは、俺のミスだ。

ミスばかりだな。改めて、自分の実力不足に気づかされる。

「で、どうする？キリンリキを替えるか」

一番恐れていたことである。ゴルバットの働きが全てなかったことになる。

「替えへんよ。これで十分やろ。毒状態だとしても、あんたに倒せるとは思えんしな」

全力でやる。それは、さっきアカネが言った言葉である。だが、今俺は間違いなくナメられている。屈辱でしかなかった。自分の弱さに、見下すアカネに怒りに頭が沸き立つ。

だが、そんな頭が急速に冷えた。

思いついた。策を。

その策を頭の中で試行する。有効か。穴はないか。

頭のなかでは、大丈夫だ。僅かに押し勝てる。根比べのようなものだが、勝算はある。

俺は、ボールにストライクを戻す。そして、違うボールから、ポケモンを出す。

「いけ、ランターン！」

四十一話

頭のなかで、状況を整理する。相手のキリンリキは、数段格上。技の威力も体力も、俺のポケモンとは比べものにならないだろう。だが、毒。時間が経てば経つほど俺が有利だ。

手持ちは、俺があと三体。ランターン、ストライク、イーブイ。アカネは、キリンリキしか出していない。あと、五体ポケモンを持っていることも考えられる。

キリンリキ一体に、これ以上手こずらされるわけにはいかない。けりをつける気持ちで、ランターンを出した。

「ランターン！」

指示を出す。俺の声に反応したのは、ランターンだけではない。キリンリキが身構えるのが、分かった。

「ハイドロポンプ！」

ランターンは口から、水をはきだした。その水の勢いは強く、一直線にキリンリキに向かっていく。

アカネは指示を出さない。指示を出すまでもなく、避けられる自信があるのかもしれない。その態度が俺を、イラつかせる。どこまでも、俺を下に見ている。それが、分かってしまうから。

足下に迫り来る高威力の水を、キリンリキは軽く跳ね、簡単に回避する。水は床に打ち付けられ、あたりに水をばらまく。余裕のある

避け方だった。完全に見切られているのが分かる。

「結局は、大技に頼るんかい。そんなん、当たらんわ」

尤もな言葉だった。ハイドロポンプという技は威力だけなら、かなりハイレベルに位置する。だがその分、溜めが大きい。その間に技を予測され、避けるのに十分な時間を与えてしまう。

「ハイドロポンプ！」

ランターンが大きく空気を吸い込む。それに合わせ、キリンリキがまた身構える。避ける準備はできているらしい。ランターンは一度口を閉じ、勢いづけるために、頭を持ち上げる。そして、その頭を振り下ろしながら、水をはきだした。

だが、やはり軽くキリンリキはかわしてしまう。またもや、水は標的を失い、床にぶちまけられた。

「だから、当たらへんって。何やりたいんや。あんたアホやないの」

「ハイドロポンプ！」

「あー、もう！」

この繰り返しだった。ランターンがハイドロポンプで攻撃し、キリンリキがそれを避ける。いつしか、ハイドロポンプの威力は弱まり、みずでっぽうと変わらない威力で打ち出される。それでも、俺は同じ指示を出し続けた。

「もしかして」

何度目のことだろうか。ランターンが打ち出した水は、キリンリキに当たることなく、床を濡らした。そこで、アカネが何かに気づいたかのように言った。

「これも、時間稼ぎ？」

俺は、ランターンに再び指示を出す。キリンリキは避ける。

「ハイドロポンプで攻め続けて、うちに攻める暇を与えへんようにする。それで、毒が回るまでやり過ごす気やないか。」

反応しないようにする。顔に出てしまう。それで失敗しては、話にならない。アカネを無視して、指示を出す。

「そんな考えなら、やめたほうがええで」

キリンリキはまたひょいと跳ね、それを避けた。俺は目を見開いた。今だ。今しかない。長々と喋り続けるアカネ。それを一瞬だけ視界に納め、俺を目標に指をさし、指示を出す。

「今だ、十万ボルト！」

僅かにタメをつくり、ランターンは電気を放出した。その電気はキリンリキには向かっていない。だが、それはキリンリキにダメージを与えることに成功した。

キリンリキの動きが止まり、苦しそうに顔を歪めた。だがそれも一瞬だけで、すぐに顔を戻した。だが、元の顔とは違い、明らかな警戒の色が入っているのが分かる。

「ああ、なるほどそういうことな」

アカネが言った。いつしか、アカネの顔も引き締まっていた。

「そのための、ハイドロポンプ。時間稼ぎするつもりなんて、さらさらなかったんや」

「目的は、あくまでこの床を濡らす、いや、水浸しにすることや」

アカネは床に手を向けた。そこには、ランターンのはきだした水が、床一面に広がっていた。足の踏み場もないだろう。

「せやから、あえて床にうったんや。十万ボルトを。この水浸しの床に。それなら、このびしょびしょの床に足をつけている限り、感電してまうもんな」

当たっている。だから、キリンリキではなく、キリンリキ近くの床を狙った。ちょうど、キリンリキが着地する瞬間を狙って。

「あんたの作戦は分かった。さあ、来いや」

アカネはそう言って、口を閉じた。

ランターンを見る。ランターンは疲れたような目をしながらも、キリンリキを睨んでいた。あれほど大技を繰り出したのだ。疲労して

いてもおかしくない。だが、まだ頑張ってもらわなくてはならない。ここからなのだから。

「ランターン」

「キリンリキ」

呼びかける。それは偶然か、アカネと同時だった。

「十万ボルト！」

「シャドーボール！」

キリンリキの眼前に、黒い力のようなものが急速に集まり、球状のまがまがしいものができた。ランターンも電気を溜める。ばちばちとした音が聞こえる。

そして、打ち出したのはキリンリキのほうが早かった。だが、先にダメージを受けたのはキリンリキだった。キリンリキは痺れを見せながらも、当然倒れはしない。一方、遅れてダメージを受けたランターンは、シャドーボールに見事に直撃した。だが、瀕死状態にまでは陥っていないようだ。

「ああなるほど、この水はそういう効果もあるんか」

水。ランターンとキリンリキは、床に広がるそれで繋がっていた。つまり、ランターンは電気をその水にぶつけるだけでいいのだ。わざわざ距離のあるキリンリキ本体に当てる必要などない。この水がキンリキのところまで、電気を運んでくれるのだから。その上、電気は速い。

つまりは、技を当てる速度なら、キリンリキよりずっと速い。

「ランターン、十万ボルト！」

「もう一回、シャドーボール！」

それでも、キリンリキの攻撃が当たらなくなったわけではない。あくまで、ランターンの攻撃が素早く当たるようになっただけだ。レベルの差を覆せるわけではない。俺は、目に力を込め、戦況を見守った。

「な、なあ、なんで倒れないん？そのランターン」

アカネは、不気味なものを見るような目でランターンを見て言った。ランターンは何度も吹っ飛ばされていた。シャドーボール。サイコキネシス。サイケ光線。その攻撃を避けることなく、その身に受けていた。ランターンも十万ボルトで確実に少しずつダメージを与えている。だが、一与えて十ダメージを受けるようなものだった。半ば予想通りの状況だ。

「言わないよ。言う訳ない。言うのは俺が勝った、その後でだ」

「なんやと、ムカつくこと言いよって」

そう言うアカネは、どこか焦っているように見えた。もうすぐなのだろうか。毒が回り、キリンリキが倒れるのは。期待が頭を出してきた。

だが、「あっ」とアカネが声をあげた。気づいたのか。気づいてしまったのか。そしてアカネが、「特性…」と呟いたので、確信に変わった。気づいている。

「そうだよ、特性だ」

もうもたない。そう判断して、ネタをばらす。隠していても、もう意味はないだろう。

「特性、ちくでん。電気を受けると、体力を回復する」

「水浸しの床にいたのは、キリンリキだけじゃないだろう。だから、ずっと回復していたんだ。回復しながら戦っていたんだ」

水で、ランターンとキリンリキは繋がっていた。そして、ランターンの十万ボルトは常に、その水を狙っていた。それは、キリンリキにダメージを与える一方、ランターンの回復に役立っていた。

四十二話

逃げきれる。ネタをばらしてしまったが、俺はまだそう確信していた。

攻撃すればするほど回復できるこの状況。この状況なら、一撃必殺の攻撃でも食らわない限り大丈夫だ。毒が回るまで逃げきれる。それにランターンは、元々体力が豊富にある。一撃で倒されることもないだろう。

さらに言うならば、ねむるという技をランターンは使える。体力を回復できる技だ。それを使えば、体力の心配もない。

ねごとという技もある。眠った状態でランダムに覚えている技を出す技だ。十万ボルトが確率は決して低いものではない。眠った状態で攻撃し、さらに回復することも可能だろう。

だから、俺はまだ自信を持っていた。

「十万ボルト！」

ランターンは身体を発光させる。そして、溜めた電気を放つ。それは大きな水たまりのようになっている床に当たり、そこに触れているランターン、キリンリキに電気を運ぶ。

キリンリキが避けるために、黄と黒の脚に力をこめるのが分かった。だが、遅い。電気が当たるほうが早かった。なんなくキリンリキはそれに耐える。

キリンリキは強い。それは分かっている。だから、これに耐えるのはまったく不思議ではない。俺が不思議に思ったのはアカネだった。静かだ。口を開くことなく、戦闘を眺めていた。

何か考えている。もしくは、機を待っている。きっとそうに違いない。そう思い俺は考える。

なら、何を狙っている。アカネが考えうる作戦の一つとして、めいそうがある。めいそうで力を溜めて、溜めて、溜める。そして、一撃で相手をしとめる。だが、キリンリキにめいそうをしているような雰囲気はない。

その意味を考える。そして、理解する。時間がないのだ。めいそうで力を溜めている間に、毒で倒れる。そう考えているからこそ、めいそうの指示をしない。

つまり、もうキリンリキは倒れる。

なら、その状況でアカネは何をしようとしているのか。

俺がいろいろ考えていると、アカネは口を開いた。俯き気味のため、表情は見えない。声も小さく、俺にはアカネがなんの指示を出したのか聞き取れなかった。

キリンリキは動くようすがない。どっしりと立ち、キリンリキを見据えている。

何を言ったんだ。疑問に思うも、俺は指示を出す。

「十万ボルト！」

ランターンは俺の指示に従い、電気を放出する。予定通りだ。おかしいところなど、どこにもない。だが不気味に立つアカネを見ると、全てが心配になってくる。

そして、その心配は当たった。

ランターンが放つ電気は身体から離れると、荒々しい音と伴に前に進む。進む筈だった。

だが、それが当然だとでも言いたげに、身体から離れた瞬間勢いよく上に向かっていったのだ。

なんだそれ。ランターンと一緒にポカーンと放心する。どうやらランターンの意志ではないらしい。なら、つまり、どういうことだ。答えは分かっている。

あいつしかいないだろう。

俺は前を見る。にんまりとした顔でアカネはいた。笑いを堪えきれないといった様子だ。

「いやあ、案外上手くいくもんなんやな」

「何やったんだよ」

「なんやろな」

教えてくれる気はないようだ。それなら、自分で考えるしかない。

俺は再び指示を出す。

「十万ボルト！」

「無駄やって」

アカネの言葉通りだった。ランターンが放つ雷光は一メートルも進まないうちに、前に行くのをやめ天井に向かう。まるで見えない壁でもあるようだ。戸惑うランターンにもう一度指示を出す。今度はタイプを替え、水の技。しかし、それも結果は同じだった。何かに操られたように、急激に方向を変えるのだ。

操られる？その言葉は妙に引っかかった。そして、ある考えが頭に浮かぶ。その考えは、俺にとっては最悪だった。少なくともランターンでは、まったく歯が立たないことを意味する。それに、そんな器用なことができるのか、という疑問がある。

「あんたもいろいろ考えて戦ってたんやな。ほんまそれには、感心や」

「あ、うん。ありがとう」

急に褒められたので、そんな返ししかできない。

「でもダメやな。考え過ぎや。そんな戦い楽しくないやろ。ポケモン勝負なんて、自分が楽しんでなんぼやん。もっと、楽しまんと」

その言葉は、親切から出た言葉なのだろう。だが、その言葉は俺を深くえぐった。悪い意味で。普通に戦って、楽しく戦って、それで勝てるのならそうしている。腹の底で、メラメラと何かが燃え始めるのが分かった。それでは勝てないから、俺は苦心しながらも、頭を使っているんだ。その努力を侮辱された。

「勝ち負けなんて、二の次やん。自分が楽しめたら、それで良し。

そう考えたらどんな勝負でも、最高の勝負になるんやで」

負けても楽しめれば、それでいい。そんなことを本気で言っているのか。俺には信じられない。　勝つために俺は戦っているのだ。この勝負に、重いものをかけて戦っているのだ。燃え始めた何かは俺の身体の隅々まで、熱を届けた。

「それがジムリーダーとしての、アドバイスや。さあ、おしゃべりはここまで。もう時間がないからな」

「分かった」

アカネの怒濤の攻撃が始まった。

キリンリキがシャドーボールを飛ばす。避けることもできず、直撃する。ランターンは、陸上で行動を大幅に制限されている。避けることは難しい。かと言って、攻撃もできない。

サイコキネシス。

恐らくだが、キリンリキはそれを使うことで、ランターンの技の向きを操作している。ランターンが遠距離攻撃を得意にしているのもまずかった。ハイドロポンプ、十万ボルト、れいとうビーム。それ

ら全てを操られるのだ。もうランターンでは、キリンリキに技を届かせることができない。

そんなことできるのか、と不思議に思う。実際、やられたことがなかった。だが、圧倒的なまでのサイコキネシスの力強さ。それが、可能にしているのだろう。

「れいとうビーム！」

反撃を試みる。ランターンは体勢を立て直し、技を出す。だが、やはり、あらぬ方向に技は飛ぶ。くそっ。どうすればいいんだ。解決策など浮かばない。

気づけばランターンの、目の前にキリンリキはいた。キリンリキは後ろを向く。そして勢いをつけて、後ろ足で強力なキックを繰り出した。ランターンが飛ぶ。

ああっ。悲鳴が出そうになる口を固く閉じる。それじゃ、あまりに格好悪い。脚の感覚が不意になくなる。自分の足場がなくなる感覚。負け、が見えてきてしまった。脚に力を込め、しっかりと床を確認する。まだだ、まだ負けない。

四十三話

負けたくない。そう確かに思った。だが、心の深いところでは、勝てないとうなだれる自分がいる。今の状況を理解できないほど馬鹿ではないのだ。どうしようもなく絶望的なこの状況を。

負ける。それは勝負において、確実に発生することだ。どちらに転ぶか違うだけで。そして、ある程度経験を積んだからか、最近見えるようになったことがある。

勝ち負けを分ける切れ目だ。

今やもう、俺は負け側に立っている。どう足掻こうと勝てない。勝負の途中でそう気づいてしまった。

「戻れ」

キリンリキの攻撃により、瀕死状態まで追い込まれたランターンをボールに戻す。もはや、アカネを倒すビジョンが浮かんでこない。キリンリキ一体を倒すビジョンすら浮かんでこない。キリンリキは猛毒状態の筈なのだが、それさえ疑わしい。いい加減に倒れろって。今まで戦ったのないほどの体力の持ち主だ。底がまったく見えない。

例えそのキリンリキを倒したとしても、アカネは次のポケモンを出すだけだ。そのポケモンにどうやって勝てばいいのか。俺にはキリンリキと同等のポケモンを倒せる自信がない。つまり、アカネの勝ちは揺るがない。

「ストライク、お願いだ。どうにかしてくれっ」

ポケモンに頼ることしか俺にはできない。結果は、もはや俺がどうしたからといっても変わることはない。ストライクもキリンリキとの戦闘で、身体はすでにボロボロだ。だというのに、現れたストライクは、そんなもの一切見せなかった。その瞳は変わらずに、力を持っている。

ありがたい。が、もうダメなんだ。ここからは消化試合なんだ。大人になった俺が言う。

「ストライク、逃げ回れ。脚を止めず、逃げ続けろ！」

毒により倒れるのを待つ。それだけが俺に残された策であり、唯一の希望だった。

どこで間違ったのだろう。後悔とともに疑問が湧く。湧いて止まらない。勝つためにはどうすれば良かったのだろう。何が足りなかったのだろう。単純に俺が弱かったからだろうか。

ストライクを見る。ストライクは逃げ続けていた。高速で移動するストライク。ストライクがいた場所に一瞬遅れて通るシャドーボー

ル。避けれている。だが、これも時間の問題だ。すぐにとらえられるだろう。

不意にある考えが浮かぶ。ギブアップしてしまおうか。未だかつて、俺はそんなトレーナーを見たことがない。しかし、禁止されているわけでもないだろう。

ストライクは避け続けている。

そんな頑張らなくてもいいのに。そこで気づいた。俺にはもう、やる気がない。負けたくない、という気持ちさえ薄れてしまった。早く終わらないか、とさえ思っているかもしれない。

ストライクは避け続けている。

自分の気持ちを理解した瞬間、沸騰するほど熱かった頭が急速に冷えていく。ぱんぱんに膨らんでいた、やる気をつめた風船。それがしぼんでいくのが分かる。

「もっと、ちゃんとせえや！」

アカネの怒号が響いた。俺は反射的に背筋が伸びた。ポケモンたちも動きを止めていた。俺は、言う。

「何がだよ」

「全部や。あんたの全部が気に入らん。」

「そんなこと言われても」

どうしろと言うのか。

「ポケモンには頑張らせておいて、何あんたは興味なさそうに見と

んねん！」
「別にそういうわけじゃ」
「傍観者気取りも大概にせえよ。あんたは、ポケモントレーナーやろが。トレーナーが諦めたら、ポケモンはどうすればいいんや。ポケモンが一番信頼しているのは、トレーナーなんやで。その信頼を裏切るなや！」

カチン、ときた。

「この状況で、どうやって勝てって言うんだ。諦めたってしょうがないだろ！」

「いくら勝ち目がなくとも、最後までしっかりと見届けるのがトレーナーの義務や。それをあんたは、なんや。死んだような目をしよって」

アカネの反論に言葉がつまる。確かにそうだ、と頷きそうになる。だが、それは悔しかった。負ける人間の気持ちを理解してくれよ。そう言いたくなる。

「なら、俺がこの状況から逆転できるとでも言うのかよ」

「可能性はゼロやない。少なくとも、ゴールドは諦めへんかった」

ゴールドか。違いが、また一つ出てきた。これが、差なのだろう。俺にはなくて、ゴールドにはあるものだ。

「ゴールドと、俺は違うんだ」

「そういう問題ちゃうねん。。最後まで諦めない。そんだけことや

ないか。あんた、そんな根性でこの先やっていけると思っとんのか？なんでトレーナーになったん？それを思い出してみい」

「なんでって」

頭の中に、パッとサカキさんが映し出される。初めて出会った時のあの背中。その背中に憧れた。ああ、なりたいと思った。そしてまずはサカキさんに、最高の部下だと言われるようになりたかった。

そこまで考えて、俺は身体が硬直した。

今の俺を見て、サカキさんは何を言うのだろうか。自分に厳しく、他人にも多くを求めるサカキさん。その目に俺はどう映っている。勝負半ばで諦め、ただ傍観者に徹する俺はどう映っている。

あの鋭い瞳で俺を一瞥し、「使えない」とつぶやく。そんな場面が浮かんできた。

何やってるんだよ、俺。そんなことを言われたくて、強くなるんじゃないだろう。

なにやってんだよ。俺を再度自分に対して嘆いた。手を強く強く握りしめる。

ばたんという音が耳に届き、俺は意識を戻す。見れば、ストライクが倒れていた。キリンリキが攻撃したようすはない。限界だったのか。ごめん。ボールにストライクを戻す。

俺に残された最後の一体。勝ちも負けも、これで全てが決まる。勝

ち目は薄く、敗色濃厚。それが、どうした。勝負に絶対なんてない。もしあったとしても、そんなもの笑い飛ばしてやる。俺はボールに手をかける。さあ、これで終わりだ。最後は楽しもうじゃないか。

「いくぞっ、イーブイ！」

「でんこうせっか！」

策も何もない。ただの電光石火である。指示を出す俺は自然と笑顔になっていた。指示を聞きイーブイも目を細めた。そしてイーブイは一度頷き、直ぐに突っ込んでいく。

世の中に絶対なんてない。だが、大体分かってしまうものだ。俺は負ける。もちろん絶対ではない。しかし、かなりの高確率だ。それを理解して尚、挑む。諦めないとはそういうことでもあるんだろう。だから、最後は納得できる方法で終わらせよう。最後まで、足掻いて足掻いて、足掻く。泥臭いなとは思う。だけど、それもかっこいいことに思えた。

キリンリキに当たる前に、イーブイの動きが止まる。そして、見えない何かによって床に押さえつけられる。四肢はのび、顔まで床に押しつけられ、苦しそうな表情を見せるイーブイ。

「抜け出せ！」

自分で言っておきながら、無茶な命令だ、と内心苦笑する。

だが、意外なことにイーブイが立ち上がろうとしている。足を震わしながら、ゆっくりと立ち上がる。それでもまだサイコキネシスの影響下だ。押しつぶそうとする上がらの何かに、必死に耐えているのが分かる。

「い、いけっ！」興奮混じりに俺は言った。イーブイは最後まで、諦める気はない。それが伝わってきた。

イーブイは上からの圧力に抵抗しながら、一歩足を踏み出す。そしてもう一歩。もう一歩。

途端、イーブイは走り出した。サイコキネシスの影響下からは脱出したようだ。勢いに乗ったイーブイはキリンリキに突っ込む。

だが、当たる前にキリンリキは消えた。イーブイは目標を見失い、勢いそのままに転倒した。

キリンリキを消した主に視線を向ける。アカネは明るい笑顔を顔に浮かべていた。それは決して嫌いな笑顔じゃなかった。そして、口を開いた。

「負けたわ。この勝負、うちの負けや」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3667r/

ボスを探して

2011年11月8日04時11分発行